鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（151）

渡畑遺跡1

二〇一〇年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（151）

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅶ）

渡畑（わたりばた）遺跡 1

（南さつま市金峰町）

2010年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

渡畑遺跡と万之瀬川下流

足形土製品

序　　文

この報告書は，中小河川改修事業（万之瀬川）に伴って，平成８年度，12年度，15年度から平成16年度にかけて実施した南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）に所在する渡畑遺跡の発掘調査の記録（縄文時代及びＡ地点編）です。

本遺跡では，縄文時代中期・後期・晩期，古墳時代，古代，中世，近世の遺構・遺物が発見されました。特に，縄文時代後期と思われる足形土製品は約40ｍ隔てて，隣接する芝原遺跡から出土した足形土製品の一部と接合し，同一個体の土製品であることが判明しました。これは，全国でも類例が殆ど無く，希有な資料となりました。

また，縄文時代中期の阿高式土器や後期の南福寺式土器をはじめ，磨消縄文土器等の出土は，在地の指宿式土器との関連を含め，南九州の縄文時代中期から後期の生活文化を考える上で貴重な資料と考えます。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力いただいた伊集院土木事務所，南さつま市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成22年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　山 下 吉 美

報　告　書　抄　録

ふりがな	わたりばたいせき
書名	渡畑遺跡
副書名	中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅵ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	１５１
編著者名	佐藤義明・小林晋也・日高勝博・上床真・内山伸明
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号（0995 － 48 － 5811）
発行年月日	西暦２０１０年３月３１日

遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積㎡	調査起因
渡畑遺跡	南さつま市 金峰町宮崎 字渡畑	462209	35 － 80	31° 25′ 44″	130° 19′ 22″	2000.8.21 ～ 2001.3.27 2004.3. 2 ～ 2004.3.16 2004.5.20 ～ 2005.3.29	43,400	中小河川改修事業 （万之瀬川）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
渡畑遺跡	散布地	縄文時代 中期		春日式土器・轟ヶ迫式土器 ・阿高式土器	
		縄文時代 後期	ピット・土坑 集石	足形土製品（足首部） 南福寺式土器・指宿式土器・出水式土器・市来式土器・磨消縄文土器・鰯歯縁石器・石斧・石鏃・磨石・敲石	足形土製品は，隣接の芝原遺跡から出土した足部と接合。
		縄文時代 晩期		入佐式土器・黒川式土器 （浅鉢，深鉢）	
		古墳時代	竪穴住居跡	成川式土器	
		古代	竪穴住居跡 古道・ピット	土師器・須恵器・刻書土器・墨書土器・土錘・紡錘車	
		中世	土坑・ピット 溝状遺構 掘立柱建物跡・ 方形竪穴 青磁集積	土師器・青磁・白磁 須恵器・常滑焼・滑石製石鍋・布目瓦・緑釉陶器 土錘・カムイヤキ・合子 古銭（洪武通宝・治平元宝・祟寧通宝）	
		近世	木棺墓（隅丸方形） 土坑墓（円形） 畝間状遺構	薩摩焼・肥前陶磁・古銭（天保通宝・寛永通宝・加治木銭）人骨・数珠玉	畠跡と思われる畝状遺構を検出。

遺跡の概要

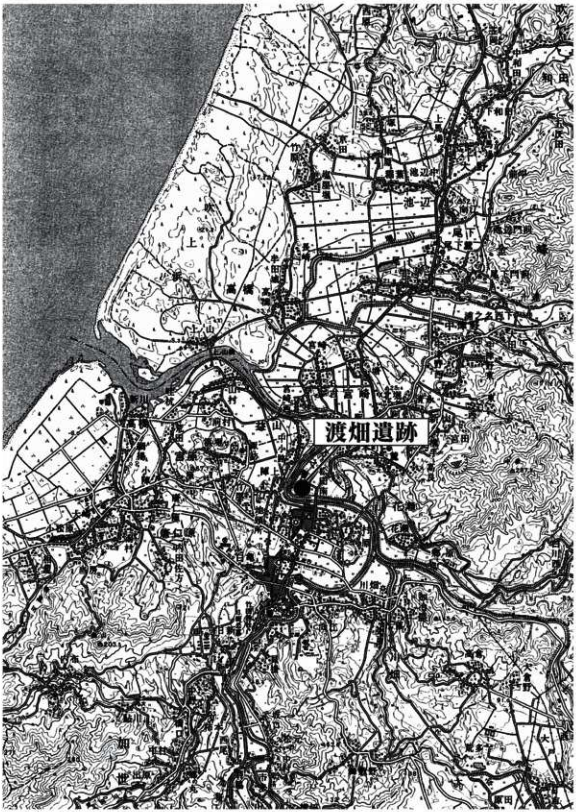
渡畑遺跡は，Ａ地点（調査区北側）とＢ地点（調査区南側）に分けられる。本報告書は，Ａ地点の調査報告及びＢ地点の縄文時代中期から晩期までの調査結果を掲載している。

本遺跡では，縄文時代中期の遺物として春日式土器，阿高式土器，それに後期の主体となる指宿式土器が多数出土した。また，隣接する芝原遺跡で検出された足形土製品と接合する足首部の土製品が出土しており，これは他に類例のない資料である。

縄文時代晩期の遺物では，入佐式土器と黒川式土器の深鉢・浅鉢が出土した。さらに漁撈具として利用されたと思われる「組み合わせ銛」の可能性が高い鰯歯縁石器など，当時の生活文化を知る上において貴重な石器が出土した。

古墳時代以降については，Ａ地点で近世の畠跡と思われる約 3,600 ㎡に広がる畝間条遺構や，古銭などの遺物が検出された。

Ｂ地点においては，多量の成川式土器，古代の土師器や須恵器，中世の青磁や白磁が出土したが，これらは来年度刊行する第２分冊に掲載予定である。



渡畑遺跡位置図（1：50,000）

例　　言

1　本書は，中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う渡畑遺跡の発掘調査報告書である。本書では，A地点の調査報告及びB地点の縄文時代中期から晩期までの調査報告を行う。

2　本遺跡は，鹿児島県南さつま市（旧日置郡金峰町）宮崎に所在する。

3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，県土木部河川課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　発掘調査は，平成12年８月21日～平成13年３月27日，平成16年３月２日～平成16年３月16日，平成16年５月20日～平成17年３月29日にかけて実施し，整理作業・報告書作成は平成20年度，平成21年度に実施した。

5　遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

6　挿図の縮尺は，各図面に示した。

7　本書で用いたレベル数値は，県土木部が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

8　発掘調査における図面の作成，写真の撮影は，各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は，有限会社ふじた，有限会社スカイサーベイ九州に委託した。

9　遺構実測は主に調査担当者が行い，一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。トレースは，整理作業員の協力を得て小林晋也が行った。

10　土器，陶磁器の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て佐藤義明・小林・日高勝博が行った。

11　石器の実測・トレースは，株式会社埋蔵文化財サポートシステム，株式会社九州文化財研究所，株式会社アイシン精機，株式会社パスコに委託し，監修は溝口学・黒川忠広・上床真が行った。

12　遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。

13　本書の編集は，佐藤・小林・日高が担当し，執筆の分担は次の通りである。

第１～４章　・・・・・・・・・・・・・・・・・佐藤・小林
第５章　　・・・・・・・・・・・・・・・・・小林
第６～９章　・・・・・・・・・・・・・・・・日高
第10章　　・・・・・・・・・・・・・・・・内山伸明
第11章　第１節・・・・・・・・・・・・・・・小林
　　第２～５節・・・・・・・・・・・・・・日高
　　第６節・・・・・・・・・・・・・・・上床

14　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，遺物の注記の略号は「ＷＢ」である。

本 文 目 次

巻 頭 図 版
序 文
報 告 書 抄 録
例 言
目 次

第１章　発掘調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の経緯 …… 2
　第４節　中小河川改修事業関連の遺跡と概要 …… 4

第２章　遺跡の位置と環境 …… 9
　第１節　地理的環境 …… 9
　第２節　歴史的環境 …… 11

第３章　調査の概要 …… 15
　第１節　発掘調査の方法 …… 15
　第２節　整理作業の概要 …… 15
　第３節　遺物の分類について …… 16

第４章　遺跡の層位 …… 21

第５章　縄文時代の調査 …… 24
　第１節　調査の概要 …… 24
　第２節　遺構 …… 24
　第３節　遺物 …… 41

第６章　弥生・古墳時代の調査（A地点） …… 117
　第１節　調査の概要 …… 117
　第２節　遺物 …… 117

第７章　古代の調査（A地点） …… 125
　第１節　遺構 …… 125
　第２節　遺物 …… 125

第８章　中世の調査（A地点） …… 131
　第１節　調査の概要 …… 131
　第２節　出土遺物の分類 …… 131
　第３節　遺物 …… 131

第９章　近世の調査（A地点） …… 140
　第１節　遺構 …… 140
　第２節　遺物 …… 148

第10章　化学分析 …… 150
　第１節　観察・分析方法 …… 150
　第２節　結果 …… 150
　第３節　鹿児島県内における赤色顔料の観察例 …… 150

第11章　発掘調査のまとめ …… 152
　第１節　縄文時代の概要 …… 152
　第２節　弥生・古墳時代の概要 …… 154
　第３節　古代の概要 …… 154
　第４節　中世の概要 …… 154
　第５節　南九州における古墳時代の甑形土器 …… 155
　第６節　畝間状遺構について …… 159

写 真 図 版 …… 161

あ と が き

挿図目次

第１図　中小河川事業関連遺跡位置図……7
第２図　渡畑遺跡周辺地形変遷図……10
第３図　周辺遺跡位置図……12
第４図　遺跡グリッド配置図……15
第５図　土層断面実測図（１）……22
第６図　土層断面実測図（２）……23
第７図　確認トレンチ配置図……25
第８図　遺構配置図（１）……26
第９図　遺構配置図（２）……27
第10図　遺構配置図（３）……28
第11図　遺構配置図（４）……29
第12図　集石実測図（１）……30
第13図　集石実測図（２）……31
第14図　土坑実測図（１）……32
第15図　土坑実測図（２）……33
第16図　土坑実測図（３）……34
第17図　土坑実測図（４）……35
第18図　土坑実測図（５）……36
第19図　焼土跡実測図……37
第20図　縄文時代中期掲載遺物出土状況図……42
第21図　縄文時代後期掲載遺物出土状況図……43
第22図　縄文時代晩期掲載遺物出土状況図……44
第23図　縄文時代出土土器実測図（１）Ⅰ Ⅱ類……45
第24図　縄文時代出土土器実測図（２）Ⅲａ類……46
第25図　縄文時代出土土器実測図（３）Ⅲｂ類……47
第26図　縄文時代出土土器実測図（４）Ⅲｂ類……48
第27図　縄文時代出土土器実測図（５）Ⅲｂ類……49
第28図　縄文時代出土土器実測図（６）Ⅳ類……50
第29図　縄文時代出土土器実測図（７）Ⅳ類……51
第30図　縄文時代出土土器実測図（８）Ⅳ類……52
第31図　縄文時代出土土器実測図（９）Ｖａ類……54
第32図　縄文時代出土土器実測図（10）Ｖａ類……55
第33図　縄文時代出土土器実測図（11）Ｖａ類……56
第34図　縄文時代出土土器実測図（12）Ｖａ類……57
第35図　縄文時代出土土器実測図（13）Ｖａ類……58
第36図　縄文時代出土土器実測図（14）Ｖａ類……59
第37図　縄文時代出土土器実測図（15）Ｖａ類……60
第38図　縄文時代出土土器実測図（16）Ｖａ類……61
第39図　縄文時代出土土器実測図（17）Ｖab類……62
第40図　縄文時代出土土器実測図（18）Ｖｂ類……63
第41図　縄文時代出土土器実測図（19）Ｖｂ類……64
第42図　縄文時代出土土器実測図（20）Ｖｂ類……65
第43図　縄文時代出土土器実測図（21）Ⅵ類……66
第44図　縄文時代出土土器実測図（22）Ⅵ類……67
第45図　縄文時代出土土器実測図（23）Ⅶ類……68
第46図　縄文時代出土土器実測図（24）Ⅶ類……69
第47図　縄文時代出土土器実測図（25）Ⅷ類……70
第48図　縄文時代出土土器実測図（26）Ⅷ類……71
第49図　縄文時代出土土器実測図（27）Ⅸａ類……72
第50図　縄文時代出土土器実測図（28）Ⅸａ類……73
第51図　縄文時代出土土器実測図（29）Ⅸａ類……74
第52図　縄文時代出土土器実測図（30）Ⅸａ類……75
第53図　縄文時代出土土器実測図（31）Ⅸab類……76
第54図　縄文時代出土土器実測図（32）Ⅸｂ類……77
第55図　縄文時代出土土器実測図（33）Ⅸｂ類……78
第56図　縄文時代出土土器実測図（34）Ｘａ類……79
第57図　縄文時代出土土器実測図（35）Ｘａ類……80
第58図　縄文時代出土土器実測図（36）Ｘａ類……81
第59図　縄文時代出土土器実測図（37）Ｘａ類……82
第60図　縄文時代出土土器実測図（38）Ｘbc類……83
第61図　縄文時代出土土器実測図（39）Ⅺａ類……84
第62図　縄文時代出土土器実測図（40）Ⅺｂ類……85
第63図　縄文時代出土土器実測図（41）Ⅺｂ類……86
第64図　縄文時代出土土器実測図（42）Ⅺｂ類……87
第65図　縄文時代出土土器実測図（43）Ⅻａ類……89
第66図　縄文時代出土土器実測図（44）Ⅻａ類……90
第67図　縄文時代出土土器実測図（45）Ⅻａ類……91
第68図　縄文時代出土土器実測図（46）Ⅻａ類……92
第69図　縄文時代出土土器実測図（47）Ⅻｂ類……93
第70図　縄文時代出土土器実測図（48）Ⅻｂ類……94
第71図　縄文時代出土製品実測図（１）……95
第72図　縄文時代出土製品実測図（２）……96
第73図　縄文時代石器出土状況図……98
第74図　縄文時代出土石器実測図（１）……99
第75図　縄文時代出土石器実測図（２）……100
第76図　縄文時代出土石器実測図（３）……101
第77図　縄文時代出土石器実測図（４）……102
第78図　縄文時代出土石器実測図（５）……103
第79図　縄文時代出土石器実測図（６）……104
第80図　縄文時代出土石器実測図（７）……105
第81図　縄文時代出土石器実測図（８）……106
第82図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（１）……118
第83図　古墳時代出土遺物実測図（２）……119
第84図　古墳時代出土遺物実測図（３）……120
第85図　古墳時代出土遺物実測図（４）……121
第86図　古墳時代出土遺物実測図（５）……122
第87図　古墳時代出土遺物実測図（６）……123
第88図　土坑実測図……125

第89図　古代出土遺物実測図（1）……126
第90図　古代出土遺物実測図（2）……127
第91図　古代出土遺物実測図（3）……128
第92図　古代出土遺物実測図（4）……129
第93図　中世出土遺物実測図（1）……132
第94図　中世出土遺物実測図（2）……133
第95図　中世出土遺物実測図（3）……135
第96図　中世出土遺物実測図（4）……136
第97図　中世出土遺物実測図（5）……137
第98図　中世出土遺物実測図（6）……138
第99図　畝間状遺構内遺物実測図（1）……140
第100図　畝間状遺構検出状況（1）……141
第101図　畝間状遺構検出状況（2）……142
第102図　畝間状遺構検出状況（3）……143
第103図　畝間状遺構検出状況（4）……144
第104図　畝間状遺構検出状況（5）……145
第105図　畝間状遺構検出状況（6）……146
第106図　畝間状遺構検出状況（7）……147
第107図　畝間状遺構内遺物実測図（2）
近世出土遺物実測図……148
第108図　時期不明遺物実測図……149
第109図　スペクトル図……150
第110図　指宿式土器（上水流遺跡出土）……152
第111図　足形土製品出土状況図……153
第112図　蒸気孔の形態分類模式図……158
第113図　南九州の地域区分と甑形土器出土遺跡…158
第114図　薩摩半島及び鹿児島湾岸地域の甑形土器…158
第115図　川内平野の甑形土器……158
第116図　えびの盆地の甑形土器……158
第117図　都城盆地の甑形土器……158
第118図　肝属平野の甑形土器……158
第119図　畝間状遺構検出状況……160

表　目　次

表1　中小河川改修事業関連遺跡一覧表……6
表2　中小河川改修事業に関わる遺跡の調査経緯…8
表3　周辺遺跡一覧表……13
表4　石器分類表（1）……16
表5　石器分類表（2）……17
表6　石材分類表……18
表7　A地点の層位……21
表8　B地点の層位……21
表9　土坑一覧表……36
表10　ピット一覧表（1）……38
表11　ピット一覧表（2）……39
表12　ピット一覧表（3）……40
表13　縄文時代中期出土土器観察表……107
表14　縄文時代中・後期出土土器観察表（1）……107
表15　縄文時代中・後期出土土器観察表（2）……108
表16　縄文時代中・後期出土土器観察表（3）……109
表17　縄文時代中・後期出土土器観察表（4）……110
表18　縄文時代中・後期出土土器観察表（5）……111
表19　縄文時代中・後期出土土器観察表（6）……112
表20　縄文時代中・後期出土土器観察表（7）……113
表21　縄文時代中・後期出土土器観察表（8）……114
表22　縄文時代晩期出土土器観察表（1）……114
表23　縄文時代晩期出土土器観察表（2）……115
表24　縄文時代土製品観察表……115
表25　縄文時代出土石器観察表……116
表26　弥生・古墳時代出土遺物観察表……124
表27　古代出土遺物観察表（1）……130
表28　古代出土遺物観察表（2）……130
表29　古代出土遺物観察表（3）……130
表30　中世出土遺物観察表（1）……138
表31　中世出土遺物観察表（2）……139
表32　中世出土遺物観察表（3）……139
表33　中世出土遺物観察表（4）……139
表34　畝間状遺構出土遺物観察表（1）……149
表35　畝間状遺構出土遺物観察表（2）……149
表36　畝間状遺構出土遺物観察表（3）……149
表37　近世出土遺物観察表……149
表38　時期不明遺物観察表……149
表39　成分分析表……150
表40　鹿児島県内出土赤色顔料観察表……151
表41　蒸気孔の形態分類……158

写真・図版目次

巻頭カラー１　渡畑遺跡と万之瀬川下流
巻頭カラー２　足形土製品
写真１　人骨出土状況……2
写真２　成川式遺物出土状況……3
写真３　円形粘土塊検出状況……3
写真４　近世溝完掘状況……3
写真５　カマド状遺構検出状況……4
写真６　指宿式遺物出土状況……4
写真７　石組井戸跡検出状況……4
写真８　上空から見た渡畑遺跡周辺の様子……9
写真９　石材分類写真（１）……19
写真10　石材分類写真（２）……20
写真11　Ｂ地点北側土層断面……21
写真12　Ⅰ類１……45
写真13　Ⅴａ類122……54
写真14　Ⅴａ類164……60
写真15　Ⅵ類（底面の様子）……67
写真16　Ⅶ類286……68
写真17　足形土製品……95
写真18　鋸歯縁尖頭器・鋸歯縁石器……100
写真19　電子顕微鏡画像……150
写真20　足形土製品出土状況……153

図版１　①上空から見たＢ地点調査区……161
　　②Ｂ地点調査区……161
図版２　①Ｂ地点北側土層断面状況……162
　　②Ｂ地点東側土層断面状況……162
図版３　①Ｂ地点遺構検出状況（１）……163
　　②Ｂ地点遺構検出状況（２）……163
図版４　①Ｂ地点ピット検出状況（１）……164
　　②Ｂ地点ピット検出状況（２）……164
　　③Ｂ地点土坑検出状況（１）……164
　　④Ｂ地点土坑検出状況（２）……164
　　⑤Ｂ地点集石１号検出状況……164
　　⑥Ｂ地点集石２号検出状況……164
　　⑦Ｂ地点集石３号検出状況……164
　　⑧Ｂ地点焼土跡検出状況……164
図版５　①Ｂ地点遺物出土状況（１）……165
　　②Ｂ地点遺物出土状況（２）……165
　　③Ｂ地点遺物出土状況（３）……165
　　④Ｂ地点遺物出土状況（４）……165
　　⑤Ｂ地点遺物出土状況（５）……165
図版６　①Ａ地点畝間状遺構検出状況（１）……166
　　②Ａ地点畝間状遺構検出状況（２）……166
　　③Ａ地点畝間状遺構検出状況（３）……166
図版７　縄文時代後期ほかの土器……167
図版８　縄文時代中期の土器……168
図版９　縄文時代中・後期の土器……169
図版10　縄文時代後期の土器（１）……170
図版11　縄文時代後期の土器（２）……171
図版12　縄文時代後期の土器（３）……172
図版13　縄文時代後期の土器（４）……173
図版14　縄文時代後期の土器（５）……174
図版15　縄文時代晩期の土器……175
図版16　縄文時代後期～晩期の石器（１）……176
図版17　縄文時代後期～晩期の石器（２）……177
図版18　弥生・古墳時代出土遺物（１）……178
図版19　弥生・古墳時代出土遺物（２）……179
図版20　古墳時代出土遺物（３）……180
図版21　古代出土遺物……181
図版22　中世出土遺物（１）……182
図版23　中世出土遺物（２）……183
図版24　中世出土遺物（３）
　　畝間状遺構内遺物・時期不明遺物……184

第１章　発掘調査の経緯

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護と活用を図るため，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて各開発関係機関との間で協議し，諸開発との調整を図っている。この協議に基づき，鹿児島県土木部河川課（以下「県土木部」）は，中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町（現南さつま市）における事業計画実施に先立って，対象地域内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会文化課（現文化財課，以下「県文化財課」）に照会した。

これを受けて県文化財課，金峰町教育委員会が平成５年度に分布調査を実施したところ，事業区域内に万之瀬川川底遺跡，松ケ鼻遺跡，持躰松遺跡，渡畑遺跡，芝原遺跡，上水流遺跡の６遺跡の所在が判明した。この結果を受けて，県土木部・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県立埋文センター」）の三者で協議した結果，対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとなった。

確認調査は，平成８年９月25日から11月25日の期間に実施した。その結果，予定地において約43,400㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された。

これを受けて，渡畑遺跡の調査は県立埋文センターが担当し，平成12年度に持躰松遺跡隣接部分（Ａ地点）と河川側（Ｂ地点），平成15年度に樋門隣接部分（Ｂ地点），平成16年度に樋門部分から下流部分（Ｂ地点）の本調査を実施した。

なお，渡畑遺跡はＡ地点とＢ地点との間にあたる未調査部分が約29,000㎡あり，今後河川改修事業を行う際には発掘調査が必要である。

整理作業に関しては，平成８年度から平成16年度にかけての発掘調査中に遺物の水洗・注記・接合作業等を並行して行い，本格的な整理作業を平成20年度より平成21年度にかけて他の万之瀬川流域の遺跡群と同時進行の形で県立埋文センターが行った。

報告書は，平成21年度にＡ地点及びＢ地点の縄文時代中期～晩期の調査について刊行することとした。Ｂ地点の古墳時代から近世までの調査分については，平成22年度に刊行する予定である。

第２節　調査の組織

１　本調査

⑴平成12年度

事業主体	鹿児島県土木部河川課
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査・企画	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長	井上　明文
調査企画	次長兼総務課長　黒木　友幸
調査課長	新東　晃一
主任文化財主事	
兼第一調査係長	青崎　和憲
主任文化財主事	中村　耕治
調査担当	文化財研究員　栗林　文夫
文化財研究員	福永　修一
文化財研究員	上床　真
文化財調査員	橋口　亘
事務担当	総務係長　有村　貢
主事	溜池　佳子
調査指導	鹿児島大学歯学部
助手	竹中　正己

⑵平成15年度

事業主体	鹿児島県土木部河川課
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査・企画	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長	木原　俊孝
調査企画	次長兼総務課長　田中　文雄
調査課長	新東　晃一
主任文化財主事	
兼第一調査係長	池畑　耕一
主任文化財主事	中村　耕治
調査担当	文化財主事　湯之前　尚
文化財主事	日高　正人
文化財主事	富山　孝一
事務担当	総務係長　平野　浩二
調査指導	広島大学文学部
教授	河瀬　正利
西南学院大学文学部	
教授	高倉　洋彰

⑶平成16年度

事業主体	鹿児島県土木部河川課
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査・企画	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長	木原　俊孝
調査企画	次長兼総務課長　賞雅　彰
調査課長	新東　晃一

	主任文化財主事	
	兼第二調査係長	彌榮　久志
	主任文化財主事	長野　眞一
調査担当	文化財主事	抜水　茂樹
	文化財主事	富山　孝一
	文化財主事	石原田高広
	文化財研究員	黒川　忠広
	文化財研究員	上床　真
事務担当	総務係長	平野　浩二

2　報告書作成事業

⑴平成20年度

事業主体	鹿児島県土木部河川課
作成主体	鹿児島県教育委員会
調査・企画	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所長　宮原　景信
作成企画	次長兼総務課長　平山　章
	次長　池畑　耕一
	調査第一課長　青崎　和憲
	主任文化財主事
	兼調査第一課第二調査係長　井ノ上秀文
作成担当	文化財主事　溝口　学
	文化財主事　佐藤　義明
	文化財主事　木之下悦朗
	文化財主事　黒川　忠広
	文化財研究員　上床　真
事務担当	総務係長　紙屋　伸一

⑵平成21年度

事業主体	鹿児島県土木部河川課
作成主体	鹿児島県教育委員会
調査・企画	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所長　山下　吉美
作成企画	次長兼総務課長　齊藤　守重
	次長　青崎　和憲
	調査第一課長　中村　耕治
	主任文化財主事
	兼調査第一課第二調査係長　宮田　栄二
作成担当	文化財主事　溝口　学
	文化財主事　小林　晋也
	文化財主事　日高　勝博
	文化財研究員　上床　真
事務担当	総務係長　紙屋　伸一
企画担当	文化財主事　佐藤　義明

⑶報告書作成指導委員会

平成21年12月１日　次長ほか６名

⑷報告書作成検討委員会

平成21年12月11日　所長ほか11名

第３節　調査の経緯（日誌抄）

調査の経緯については，調査日誌をもとに主な出来事を月単位で表した。

【平成12年度：実働119日】

（平成12年８月21日～平成13年３月27日）

8・9月

・重機による表土剥ぎ取り。
・プレハブ設置場所の造成。
（芝原遺跡の調査と併行して作業を行う。作業員は10月から湊畑遺跡へ移動。）

10月

・重機による表土剥ぎ取り。
・プレハブ設置。
・芝原遺跡より移動。
・グリッド杭打ち。
・Ｘ～Ｚ－１・２区表層掘り下げ。

11月

・表層掘り下げ（Ｗ～ｂ－１～５区）。
・溝状遺構検出（Ｘ～Ｚ－２・３区，ａ・ｂ－３・４区，Ｚ－４区）。
・土坑墓検出。
・人骨出土（Ｘ・Ｚ－２・３区　写真１）。

写真１　人骨出土状況

・土坑墓検出（Ｗ－２・３区，Ｙ－２区）。
・中世同安窯青磁碗出土（Ｙ－２区溝状遺構内）。
・Ⅳｂ層理土ピット検出（Ｙ・Ｚ－２・３区）。
・竪穴建物跡検出（Ｚ－２・３区，Ｖａ層上面）。
・中世掘立柱建物跡検出（Ｘ・Ｙ－１～３区，３間×３間）。
・重久淳一氏（隼人町教育委員会）来跡（24日）。

12月

・表土剥ぎ（Ｚ・ａ－４・８区）。
・表層掘り下げ（Ｚ・ａ－５・６区，ａ－４区，Ｘ～Ｚ－14～18区）。
・Ⅵ層上面検出（Ｗ～Ｚ－１～３区）。
・Ⅴｂ層理土ピット検出（Ｘ－２区）。
・ピット内より土師器皿出土（Ｚ－２区）。

・土坑第78号人骨取上(W－2区)。
・柳原敏昭氏(東北大学助教授)来跡(11日)。
・本田道輝氏(鹿児島大学助教授)来跡(19日)。
・伊集院土木との現地協議(19日)。
・藤田明良氏(天理大学教授)他６名来跡(22日)。

1月
・Ⅵ～Ⅷ層掘り下げ(W～ａ－１～４区，W～Z－４区)。
・表層掘り下げ(Y～ａ－18・19区)。
・古道検出(W～Z－２・３区)。
・竪穴建物跡検出(W－４区)。
・カマド状遺構検出(X－１区)。
・成川式土器出土(W－１・２区，写真２)。

写真２　成川式土器出土状況

2月
・Ⅺ層上面検出(W～Y－１～４区，ａ－３～13区)。
・X・Ⅺ層掘り下げ(Z－５～13区)。
・畠畝検出(A～I－21～29区)。
・Ⅲ層掘り下げ(A～C－26～29区)。
・川側落ち込みライン確認(A～D－28・29区，F～K－30～39区，Y・Z－16～29区)。
・石製品出土(W－３区)。
・竪穴建物跡検出(W－３・４区)。
・中世畠畝検出(A地点)。
・中世畠畝より白磁・青磁出土(A地点)。
・畠畝空中写真撮影(A～I－21～29区)。
・完形土器出土(Ⅺ層より，Z－３区)。
・集石検出(Z－９区，№1363・1364)。
・永山修一氏(ラ・サール学園)来跡。

3月
・Ⅺ層掘り下げ(U～W－１～３区)。
・Ⅲ層掘り下げ(A～D25・26区)。
・Ⅶ層掘り下げ(A～E－26～29区)。
・円形粘土塊検出(W－１区，写真３)。

写真３　円形粘土塊検出状況

・溝状遺構検出(№1213～1216，U～W－１～３区)。
・大溝内から青銅製鏡出土(U～W－１～３区)。
・ピット検出(U・V－１・２区)。
・陶磁器片が混入する中世焼土検出(A～E－28～29区)。
・竪穴建物跡検出(U－３区)。
・平成12年度調査終了

【平成15年度～実働13日】
(平成16年３月２日～平成16年３月16日)

3月
・表土剥ぎ(V・W－５区)。
・ピット検出(V・W－５区)。
・X・Ⅺ層掘り下げ(V・W－５区)。
・平成15年度調査終了。

【平成16年度～実働63日】
(平成16年５月20日～平成17年３月29日)
＊平成16年８月～17年１月までは調査中断。

5月
・表土剥ぎ・掘り下げ(W～Y－５～７区)。
・ピット検出(Y－６区)。
・竪穴住居跡検出(№1931，Y－６区)。

6月
・芝原遺跡にて，足形土製品の足部が検出。渡畑遺跡の足首部土製品との接合に成功。
・ピット検出(W～Y－５～７区)。
・竪穴住居跡検出(２・３号)。
・土坑検出(№1951・1952)。
・竪穴住居跡ピット検出(２・３号)。
・森脇広氏(鹿児島大学教授)・和田るみ子氏(新和技術コンサルタント)来跡。

7月
・X層掘り下げ(W－６区)。
・ピット検出(W－６区)。
・板倉有大氏(九州大学大学院)来跡。
・近世溝掘り下げ(W－６・７区，写真４)。

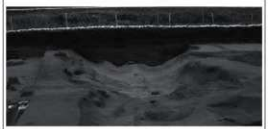


写真４　近世溝完掘状況

2月
・Ⅸ・X・Ⅺ層掘り下げ(V～Y－５～11区)。
・ピット検出(V・W－７・８区)。
・鉄生産関連遺構検出(X・Y－８・９区)。
・石鍋出土。桑水流俊一氏(鹿児島読売記者クラブ)来跡。

・大澤研一氏（大阪歴史博物館）来跡。
・橋口亘氏（坊津町教育委員会）来跡。

3月

・知層掘り下げ（W～Y－5・6区）。
・縄文時代晩期土坑検出（X－5区）。
・カマド状遺構検出（№2061，2155，1991大溝内，写真5）。

写真5　カマド状遺構検出状況

・集石検出（№2202・2203，X・Y－5・6区）。
・ピット検出（X・Y－5・6区）。
・指宿式土器出土（W～Y－5・6区，写真6）。

写真6　指宿式土器出土状況

・橋本達也氏（鹿児島大学総合研究博物館助教授）来跡（2日）。
・石組井戸跡検出（№2164，W－7区，写真7）

写真7　石組井戸跡検出状況

・西村誠氏・大濱春代氏（鹿児島国際大学生）来跡（14日）。
・伊集院土木部との現地協議（17日）。
・岩永勇亮氏・榊原えりこ氏・真邊彩氏（鹿児島大学生）来跡（24日・29日）。
・調査終了。

第4節　中小河川改修事業関連の遺跡と概要

1　関連遺跡の概要

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴い，調査を実施することになった遺跡は，渡畑遺跡を含めて6遺跡である。ここでは，報告書の刊行年度順に概要を示すことにする。尚，各遺跡の検出遺構及び出土遺物等の詳細については表1に示し，各遺跡の場所については第1図に示した通りである。

(1)南田代遺跡

鹿児島県南九州市川辺町田部田に所在し，万之瀬川流域右岸の自然堤防上に立地する。渡畑遺跡とは東南約4,600m離れた場所に位置する。

南田代遺跡では，縄文時代～中世の遺構や遺物が発見された。中でも，縄文時代前期の層から検出された石斧埋納遺構や剥片集積遺構は，当時の生活様式を知る上でたいへん貴重な資料となるものである。また，前期出土土器（轟式土器・曽畑式土器・深浦式土器）及び石器（石鏃等）も多量に見つかった。

(2)古市遺跡

南九州市川辺町永田に所在し，万之瀬川左岸の自然堤防上に立地する。南田代遺跡の東側に隣接しており，渡畑遺跡とは約4,700m離れた場所に位置する。

古市遺跡では，弥生時代～中世の遺構や遺物が発見された。特に，弥生時代中期の出土土器（山ノ口式土器・黒髪式土器）は，古市遺跡から1kmほど離れた内陸部にある寺山遺跡出土の同時期の遺物（須玖式土器）との関連性を考える上で興味深い遺跡となった。

(3)持躰松遺跡

南さつま市金峰町宮崎に所在し，万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する。渡畑遺跡A地点の北側に隣接しており，本遺跡との関連性も高い。

持躰松遺跡では，縄文時代晩期から近世までの遺構や遺物が発見された。縄文時代後期に出土した土器（南福寺式・出水式），晩期の出土土器（入佐式，黒川式）については，渡畑遺跡から出土したものと類似点が多い。弥生時代は，終末期の在地系土器が豊富に出土し，中世前半期においては，掘立柱建物跡や溝状遺構・土坑墓等が確認された。また，それに伴い，県

内では例を見ないほどの多種多様な輸入陶磁器と，東海地方や近畿・瀬戸内地方から流入したと考えられる国産陶磁器等が出土している。

⑷上水流遺跡

鹿児島県南さつま市金峰町花瀬に所在し，万之瀬川中流の右岸，標高約６ｍの自然堤防上に立地する。渡畑遺跡とは，南東約1,500ｍ離れた場所に位置する。

上水流遺跡では，縄文時代前期から近世にかけての遺構・遺物が発見された。縄文時代前期では，曽畑式土器がほぼ単純な状態で出土し，石器組成などの時期判断を絞り込むことのできる数少ない遺跡である。

縄文時代中期～後期にかけては，阿高式系土器と指宿式土器が出土し，縄文時代晩期では黒川式土器及び後続する千河原段階の土器がまとまって出土した。中でも三叉文を有する資料が出土するなど，これまで不明瞭であった時期について良好な検討資料が出土している。竪穴住居跡こそ発見されなかったが，各時期ともに集石や土坑，ピットや焼土跡などが多数検出され，一定期間人々が生活していた様子も窺える。また報告書では，後期の編物圧痕のある底部片や，晩期の組織痕についてモデリング陽像を採り比較を行い紹介している。

弥生時代では，磨製穿孔具などの特徴的な石器が出土し，周辺遺跡との関係が注目される。

古墳時代では，11軒の竪穴住居跡が発見された。これに伴って，古式須恵器の器台・把手・付鉢・蓋などや，県内では類例の少ない鉄製の摘鎌が発見された。

中・近世では，大溝（大型溝状遺構）から出土した16・17世紀を中心とした大量の陶器・磁器が注目される。これらの遺物は，中国・朝鮮・東南アジア産のものと国内産のものに大別される。国内産のものの中には，初期の薩摩焼窯である堂平窯で生産されたとみられるものも多くあり，この時期の流通を考える上で重要である。また，鉄製品も多数出土しており，鍋の破片や鎌，火打金が出土している。

⑸芝原遺跡

鹿児島県南さつま市金峰町宮崎に所在し，万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する。渡畑遺跡Ｂ地点の東側に隣接し，本書でも特筆したが縄文時代後期の足形土製品の足部（芝原遺跡）と足首部（渡畑遺跡）が合致したこともあり，関連性の高さが窺える。

芝原遺跡では，縄文時代中期から近世にかけての遺構・遺物が発見されている。縄文時代中期では，春日式土器を伴う竪穴状遺構が２基と土坑１基が検出されている。縄文時代中期の竪穴状遺構は検出例が少なく注目される。また，竪穴状遺構からは，漁猟具であると考えられている鋸歯尖頭器（組合せ銛の尖端部）が３点出土している。縄文時代後期の遺跡から出土する例はあるが，縄文時代中期の遺構から出土したことは貴重な情報である。尚，渡畑遺跡でも，この組み合わせ銛の可能性が高い石器が６点出土しており，関連性について検証中である。

縄文時代後期では，竪穴状遺構３基をはじめ，集石や土坑，ピットなどが多数検出され，一定期間人々が生活していた様子が窺える。

弥生時代以降については，多量な遺構・遺物が発見された。次年度以降に整理作業を行い，報告書刊行の予定である。

刊行報告書一覧

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005「南田代遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(88)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005「古市遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(89)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2007「上水流遺跡Ⅰ」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(113)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2007「持躰松遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)

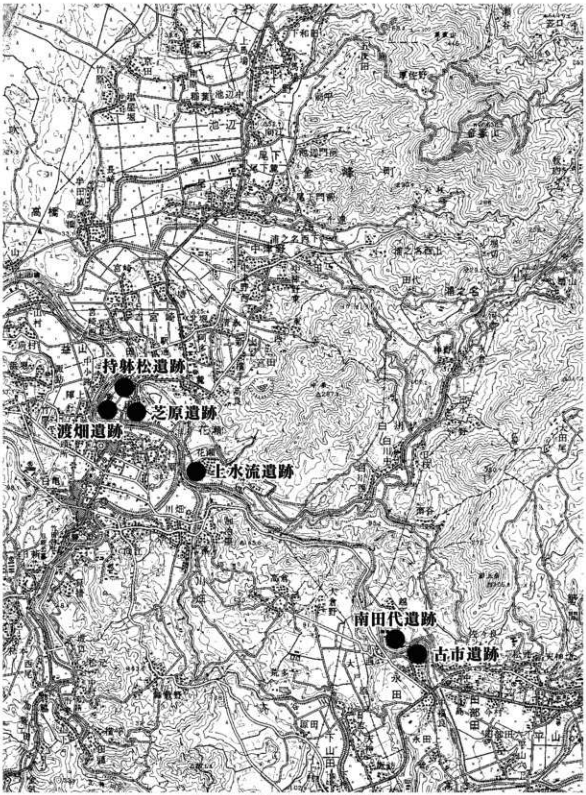
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2008「上水流遺跡Ⅱ」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(121)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2009「上水流遺跡Ⅲ」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(136)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2010「芝原遺跡Ⅰ」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(150)

表1　中小河川改修事業関連遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡番号	調査期間	調査面積	主な時代	主な遺構	主な遺物
1	南田代遺跡	27-82	01.5.7～01.8.29 02.10.4～03.3.20 03.5.6～03.5.27	13,700㎡	縄文時代早期		塞ノ神式土器
					縄文時代前期	集石，磨石集積，石斧埋納，剥片集積，黒曜石埋納	轟式土器，曽畑式土器，深浦式土器，石鏃
					縄文時代中期	集石	阿高式土器，春日式土器，船元式土器
					縄文時代後期		御領式土器
					縄文時代晩期		黒川式土器
					弥生時代		高橋式土器，松木薗式土器
					古墳時代		成川式土器
					古代		土師器，須恵器
					中世		土師器，青磁
2	古市遺跡	27-89	01.9.3～02.3.25 02.5.07～02.10.3 03.10.20～03.11.12	17,180㎡	弥生時代	竪穴住居跡	高橋式土器，黒髪式土器，山ノ口式土器，松木薗式土器，中津野式土器，石鏃，石斧，石包丁
					古墳時代	竪穴住居跡，溝状遺構	成川式土器，砥石，石製品
					中世	掘立柱建物跡	土師器，須恵器，白磁，青磁
3	持林松遺跡	35-130	97.9.1～98.2.27 98.10.12～99.3.25 99.4.20～99.10.14	7,038㎡	縄文時代後期		南福寺式土器，出水式土器
					縄文時代晩期		入佐式土器，黒川式土器，石鏃，磨製石斧，打製石斧，スクレイパー,磨石，叩石
					弥生・古墳時代	竪穴住居跡，土坑，溝状遺構，ピット，土器溜まり	刻目突帯文土器，入佐式土器，黒髪式土器，山ノ口式土器，須玖式土器，松木薗式土器，中津野式土器，砥石，ガラス製品，鉄製品
					古代	溝状遺構，土坑，掘立柱建物跡，畝間状遺構，ピット	土師器，須恵器，墨書土器，刻書土器，施書土器，赤色土器，黒色土器，移動式カマド，鉄製品，紡錘車，鞴の羽口，鉄滓
					中世	掘立柱建物跡，竪穴建物跡，溝状遺構，畝間状遺構，土師器集積遺構，土坑墓，ピット，杭列跡，石列	土師器，須恵器(東播磨系・棒万丈系)，瓦質土器，瓦器，赤色土器，黒色土器，常滑焼，瀬戸焼，備前焼，カムイ焼，青磁，白磁，青白磁，青花，輸入陶器，土錘，土製品，滑石製石鍋，滑石製品，砥石，硯，刀子，鉄製品，鞴の羽口，鉄滓
					近世		苗代川焼(薩摩焼)，肥前系陶磁器
4	上水流遺跡	35-98	00.4.24～01.3.29 03.8.9～04.3.19 04.5.14～05.2.4 05.5.9～05.9.28	15,500㎡	縄文時代前期	集石，土坑，焼土，ピット，集積	曽畑式土器，方形土器，焼成粘土塊，石鏃，石匙，楔形石器，スクレイパー，石錘，打製石斧，磨製石斧，磨石，敲石，石皿，石製品
					縄文時代中期～後期	集石，土坑，焼土，ピット	阿高式土器，南福寺式土器，指宿式土器，磨消縄文土器，松山式土器，土製品，石鏃，石匙，石斧，磨石，石皿
					縄文時代晩期	集石，土坑，焼土，ピット	入佐式土器，黒川式土器，千河原段階，三叉文施文の土器，孔列土器，刻目突帯文土器，南島系壺形土器，石鏃，石匙，石斧，磨石，石皿，石製品
					弥生時代		高橋式土器，入来Ⅱ式土器，黒髪Ⅰ式土器，磨製石鏃，磨製穿孔具，扁平片刃石斧
					古墳時代	竪穴住居跡，土坑，埋納ピット，礫集積，焼土	中津野式土器，仕堂原式土器，笹貫式土器，古式須恵器，ミニチュア土器，土製品，勾玉，管玉，鉄製焼鏃
					古代		土師器，須恵器，縁釉陶器
					中・近世	掘立柱建物跡，大型土坑，大型溝状遺構，溝状遺構，塚状遺構，帯状硬化面，土抗墓，炉状遺構，土坑，畝間状遺構，畦状遺構，鍛冶炉，土器埋納遺構，礫積遺構	土師器，須恵器，カムイ焼，瓦質土器，染付・青花・薩摩焼(堂平窯・苗代川系・竜門司系含む)，輸入陶磁器(東南アジア系含む)，土錘，砥石，石硯，鉄器，鉄滓，ガラス玉，軽石製品，石塔，銭貨，人骨，炭化桃核，ヤマトシジミ
5	芝原遺跡	35-81	99.10.15～00.3.22 00.4.24～01.1.25 01.5.7～02.3.19 02.5.7～03.3.20 04.5.6～05.3.22 05.5.14～05.7.16	49,600㎡	縄文時代中期	竪穴状遺構，土坑	春日式土器，石鏃，鋸歯尖頭器，石匙，スクレイパー，擦切石器，石皿，磨石
					縄文時代中期後半～後期前半	竪穴状遺構，埋設土器，土坑，集石，ピット，焼土，石皿集積，落ち込み	阿高式土器，南福寺式土器，出水式土器，岩崎式系土器，指宿式土器，市来式系土器，土製品，石鏃，石匙，スクレイパー，楔形石器，石錘，磨製石斧，打製石斧，礫器，擦切石器



第１図　中小河川事業関連遺跡位置図

2　事業関連遺跡の調査経緯

中小河川改修事業（万之瀬川）は，平成５年度の県教委による分布調査に始まり，これまで南田代遺跡，古市遺跡，持躰松遺跡，上水流遺跡，芝原遺跡，渡畑遺跡について調査を進めてきた。一連の調査経緯については，表２に示した通りである。

表２　中小河川改修事業に関わる遺跡の調査経緯

事業年度	遺跡名	調査内容	担当	備考
平成５年度	全遺跡	分布調査	鹿児島県教育委員会	
平成６年度	持躰松遺跡	確認調査	南さつま市（旧金峰町）教育委員会	県教委支援
平成７年度	上水流遺跡	確認調査	南さつま市（旧金峰町）教育委員会	
平成８年度	渡畑遺跡・持躰松遺跡	確認調査（一部本調査）	南さつま市（旧加世田市）教育委員会	県教委支援
平成９年度	持躰松遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
	松ヶ鼻遺跡	確認調査	鹿児島県教育委員会	
平成10年度	芝原遺跡・持躰松遺跡	確認・本調査	鹿児島県教育委員会	
平成11年度	芝原遺跡・持躰松遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成12年度	上水流遺跡・芝原遺跡・渡畑遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成13年度	芝原遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成14年度	芝原遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成15年度	芝原遺跡・渡畑遺跡・上水流遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成16年度	芝原遺跡・渡畑遺跡・上水流遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
	南田代遺跡・古市遺跡	報告書刊行	鹿児島県教育委員会	
平成17年度	上水流遺跡	本調査・整理作業	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成18年度	上水流遺跡	整理作業・報告書Ⅰ刊行	鹿児島県教育委員会	
	持躰松遺跡・芝原遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成19年度	上水流遺跡	整理作業・報告書Ⅱ刊行	鹿児島県教育委員会	
	持躰松遺跡	報告書刊行	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡・渡畑遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成20年度	上水流遺跡	整理作業・報告書Ⅲ刊行	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡・渡畑遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成21年度	上水流遺跡	報告書Ⅳ刊行	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡・渡畑遺跡	整理作業・報告書Ⅰ刊行	鹿児島県教育委員会	
予　定	芝原遺跡	整理作業・報告書Ⅱ刊行		
	渡畑遺跡	報告書Ⅱ刊行		
予　定	芝原遺跡	整理作業・報告書Ⅲ刊行		
予　定	芝原遺跡	報告書Ⅳ刊行		

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

渡畑遺跡は，鹿児島県の南さつま市金峰町宮崎の万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する。(写真８)

万之瀬川は鹿児島市の南部美濃岳南麓に源を発し，川辺町（現南九州市）から南さつま市の加世田平野を横断している。さらに吹上浜に至り，東シナ海に注ぐ長さ約20km，流域面積381㎢の薩摩半島南部を代表する河川である。河口周辺には砂丘が広く形成されており，中下流域には沖積平野が広がっている。また万之瀬川の蛇行によって浸食された台地が見られる。こうした砂丘地と台地には，縄文時代から弥生時代にかけて良好な遺跡が存在している。

河口より約６kmさかのぼった渡畑遺跡周辺の標高は約５m前後である。このあたりの表層は，未固結堆積物である粘土や砂礫のある河川敷で，後背地には灰色低地土壌が広がり，一部には黒泥炭土壌も見られる。

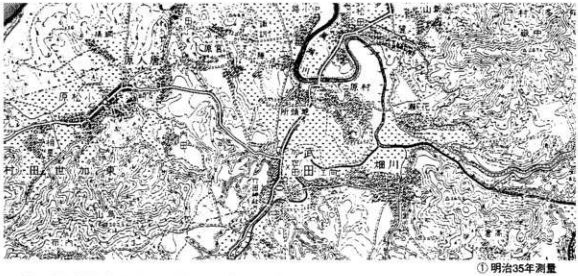
氾濫堆積物は主に砂・シルトからなり，場所によっては，その下位に砂礫からなる万之瀬川の旧河床堆積物が伏在する。

本遺跡で出土した縄文後期初頭以降の文化遺物は，自然堤防を形成した氾濫堆積物に覆われた土壌層中に見いだされる。そのことから，万之瀬川の自然堤防は，約4,000年前頃から形成されたことが分かる。

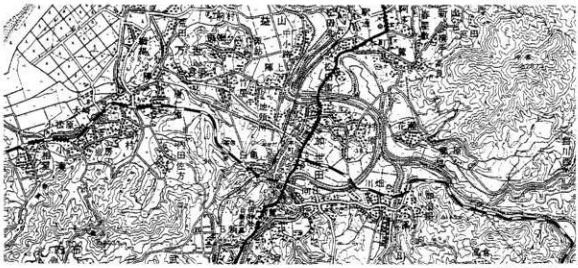
その後の万之瀬川の河道はあまり変化せず，厚さ４mほどの堆積物を氾濫によって累積してきた。氾濫堆積物の層区分とその推移から，遺跡周辺では縄文中期から中世までの顕著な氾濫は４，５回ほど認められる。この一帯は万之瀬川が大きく蛇行しており，かつ，加世田川や長谷川などの支流の合流地点も近くにあり，周辺の沖積平野は，過去梅雨や台風の時期になると水害に遭っている。

写真８　上空から見た渡畑遺跡周辺の様子

昭和10（1935）年の国土地理院発行の地図では，村原付近において河川改修が行われ，低地において蛇行する部分を直線化したことがわかる（第２図）。これは，昭和初期の恐慌時に，失業対策事業として実施された河川改修事業であったと，加世田在住の古老より話を伺った。下流に目を向けると，現在の河口は，享和年間（1801～1804）の洪水により流れが変わってできたもので，新川と呼称されている。それ以前の万之瀬川河口はさらに南側に蛇行しており，現在の河口より約３㎞南にあったことがわかっている。周辺に目を向けると，東部には比較的なだらかな標高約200ｍ前後の山々が南北を縦断している。このなかで約７㎞北東方向にある金峰山は，旧町名（金峰町）の由来ともなった標高636ｍの薩摩半島中央部における最高峰で，古来より信仰の対象となっている。また，海上航行の際には，同山より南西方向に約22㎞先にある野間岳と共にランドマーク的役割を果たしていた。特に，野間岳に関しては，『三國名勝圖會』の中に「毎歳漢土の商舶，長崎に来る時は，洋中にて必ず此嶽を認て，針路を取り，皇國の地に到り，其始て認め見し時は，酒を酌て賀をなすといふ云々」の記述が見える。



① 明治35年測量



② 昭和44年測量

第２図　渡畑遺跡周辺地形変遷図

第２節　歴史的環境

南さつま市では、旧石器時代から歴史時代に至るまでの遺跡が数多く発見されている（第３図、表３）。

この中には、学史上極めて重要な遺跡も含まれており、当地域が考古学研究の良好のフィールドであることをあらためて示唆している。

旧石器時代では、金峰町小中原遺跡・加世田祝原遺跡からナイフ形石器が、金峰町山野原遺跡・加世田平田尻遺跡から細石器や礫群が発見されている。

縄文時代草創期の遺跡としては、加世田に榕ノ原遺跡がある。ここでは、煙道付き炉穴や集石等の遺構と、隆帯文土器・磨製石斧・丸ノミ状の磨製石斧等の遺物が出土し、国指定の史跡となっている。また、志風頭遺跡では、煙道付き炉穴から大型の隆帯文土器が出土している。早期の遺跡としては、前述の榕ノ原遺跡が著名である。昭和52(1977)年の発掘調査で出土した遺物は、前平式土器と吉田式土器の型式設定について問題を投げかけた。金峰町小中原遺跡では、前平式土器の円筒形・角筒形がまとまって出土している。前期の遺跡としては、金峰町阿多貝塚や上焼田遺跡が著名である。阿多貝塚から出土した資料は、阿多Ｖ類土器（現在では西唐津式とされる）と称され、上焼田遺跡からは玦状耳飾が出土している。

中期の遺跡としては、金峰町上水流遺跡で大型の集石と春日式土器が豊富に出土しており、河川沿い低地との関係において注目される。また、同町芝原遺跡の竪穴住居跡と石堂遺跡の阿高式土器・並木式土器の出土等も挙げられる。

後期の遺跡としては、先述の芝原遺跡がある。ここでは、大量の指宿式土器や南福寺式土器と、鍔面状突頭器や石鋸などの特徴的な石器も出土している。また、足形を呈する土製品は本県でも例が無く、加えて東隣の本遺跡出土の土製品と接合したことで注目される。

晩期の遺跡としては、上加世田式土器の標識遺跡である上加世田遺跡がある。ここでは土偶・軽石製岩偶・石棒など祭祀をうかがわせる資料が出土しているが、近年の広域編年研究により縄文時代後期に位置づけられることも多くなっている。また、加世田の干河原遺跡や金峰町上水流遺跡では、豊富な量の浅鉢と深鉢が出土している。下原遺跡では、縄文時代晩期終末～弥生時代早期の刻目突帯文土器に伴って、朝鮮半島系無文土器・籾痕のある土器・石庖丁などが出土している。

弥生時代から古墳時代にかけては、多くの遺跡で遺物の散布がみられる。金峰町高橋貝塚は、弥生時代前期を主体とする貝塚で万之瀬川の支流堀川の右岸，標高11mの洪積世砂丘上にある。昭和37・38(1962・1963)年に，河口貞徳氏によって発掘調査が実施された。調査の結果，縄文時代晩期の夜臼式土器と弥生時代前期の高橋Ⅰ式土器が共伴したことや，南海産の貝を素材とした貝輪や貝そのものが出土したことで，学史に残る遺跡となった。同町下小路遺跡は，弥生時代後期の須玖式の甕棺が検出された埋葬遺跡で，棺内の人骨にはゴホウラ製の貝輪が着装されていた。また，同町松木薗遺跡では，弥生時代中後期の環濠である可能性のある大溝が松木薗式土器を伴って検出されている。

中津野式土器の標識遺跡である同町中津野遺跡からは，床面が３段構造になる竪穴住居跡が発見され，最下段である３段目からは完形土器が40個出土しているという。中津野式土器は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器として位置付けられている。

古墳時代の遺跡としては，加世田小湊にある奥山古墳(六堂会箱式石棺墓)が特筆される。この遺跡は昭和６(1931)年に発見され，石棺内部には赤色顔料が塗られており，ガラス玉や長さ180㎝の鉄剣，刀子が副葬されていた。平成17(2005)年３月には，鹿児島大学総合研究博物館助教授の橋本達也氏が再調査を行っている。その結果，周溝の一部と考えられる遺構が発見され，また同年８月の調査で４世紀代の古墳である可能性が高いことが示された。金峰町白糸原遺跡では，竪穴住居跡19基が検出されている。遺構内遺物から，辻堂原式から笹貫式にかけての時期の集落であるとされる。

古代にも多くの遺跡が発見されている。特にこの地域の遺跡では，集落が発見される場合が多く，広域的なあり方について検討する場合に重要な資料となることは間違いないと考えられる。荒平窯をはじめとする中岳山麓窯跡群は金峰町にあり，９世紀から10世紀にかけて稼働していたとみられる須恵器窯である。発掘調査は行われていないが，表面採集された遺物が荒尾窯（熊本県荒尾市）の製品との製品性が高いことから，人的・物的な交流があったと考えられている。同町小中原遺跡からは，多くの掘立柱建物跡と「阿多」という文字が刻まれた土器などが発見されていることから，阿多郡衙の跡ではないかと考えられている。

また，同町山野原遺跡でも多くの掘立柱建物跡と土師器・須恵器などが発見されている。祭祀に関わるとみられる遺構や，土師器焼成遺構の可能性が考えられるものなども発見されており，在地の実力者にかかわる施設であった可能性が考えられている。

中世には，阿多郡は，ほぼ全域で島津荘が成立した薩摩国にあって，唯一大宰府領であった。このなかで大宰府の権威をかりて領主権を確立し，やがて薩摩武士団の棟梁的地位を固めるまでに至ったとみられる阿多郡司平忠景は，12世紀前半の史料に初見される。

忠景の在位期間は中央政権の交代の影響で比較的短

第３図　周辺遺跡位置図

表３　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地		時代							備考
				旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	
1	牟田遺跡	南さつま市	金峰町高橋字真門砂入						●		
2	尾下遺跡	南さつま市	金峰町尾下			●					
3	亀ヶ城跡	南さつま市	金峰町尾下　麓						●		
4	田布施遺跡	南さつま市	金峰町野首他５		●		●		●		
5	筆付遺跡	南さつま市	金峰町尾下筆付		●	●		●			金峰町発掘
6	高橋貝塚	南さつま市	金峰町高橋			●					金峰町発掘
7	草原町遺跡	南さつま市	金峰町宮崎				●				
8	上焼田遺跡	南さつま市	金峰町宮崎焼田		●	●	●	●	●		金峰町発掘
9	堀川貝塚	南さつま市	金峰町宮崎		●						
10	阿多貝塚	南さつま市	金峰町宮崎上焼田		●	●	●				金峰町発掘
11	立原遺跡	南さつま市	金峰町宮崎				●				
12	中津野遺跡	南さつま市	金峰町中津野１１１９			●					県発掘
13	中津野城跡	南さつま市	金峰町新山						●		
14	万之瀬川床遺跡	南さつま市	金峰町益山万之瀬川			●	●				
15	上川原遺跡	南さつま市	金峰町宮崎上川原			●	●				
16	上花立遺跡	南さつま市	金峰町								
17	野村原遺跡	南さつま市	金峰町中津野				●				
18	白糸原遺跡	南さつま市	金峰町宮崎		●	●	●	●	●		県発掘
19	小中原遺跡	南さつま市	金峰町新山小中原	●	●	●	●	●	●		県・町発掘
20	立野原遺跡	南さつま市	金峰町新山				●				
21	三反田	南さつま市	金峰町新山			●	●				
22	市薗遺跡	南さつま市	金峰町宮崎		●				●		県発掘
23	中小路遺跡	南さつま市	加世田益山			●	●				市発掘
24	陣跡遺跡	南さつま市	加世田益山陣						●		
25	内ノ田遺跡	南さつま市	加世田益山内ノ田	●			●		●	●	
26	松田南遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●		●		●		
27	持林松遺跡	南さつま市	金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	県発掘
28	瀬畑遺跡	南さつま市	金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	本報告書
29	芝原遺跡	南さつま市	金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	県・町発掘
30	下東堀遺跡	南さつま市	加世田宮原下東堀	●	●		●				
31	大迫田遺跡	南さつま市	金峰町花瀬						●		
32	今城跡	南さつま市	金峰町花瀬今城原		●	●	●		●		
33	中岳山麓古窯群	南さつま市	金峰町花瀬					●			鹿児島大学調査
34	椙ノ原遺跡	南さつま市	加世田村原字椙ノ原	●	●	●	●	●	●	●	加世田市発掘
35	上木流D遺跡	南さつま市	金峰町花瀬								金峰町発掘
36	花瀬遺跡	南さつま市	金峰町花瀬				●			●	
37	上木流C遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●		●		●		金峰町発掘
38	上木流遺跡	南さつま市	金峰町花瀬上水流森山		●	●	●	●	●	●	県・町発掘
39	針原遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●			●			
40	弥十山遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●						金峰町発掘
41	宇治野原遺跡	南さつま市	金峰町白川西	●	●		●				金峰町発掘
42	杉本寺遺跡	南さつま市	加世田川畑杉本寺			●		●	●		現市役所
43	上加世田遺跡	南さつま市	加世田川畑上加世田		●	●	●	●	●	●	加世田市発掘
44	永田遺跡	南さつま市	加世田川畑永田					●			
45	加治屋遺跡	南さつま市	加世田川畑岩山・加治屋		●	●	●	●			県発掘
46	鮎受遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●		●				金峰町発掘
47	二頭遺跡	南さつま市	加世田川畑二頭				●				加世田市発掘
48	屋地遺跡	南さつま市	加世田武田屋地			●					
49	遠見ヶ岡遺跡	南さつま市	加世田川畑遠見ヶ岡		●	●					
50	上長迫遺跡	南さつま市	加世田川畑上長迫 川辺町下山田荒多迫，他		●	●	●				

期間ではあったが，周辺地域にも多少の影響を与えたことも考えられる。

阿多郡はその後13世紀前半には北方と南方に分割される。金峰町が位置する阿多郡は阿多氏が，後には鮫島氏が支配を行い，加世田市が属する加世田別府は二階堂氏が，後には島津氏が支配するようになる。

中世前半の遺跡としては，平成８(1996)年から11(1999)年まで旧金峰町が発掘調査を行った小園遺跡が挙げられる。ここでは，掘立柱建物跡・円形竪穴遺構・区画溝等が発見され，遺物として11世紀後半から13世紀代の貿易陶磁と，須恵器・常滑焼・和泉型瓦器椀・類須恵器（カムィヤキ）・滑石製品等が出土している。このことから，金峰山信仰の拠点寺院として，12世紀前半の文献で初見される観音寺との強い関連性が指摘されている。観音寺は保延４(1138)年に，前述の阿多郡司平忠景より阿多牟田上浦の寄進を受けるなど，薩摩半島西南部における仏教及び山岳信仰の中心拠点であったと考えられている。

城館跡の発掘調査としては，上ノ城跡・別府城跡・牟礼ヶ城跡・貝殻崎城跡などが知られる。発掘調査は行われていないが，加世田市益山の寺園氏宅には，二重の濠があったと伝えられ，現在もその痕跡が残る（上東2004）。中世に由来するかは明らかでないが，居館であった可能性も考えられる。

白糸原遺跡では，中世末から近世にかけての土坑墓が24基検出されている。この中には，南島産の夜光貝が入っているものもある。加えて，竪穴建物跡や双魚文青磁なども見つかっている。また，本遺跡の属する万之瀬川流域の遺跡群も，近年特に注目されている。万之瀬川下流には川底遺跡（加世田市山村・金峰町宮崎）と中流には古市遺跡・南田代遺跡（川辺町）などがあり，中世を中心とした縄文時代から近世・近代にわたる複合遺跡として今後の調査の成果が期待される。

近世においては，前述の金峰町上水流遺跡の大溝から16・17世紀頃の肥前系陶磁器と初期の薩摩焼（苗代川系）等が，福建・広東及びベトナム産の褐・壺類といった貯蔵器とともに出土している。また，万之瀬川河口付近を含む吹上浜沿岸では，東南アジアとの交易に関連するという指摘のある漂着遺物が確認されている（橋口1999など）。

外城制度（天明４[1784]年，郷に改められた。）に関連するものとして，地頭仮屋（加世田は麓，金峰町は阿多と田布施の２か所）・庄内役所・浦役所・別当役所・会所・宿場・御蔵・常平倉・津口御番所・遠見御番所・射場・御牧などがあった。また，野町と呼ばれる商人の居住区も存在した。加世田では川畑に現在所在する聖徳寺付近に，また金峰町内では阿多郷野町と田布施郷池辺野町の二つがあった。渡畑・持躰松・芝原の各遺跡を含む宮崎の「御新田」とされる一帯は，享保13(1728)年，万之瀬川の中流域にあたる川辺町越ケ原より用水路を引き新田開発が行われたものである。

交通網に目を向けると，本遺跡と下流側に隣接する持躰松遺跡には近世の街道『伊作路』が通っており，現在は国道220号線となって万之瀬橋が架けられている。ここはかつて村屋渡口と呼ばれる渡し場であり，昭和56(1981)年以前は船で渡っていた。また，大正３(1914)年には，南薩鉄道（鹿児島県唯一の私鉄）の伊集院ー加世田間が開通している。これは，渡畑遺跡・持躰松遺跡のなかもかつて通っていたものであるが，昭和58(1983)年の６・21加世田水害を機に，翌昭和59年廃止された。数年前までは，遺跡周辺でも線路跡である土堤があちらこちらに残っていたが，近年になってその姿を消しつつある。近・現代においては，太平洋戦争（第二次世界大戦）時，加世田の唐仁原・高橋に，陸軍飛行戦隊知覧分遣隊の万世基地がおかれ，戦争末期に特別攻撃隊の出撃基地となった。

参考文献

鹿児島県　1975『南薩地域　土地分類基本調査』
上東克彦　2004「鹿児島県薩摩半島に伝世された華南三彩ークンディと果実形水注ー」『貿易陶磁研究24号』日本貿易陶磁研究会
橋口　亘　1999「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究会19号』日本貿易陶磁研究会
加世田市　1985『上加世田遺跡１』『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)
1987『上加世田遺跡Ⅱ』『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)
1995『干河原遺跡』『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(12)
1999『志風頭遺跡・奥名野遺跡』『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(16)
金峰町　1998『上水流遺跡ー第１次調査ー』『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(9)
1998『持躰松遺跡　第１次調査』『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(10)
2000『小蘭遺跡』『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)
鹿児島県　1991『小中原遺跡』『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(57)
河口貞徳　1988『日本の古代遺跡38鹿児島』保育社
加世田市　1986『加世田市史』(上下)　史編纂委員会
金峰町　1987・1989『金峰町郷土史』(上下)　郷土史編纂委員会
原口虎雄　1982『三国名勝圖會』第二巻　図書出版青潮

第３章　調査の概要

第１節　発掘調査の方法

平成８年９月～11月にかけて行われた県立埋文センターの確認調査を受けて，平成12年度に河川側と持躰松遺跡隣接部分，平成15年度に樋門隣接部分，平成16年度に樋門部分から下流部分の本調査を行った。

調査は，対象区域全体に公共座標に沿って10ｍのグリッドを設定して実施した。本遺跡の北側からＡ・Ｂ・・・Ｚ・ａ・ｂ，東側から１・２・・・29・30とし，Ｂ－６区などと呼称することとした。(第４図)

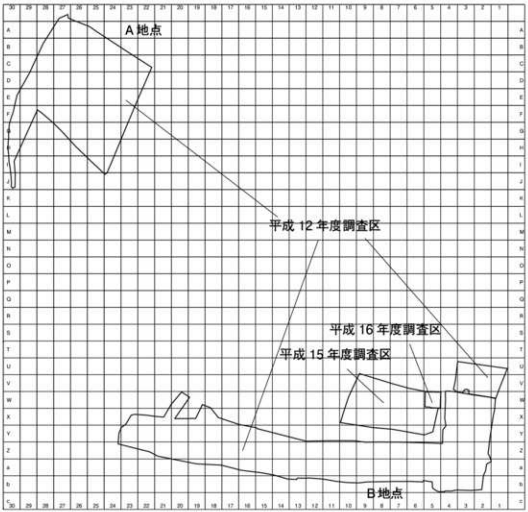
発掘調査は重機によって１層(表土)を除去した後，遺物包含層を人力で掘り下げた。場所により，Ⅱ層以下に無遺物層が認められる場合も同様に重機で除去した。最後に，下層確認のためのトレンチを設定して，掘り下げていった。

これらの調査の結果，Ⅱ層からⅫ層まで，縄文時代中期から近世までの遺物と遺構が発見された。

なお，調査区北西側にあたるＡ～Ｊ－22～30区の範囲を「Ａ地点」とし，さらに調査区南東側にあたるＵ～ｂ－１～24区の範囲を「Ｂ地点」と呼称することにした。

第２節　整理作業の概要

渡畑遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業は，平成８年度から平成16年度にかけての発掘調査中に，遺物の水洗・注記作業を並行して行い，本格的な整理作業を平成20年度から実施した。作業は，県立埋文センターで，他の万之瀬川流域遺跡群と同時進行の形で行った。



第４図　遺跡グリッド配置図

第３節　遺物の分類について

１　土器

本遺跡のＢ地点から，縄文時代中期～晩期にかけての土器が7,940点出土した。層位はⅩ層からⅫ層のものが混在しており，明確な分層が困難であった。そのため，器形と文様などの諸属性から，形式別に中期に相当する土器をⅠ類～Ⅱ類，中期～後期に相当する土器をⅢ類～Ⅺ類，晩期土器をⅫ類に分けた。

Ａ地点からは古墳時代の土器が出土し，これらは新たにⅠ類～Ⅸ類として分けた。尚，形式不明な胴部については，別類とした。Ｂ地点から出土した古墳時代の土器については，次年度報告書に掲載予定である。

２　土製品

足形土製品と用途不明なメンコ類に分けて，24点を一括して掲載した。

３　石器

縄文時代中期から晩期にかけての石器が381点出土した。土器同様，時期の明確な区分が困難なため，該期の石器を一括して器種ごとに分類することにした。

石器について分析していくにあたり，石材及び器種において分類を試みた。これらは，中小河川改修事業に関連する遺跡から出土した石器に共通しているため，渡畑遺跡では出土しなかった石器や石材についても提示することにした。

⑴ 石器分類（表４，５）

石器は，同一器種内で属性による相違が明瞭で，一定量以上出土するものについて，グルーピング化した。使用による折損や，欠損等により他器種への転用が見られる場合は，最終用途をその石器の器種と捉えて分類した。

⑵ 石材分類（表６，写真９・10）

石材に関しては，石材産地を推定させる黒曜石及び安山岩，頁岩について石材の細分化を試み分類した。他に，頁岩や砂岩等にホルンフェルス化した石材も散見されたが，変成が顕著であるものについてのみホルンフェルスに含めた。頁岩については，硅質化が顕著な石材は，頁岩中に含めることにした。

表４　石器分類表（１）

器種		分類	概要
剥片石器	石鏃		剥片を素材として両側縁部に両面から押圧剥離を施してある小型から中型の三角形状の石器群を石鏃とした。
		Ⅰ	全体の形状が正三角形を呈するもの。
		Ⅱ	全体の形状が二等辺三角形を呈するもの。
		Ⅲ	先端が尖り緩側が緩やかに曲線を描くもの。
		Ⅳ	全体の形状が五角形を呈するもの。 抉りの状況により Ⅰ：浅い，Ⅱ：深い，Ⅲ：平坦 肩部の位置により A：上位，B：中位，C：下位 肩部から基部への広がり具合により a：広がる，b：同じ幅，c：狭まる
		Ⅴ	剥離が大きく厚みのあるもの
		Ⅵ	未製品や欠損品
	鋸歯尖頭器		剥片を素材として両側縁部に両面から押圧剥離を施し，両側縁部を鋸歯状に作出してある大型の三角形状の石器群を鋸歯尖頭器とした。本石器と石鏃を組み合わせ銛として使用したと想定される。
	鋸歯縁石器		剥片を素材として一側縁部に抉りを入れ，鋸歯状に作出し，もう一側縁部は微細剥離により刃部のように作出してある石器群を石鏃とした。本石器と鋸歯尖頭器を組み合わせ銛として使用したと想定される。
	石匙		剥片を素材とし刃部及びつまみ部を作出し，つまみ部に着紐して携帯する石器群を石匙とした。
		Ⅰ	幅型で，両側縁・両面に調整を施すもの。
		Ⅱａ	横型で両面に調整を施すもの。刃部とつまみ部が左右対称である。
		Ⅱｂ	横型で両面に調整を施すもの。刃部とつまみ部が左右非対称である。
	スクレイパー		玉髄系石材を使用した資料中，剥片の縁辺部などに二次調整を行い，刃部整形を施してあるものをスクレイパーとした。頁岩製でも小素材を利用し，刃部調整が丁寧なものは本類に含めた。
		Ⅰ	素材剥片の両側縁部を中心的に刃部調整が施され，柳葉状の器形を呈する。
		Ⅱ	素材剥片の下縁部を中心的に刃部調整が施され，横長長楕円状の器形を呈する。
		Ⅲ	素材剥片の一辺に刃部調整が施され，器形を呈する。刃部調整は直線的である。
		Ⅳ	長方形状の素材剥片の接しない2縁側部に刃部調整が施される。
		Ⅴ	上記以外のスクレイパーである。
	二次加工剥片		玉髄系石材を使用した資料中，剥片の縁辺部などに二次調整を行い，刃部整形が認められないものを二次加工剥片とし，刃部整形が認められないものを二次加工剥片とし，刃部整形が認められるもので一定の大きさを有する頁岩製資料は機器類に含めた。なお，後・晩期相当層出土中，頁岩製で横長剥片を素材とする刃部整形剥片を横刃形石器として分類した。
	横刃形石器		

表5　石器分類表(2)

	器種	分類	概要
剥片石器	石核		原石から石器製品作出のための剥片を採取した残存石材を本類に分類した。なお、剥離痕に顕著な使用痕等確認できる資料については、礫器類に含めた。
		Ⅰa	小礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から表裏2面を剥いだもの。
		Ⅰb	周辺から中心に向かって剥ぐもの。
		Ⅰc	前の作業面を打面とする打面転移が見られる。
		Ⅱa	小礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から1面のみを剥いだもの。
		Ⅱb	周辺から中心に向かって剥ぐもの。
		Ⅱc	前の作業面を打面とする打面転移が見られる。
		Ⅲa	礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から表裏2面を剥いだもの。
		Ⅲb	周辺から中心に向かって剥ぐもの。
		Ⅲc	前の作業面を打面とする打面転移が見られる。
		Ⅳa	礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後、同一打面から表裏1面を剥いだもの。
		Ⅳb	周辺から中心に向かって剥ぐもの。
		Ⅳc	前の作業面を打面とする打面転移が見られる。
	石錐	Ⅰ	つまみ部と棒状の錐部を有し、主要剥離面や礫皮面等をつまみ部とする。
		Ⅱa	錐部のみで構成され、つまみ部を有しない。礫皮面等の平坦な面が、基部端部に残されている。
		Ⅱb	基部端部も下準に整形され、平坦な面を有しない。
		Ⅲ	大きなつまみ部に対し、小振りな先端部を作出整形し、錐部とする。
		Ⅳ	大きな欠損を有し、つまみ部の有無等確認することができない。
		つまみ部を有するⅠa及びⅠbは、つまみ部が指でつまめる大きさを有しており、直接手に持って使用した可能性が高いと考えられる。	
	楔形石器		ピエス・エスキューとも称される。表面観は方形で、上縁端部及び下縁端部は直接的で平行に位置する。刃部断面観が凸レンズ状に鋭角をなし、基部には敲打面を有する。本石器を木の実や骨などにあて、敲石等で敲いて割るために使用したと想定される。
	擦切状石器		砥石と同様、砂岩質の礫素材を使用する。刃縁部の片面側もしくは両面側に削痕を有する。磨製石斧等の素材を抽出するために、礫素材を擦り切り、分割するための道具と考えられる。
礫石器	磨製石斧	Ⅰ	器厚が厚く、重量感がある。刃部が鉈の形態を有するものが多い。絵刃型石斧が多い。
		Ⅱ	Ⅰより小型で、器厚が薄手。長方形状を呈する。定格式石斧が多い。
		Ⅲ	細長で刃部が片刃である。撥型石器と呼称されるタイプである。
	打製石斧	Ⅰ	明瞭な抉りを持たず、短冊形(長方形)の器形を呈する。器厚は比較的厚い。短冊形石斧と呼称。
		Ⅱ	明瞭な抉りを持たず、短冊形(長方形)の器形を呈する。Ⅰ類に類似するが、器厚が極薄く、より鋤に近似する。扁平石斧と呼称。
		Ⅲ	基部と刃部を境界作る抉り部を持ち、ラケット状を呈する。有肩石斧と呼称。
		Ⅳ	他器種からの転用品。
		Ⅴ	分類不可資料及び未製品。
	礫器類	Ⅰ	素材剥片の周側縁部を中心的に刃部調整が施され、柳葉状の器形を呈する。
		Ⅱ	素材剥片の下縁部を中心的に刃部調整が施され、横長長楕円(長方形)状の器形を呈する。
		Ⅲ	素材剥片の一辺に刃部調整が施され、器形は三角形状を呈する。刃部整形は直線的である。
		Ⅳ	長方形状の素材剥片の接しない2側縁部に刃部調整が施される。
		Ⅴ	上面観が円形を呈しており、周縁部に調整を施し、基部及び刃部を作出する。ラウンドスクレイパーとも呼称される。
		Ⅵ	上記以外の礫器類である。
	磨石・敲石	Ⅰa	比較的小礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面のみを有し、敲打痕は不明瞭である。
		Ⅰb	全面的もしくは部分的に磨面を有し、平坦面や側縁に明瞭な敲打痕が見られる。
		Ⅱa	大きめな礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面のみを有し、敲打痕は不明瞭である。
		Ⅱb	全面的もしくは部分的に磨面を有し、平坦面や側縁に明瞭な敲打痕が見られる。
		Ⅲ	上記Ⅰ及びⅡ類以外の資料である。上面観が長楕円形状もしくは不定形状を呈し、用途が敲石と考えられる資料群である。
	石皿類		石皿は大礫を利用し、磨面・凹面を有する。磨石とセット関係にあり、木の実を磨り潰すために使われる。
			台石も大礫を利用し、敲打痕を有する。敲石とセット関係にあり、石器製作時に石材を据え付けるために使われる。
	砥石		砂岩質の礫素材を利用し、主として長軸方向に削痕が顕著し、深い凹面を有することが多い。
	軽石製品		軽石を素材とする、穿孔や凹み等加工痕が残される。
	石錘	Ⅰa	左右1対の抉り部を有する。抉り部以外の側面に敲打痕等は確認できない。
		Ⅰb	上下側面に敲打痕を有する。磨石を二次利用した可能性がある。
		Ⅱ	左右及び上下2対の抉り部を有する。
玉類	管玉		細長い竹管状を呈する。穿孔部に紐類を通して用いた装飾品と思われる。
	勾玉		半円月・半楕円形・コ字状形などをなし、着紐のための一孔が施される。
礫石器	磨製扁平石斧		扁平片刃で側面断面観が(隅丸)方形を呈する。大陸系とみなされ、工具の機能を有したと想定される。
	磨製穿孔具		砥石と同様な砂岩質の素材を利用する。基部と円柱状の穿孔部からなる。穿孔部には回転条痕等が残される。石包丁の穿孔ようとしての機能が想定される。

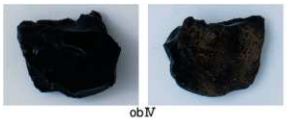
表6　石材分類表

器種	分類	概要
黒曜石（ob）	Ⅰ	不純物を多く含み，漆黒で光を通さないものを包括した。薩摩川内市樋脇町上牛鼻，いちき串木野市平木場，いちき串木野市宇都等の原産地資料に類似する。
	Ⅱ	光を通し，不純物を大量に含む物を総括した。鹿児島市の三船，伊佐市の日東，五女木，錦江町，長谷等の原産地資料や自然面が磨りガラス状を呈する霧島系の資料に類似する。
	Ⅲ	飴色～黒色を基調とし，不純物をほとんど含まない良質のものを包括した。えびの市の桑ノ木津留，伊佐市の上青木の原産地資料や自然面が磨りガラス状を呈する霧島系の資料に類似する。
	Ⅳ	黒色で不純物を全く含まない良質のものを包括した。佐賀県伊万里市腰岳山の資料に類似するが，一部長崎県佐世保市針尾島周辺で産出する黒色系の物も含まれる。
	Ⅴ	青灰色で不純物の少ない物を包括した。針尾中町や長崎県佐世保市東浜，淀姫等西九州の原産地資料に類似するが，原産地不明の一群も含まる。
	Ⅵ	不純物をあまり含まない灰色の物を包括した。椎葉川周辺の物を資料とするが，原産地不明の一群も含んでいる。
	Ⅶ	原産地不明な物を包括した。
安山岩	Ⅰa	黒色を呈し，砂質感が強い。斜長石が殆ど含まれない。西北九州産であると考えられる。
	Ⅰb	Ⅰaが風化したもの。
	Ⅱ	西北九州産か？斜長石が殆ど含まれず，硅質の光沢がある。
	Ⅲa	上牛鼻産と考えられる。斜長石が密に含まれる。黒色もしくは青灰色を呈し，光沢感が強い。風化していない，もしくは，弱い風化が見られる。
	Ⅲb	Ⅲaに類似するが，風化が強い。
	Ⅳ	上記以外の一般的な安山岩。花崗岩との区別においては，帯磁率を基準とし20×10^{-3}SI以上を本類に含めた。
凝灰岩	火山灰や火山砂などが堆積し，凝固したもの。親指大の礫を含む凝灰角礫岩を含む。	
花崗岩	御影石とも呼称。石英・カリ長石・雲母・角閃石・輝石などを主成分鉱物として含む。安山岩との区別は，帯磁率において20×10^{-3}SI程度の石材を本類に含めた。	
蛇紋岩等	蛇紋岩はぬめっとした肌触りを有し，光沢がある。石材不明資料中，蛇紋岩に類似した資料を含めた。	
頁岩	Ⅰ	風化が顕著で，白色もしくは乳白色を呈する。
	Ⅱ	風化が見られる。層状剥離や白筋が見られるのが多い。
	Ⅲ	Ⅱに類似するが，風化がない，もしくは弱い。
	Ⅳ	風化が全くない。光沢があり，漆黒色を呈する。
	Ⅴ	風化が全くない。光沢があり，黒色や黄橙色，白色，乳白色，青灰色などを呈する。珪質の頁岩。
	Ⅵ	粘板岩に類似。薄茶色を呈し，剥離が強い。シルト質の頁岩。
	Ⅶ	錆が付着，黒色を呈し，剥離が強い。
	Ⅷ	硬質頁岩の一種で，長石が粒状に多量に含まれる。金峰山が産地と考えられる。
砂岩	砂粒・石英が集合して固まった堆積岩の一種。触ると砂粒感が強いものを本類に含めた。	
粘板岩	極微小な砂粒（泥粒）が集合して固まった堆積岩の一種。頁岩に似て層状を成すが，薄茶色～茶黄色を呈し，指で触ると粉が指頭に残るものを本類に含めた。	
ホルンフェルス	硬質化が著しく，鉱物が相累なって帯状もしくは斑状を成すもの。ただし，硬質化（もしくは，珪質化）した頁岩は本類に含めず，頁岩に分類した。	
めのう系	めのう・玉髄・石英・タンパク石・鉄石英・水晶・石英斑岩などを総称して，本類に含めた。	
チャート	珪酸を含み光沢感を有する。灰白色を呈する。	

ob Ⅰ

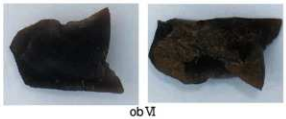
ob Ⅱ

ob Ⅲ



ob Ⅳ

ob Ⅴ



ob Ⅵ

安山岩Ⅰa

安山岩Ⅰb

安山岩Ⅱ

安山岩Ⅲa

安山岩Ⅲb

写真９　石材分類写真（１）

頁岩Ⅰ

頁岩Ⅱ

頁岩Ⅲ

頁岩Ⅳ

頁岩Ⅴ

頁岩Ⅵ

頁岩Ⅶ

頁岩Ⅷ

写真10　石材分類写真（2）

第４章　遺跡の層位

渡畑遺跡は，万之瀬川下流沿岸の自然堤防及び河川敷に立地しており，地層は基本的に河川堆積の砂質土および粘質土である。

本遺跡は，調査区北側の持躰松遺跡に隣接するＡ地点と，調査区南側の芝原遺跡に隣接するＢ地点とに分かれ，それぞれで層位が異なる。

Ａ地点においては，表７に示す通りⅠ～Ⅴ層に分層できる。古墳時代の遺物が出土したⅤ層より下位の層位からは，検出遺構や出土遺物はなかった。そのため，Ａ地点の調査は，古墳時代～近世の遺構・遺物の報告となる。

Ｂ地点においては，表８に示す通りⅫ層に分層できる。しかし，水田耕作や過去数回に及ぶ河川の氾濫に伴う洪水堆積層などを含んでおり，層位が安定していない。北側ではⅢ～Ⅴ層が削平されており，古代から近世までの遺構・遺物はほとんど見られない。また，縄文時代中期から晩期の遺物包含層は，基本層位のⅩ～Ⅻ層に該当するが，明確な時期の区分は困難である。

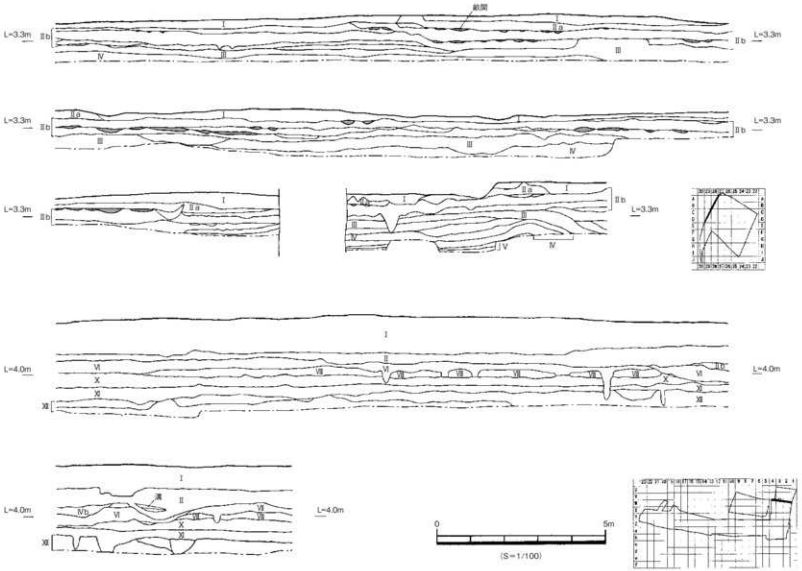
表７　Ａ地点の層位

Ⅰ　層　黒褐色土	現耕作土
Ⅰｂ層　小軽石混白色砂層	畝間状遺構埋土・近世
Ⅱ　層　灰褐色砂質土	近世遺物包含層
Ⅲ　層　黒褐色砂質土	古代・中世遺物包含層
Ⅳ　層　暗黄褐色砂層	
Ⅴ　層　小軽石混明茶褐色砂質土	古墳時代遺物包含層

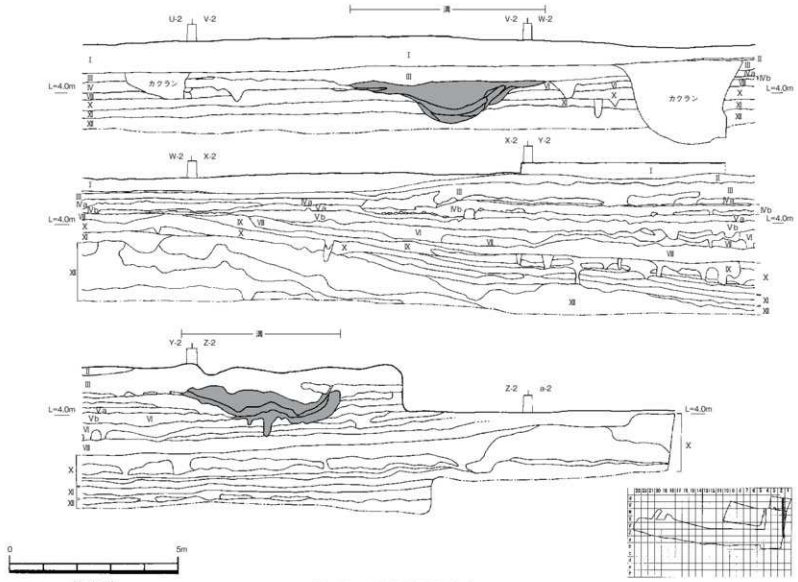
表８　Ｂ地点の層位

Ⅰ　層　灰褐色土	現耕作土
Ⅱ　層　茶褐色砂質土	近世遺物包含層
Ⅲ　層　黒色砂質土	中世後期遺物包含層
Ⅳａ層　黄褐色砂層	
Ⅳｂ層　茶褐色砂質土	中世前期遺物包含層
Ⅴａ層　黄褐色砂層	
Ⅴｂ層　明茶褐色粘質土	古代遺物包含層
Ⅵ　層　黒褐色砂質土	古代・古墳時代遺物包含層
Ⅶ　層　暗黄褐色砂層	
Ⅷ　層　明茶褐色砂質土	古墳時代遺物包含層
Ⅸ　層　黄褐色砂層	
Ⅹ　層　明黒褐色砂質土	縄文時代晩期遺物包含層
Ⅺ　層　黄橙色砂質土	縄文時代後期遺物包含層
Ⅻ　層　白色砂層	縄文時代中期遺物包含層

写真11　Ｂ地点北側土層断面



第５図　土層断面実測図（１）



第６図　土層断面実測図（２）

第５章　縄文時代の調査

第１節　調査の概要（第７図）

１　Ａ地点の調査

確認調査により，26トレンチ（以下「Ｔ」とする）と27Ｔにおいて古墳時代以降の検出遺構・出土遺物は確認できた（第７図）。しかし，24Ｔ～28Ｔ全てにおいて，Ⅵ層より下層については遺物包含層が確認できなかった。

これを受け，本調査において重機を使用して表土を除去した後，人力で１ｂ層以下の掘り下げを行った。その結果，どの地点からも縄文時代の遺構は検出されず，遺物も出土しなかったことが判明した。

Ⅵ層より上層から検出された遺構や出土した遺物については，第６章～第９章で述べることにする。

２　Ｂ地点の調査

確認調査により，19Ｔの表層の下層が縄文時代晩期の包含層であったことが判明し，晩期以降の包含層の多くは削平されていることが確認できた。また，さらにその下層では，後期の包含層が３枚あることが確認できた。同様に，縄文時代中期から晩期に該当するⅩ～Ⅻ層と対応する層が18Ｔでも確認できた。しかし，全く削平を受けていない13Ｔ・14Ｔ・17Ｔ・21Ｔから縄文時代後期の包含層は確認できなかった。このことから，縄文時代後期の調査範囲を18Ｔ付近より東側に限定して調査を進めた。

Ｂ地点の本調査も，Ａ地点同様に重機を使用して表土を除去した後，人力でⅡ層以下の掘り下げを行った。

調査の結果，該期の遺構は集石が３基，土坑が29基，ピットが255基・焼土跡が１基検出された。竪穴住居跡等は検出されなかった。

該期出土土器は総数7,940点を数え，このうち器形と文様などの属性が判明するもの621点を抽出し，掲載することにした。中期の土器は，型式等を明確に分類できたものが５点のみであったため，全てを掲載することにした。後期の土器については，出土点数は多かったが，小片がほとんどで，器形がはっきりするものは少なかった。そのため，器形よりも施文による分類を優先させた。晩期の土器も後期と同様に小片が多いため，器面調整により「粗製土器」「精製土器」「半粗半精製土器」の３つに分類した。その他，足形土製品を含め，用途が不明の土製品24点を一括した。

石器は総点数381点を数え，剥片石器と礫石器とに分け，器種が判明しているもの49点を掲載した。時期については，中期～晩期が混在しており，明確な分類が困難なことから，総括して報告を行うことにした。

第２節　遺構（第８～11図）

遺構配置は，第８図～第11図に示したとおりである。遺構は，Ｖ～Ｙ－５～10区にかけて集中しており，やや離れてＵ・Ｖ－１区にも土坑とピットが集中している。Ｕ～Ｙ－２～４区からは，該期の遺構は検出されなかった。Ｚ－９区から検出された集石３号の周囲には，遺構が確認されなかった。

１　集石

Ⅺ・Ⅻ層該当の集石は３基が確認され，調査区北側から番号を付けていった。

⑴１号集石（第12図）

Ｘ－５区のⅫ層から検出された。礫は80㎝×80㎝の範囲に集中している。レベル差は10㎝の範囲内に収まっている。

礫の大きさは約２～５㎝と小さく，角礫が主流を占める。石材は，万之瀬川流域でよく見られる頁岩が主体を成すが，他の石材も若干見られた。

本集石から黒曜石を石材とした石核が一個出土したが，他に石器類は出土しなかったことから，意図的に置かれたものではなく，紛れ込んでいたものと考えられる。

掘り込みは，はっきりと確認できなかった。礫は，被熱が認められるものがほとんどであるが，埋土内に炭化物，焼土は確認できなかった。

⑵２号集石（第12図）

Ｘ－６区のⅫ層から検出された。１号集石とは５ｍ程しか離れておらず，周囲にはピットや焼土跡が検出されていることから，調理場等の生活の跡が窺える。

礫は60㎝×80㎝の範囲に収まっており，２～10㎝大の頁岩を主体とした円礫で構成されている。断面で確認したところ，レベル差が70㎝もあることから，廃棄された礫である可能性が高い。

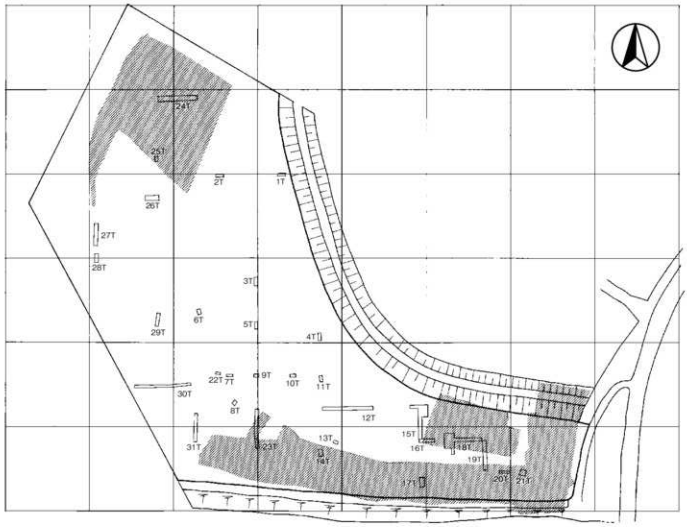
ほとんどの礫に被熱が確認されるが，炭化物や明瞭な焼土は認められなかった。

⑶３号集石（第13図）

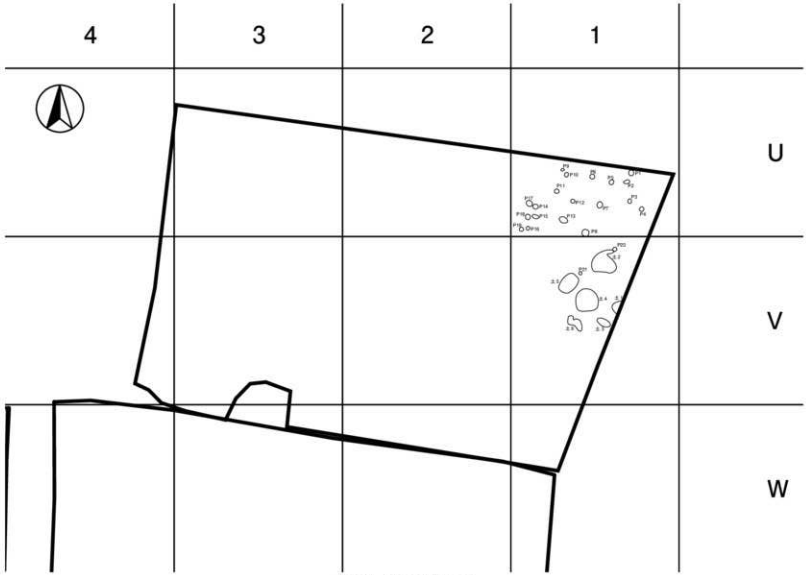
３号集石は，１・２号集石とは離れＺ－９区のⅪ層から検出された。また，周囲にも該期のピットや土坑は検出されなかった。

水磨によって角のとれた５㎝大の礫が，直径60㎝の円形の範囲に密集している。掘り込みは30㎝の深さで，構成礫のレベル差は20㎝である。

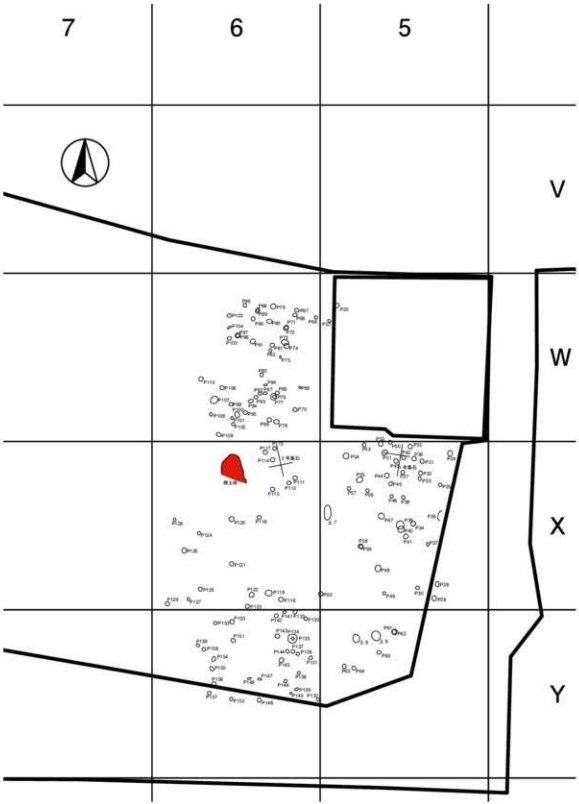
礫に被熱は確認できず，埋土に焼土跡や炭化物は確認できなかった。



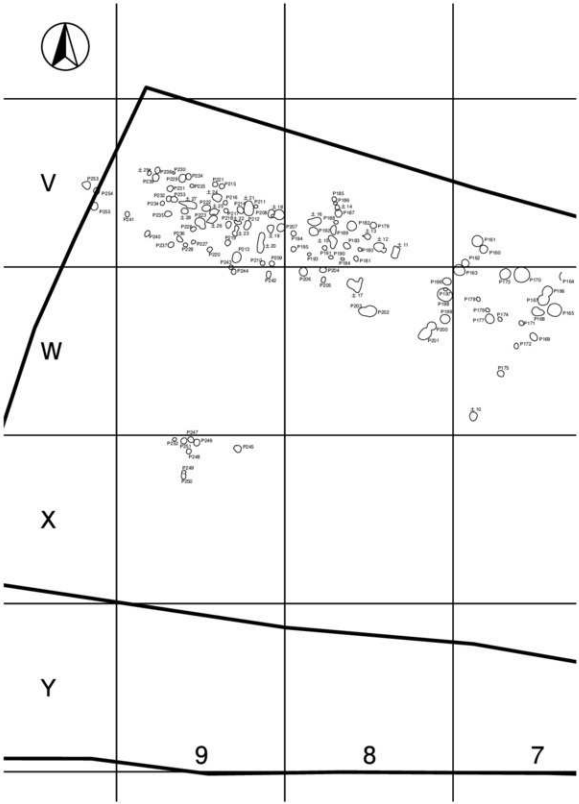
第７図　確認トレンチ配置図（１：2,000）



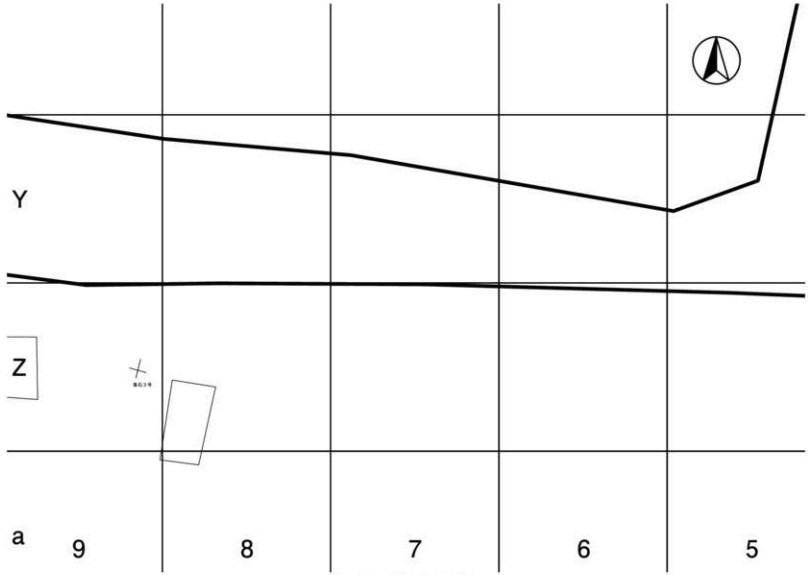
第８図　遺構配置図（１）



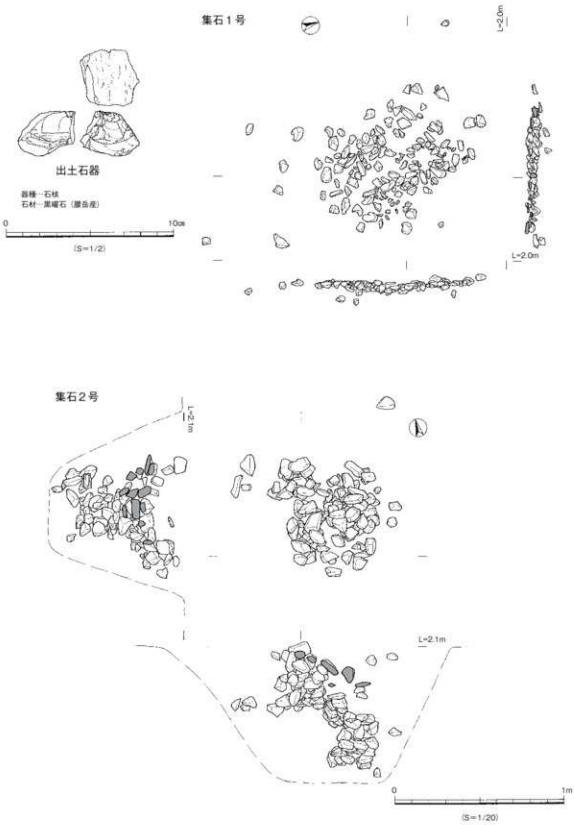
第９図　遺構配置図（２）



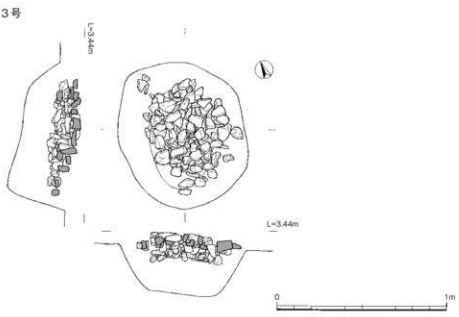
第10図　遺構配置図（3）



第11図　遺構配置図（4）


集石１号
L=2.0m
出土石器
器種：石核
石材：黒曜石（腰岳産）
0
10cm
(S=1/2)
L=2.0m
集石２号
L=2.1m
L=2.1m
0
1m
(S=1/20)

第12図　集石実測図（１）



第13図　集石実測図（２）

２　土坑（第14図１～第18図29）

該期の土坑は29基が確認され，調査区北側からグリッドごとに区切って番号を付けていった。

土坑１～６は，Ｖ－１区から検出された。隣接するＵ－１区からは，同時期と思われるピットが19基検出された。いずれも埋土は砂質土で，細かい炭化物を含んでいる。１は東側調査区の壁際で検出された。２は長径168㎝，短径148㎝の大型土坑である。土坑内にピットが３基認められたが，いずれも深さ10㎝程度と浅い。４も長径144㎝，短径139㎝と大型の土坑である。土坑内にピットは確認できなかった。５は，土坑内にピットが３基認められ，１基は深さが約50㎝ある。

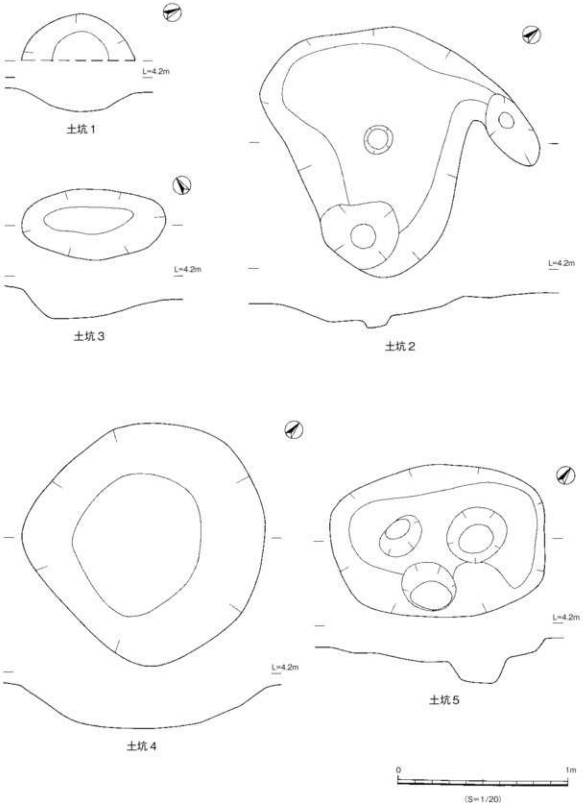
土坑７は，Ｘ－５区から検出され，埋土内から土器片が大量に出土した。土器は，晩期の浅鉢で，全て内面を上にして重なるように検出された。埋土は暗紫褐色粘質土で，炭化物をやや含むが焼土は確認できなかった。

土坑８・９はＹ－５区から検出された。埋土は砂質土で，細かい炭化物を含んでいる。

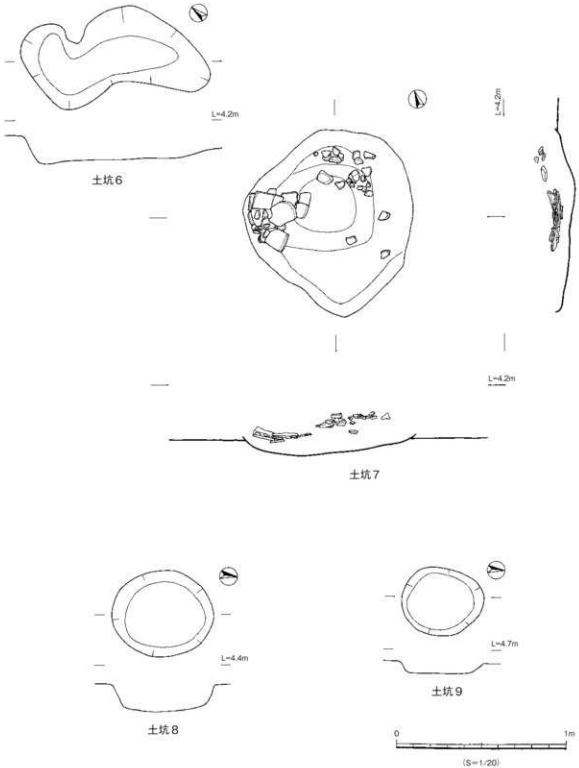
土坑10はＷ－７区から検出された。周囲にやや大きめのピットが密集している。埋土に焼土，炭化物を含み，型式不明の土器小片が検出された。

土坑11～29は，Ｖ・Ｗ－８・９区から検出された。11・13・19・22は，いずれも小型の土坑であり，埋土に焼土，炭化物，軽石を含む。12・14～18・20・21・23～29は，型式不明の土器小片が検出された。埋土に焼土と少量の炭化物を含む。15・17は深さが50㎝あり，埋土に軽石を含む。24からは，礫が２点検出された。この区域で検出された土坑は小型であるが，土坑内にピットをともなうものが多い。

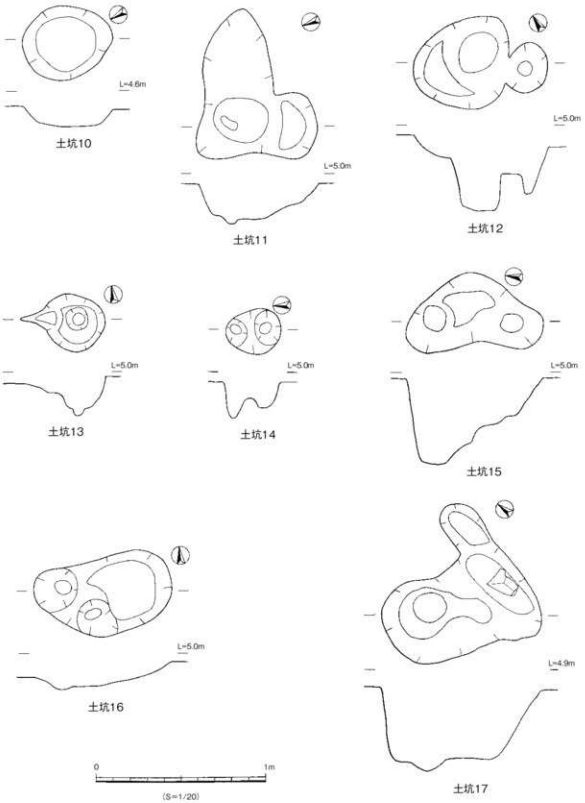
各土坑の埋土状況等の詳細については，表９に示したとおりである。



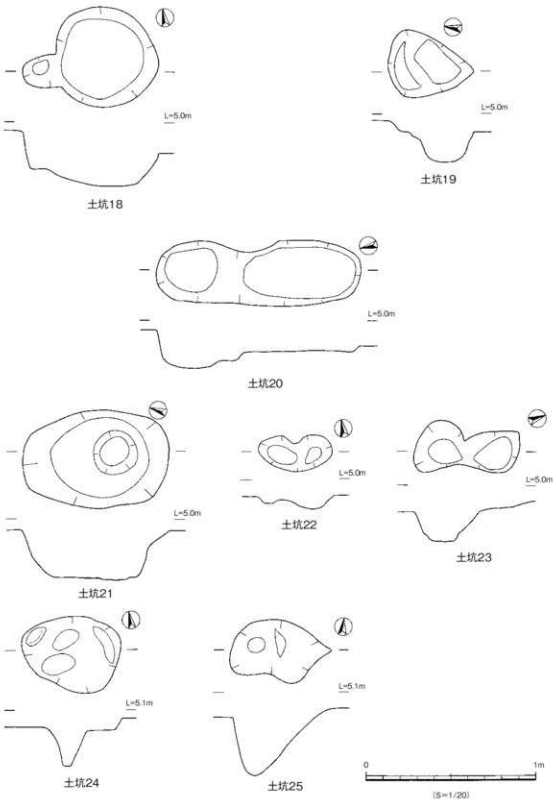
第14図　土坑実測図（1）



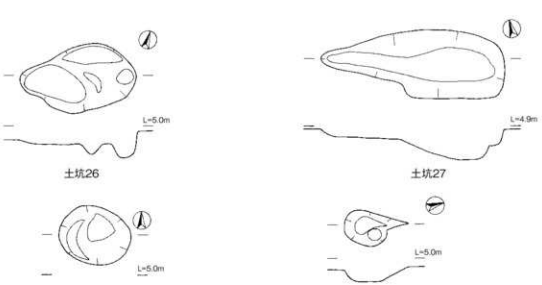
第15図　土坑実測図（2）


L=4.6m
土坑10
L=5.0m
土坑11
L=5.0m
土坑12
L=5.0m
土坑13
L=5.0m
土坑14
L=5.0m
土坑15
L=5.0m
土坑16
L=4.9m
土坑17
0
1m
(S=1/20)

第16図　土坑実測図（3）


L=5.0m
土坑18
L=5.0m
土坑19
L=5.0m
土坑20
L=5.0m
土坑21
L=5.0m
土坑22
L=5.0m
土坑23
L=5.1m
土坑24
L=5.1m
土坑25
0
1m
(S=1/20)

第17図　土坑実測図（4）



第18図　土坑実測図（5）

表9　土坑一覧表

レイアウト番号	遺構番号	出土区	層位	計測値(cm)			埋土状況
				長径	短径	深さ	
1	1588	V－1区	X層	66	52	12.5	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
2	1586	V－1区	X層	168	148	23.5	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
3	1503	V－1区	X層	86	42	16.5	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
4	1572	V－1区	X層	144	139	25	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
5	1571	V－1区	X層	127	90	50.5	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
6	1502	V－1区	X層	114	45	18.5	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
7	2059	X－5区	XⅠ層	110	100	13	土器片多量に検出。埋土に焼土、炭化物あり。
8	2137	Y－5区	XⅡ層	60	52	16	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
9	2112	Y－5区	XⅠ層	46	39	24	埋土は砂質土。細かい炭化物を含む。
10	2165	W－7区	X層	50	40	13	土器片検出。埋土に焼土、炭化物を含む。
11	2200	V－8区	X層	90	65	24	埋土に焼土、炭化物、軽石含む。
12	2199	V－8区	X層	77	48	46	土器片検出。埋土に焼土、炭化物、軽石含む。
13	2198	V－8区	X層	44	32	23	埋土に焼土、炭化物、軽石含む。
14	2192	V－8区	X層	34	25	22	土器片検出。埋土に焼土、炭化物、軽石含む。
15	2193	V－8区	X層	74	45	52	土器片検出。埋土に焼土、炭化物、軽石含む。
16	2189	V－8区	X層	73	43	16	土器片検出。埋土に焼土、炭化物、軽石含む。
17	2196	W－8区	X層	83	55	50	土器片検出。埋土に焼土、炭化物あり。
18	2186	V－9区	X層	62	55	32	土器片検出。埋土に焼土、炭化物、軽石含む。
19	2187	V－9区	X層	46	36	7	埋土に焼土、炭化物あり。
20	2188	V－9区	X層	120	40	23	土器片検出。埋土に焼土、炭化物、軽石含む。
21	2182	V－9区	X層	85	55	29	土器片検出。埋土に焼土、炭化物、軽石含む。
22	2183	V－9区	X層	40	20	8	埋土に焼土、炭化物、軽石含む。
23	2184	V－9区	X層	63	28	19	土器片検出。埋土に焼土、炭化物、軽石含む。
24	2177	V－9区	X層	55	50	24	土器片検出。埋土に焼土、炭化物あり。礫2点。
25	2178	V－9区	X層	56	30	40	土器片検出。埋土に焼土、炭化物あり。
26	2179	V－9区	X層	53	36	10	土器片検出。埋土に焼土、炭化物あり。
27	2171	V－9区	X層	108	38	18	土器片検出。埋土に焼土、炭化物あり。
28	2172	V－9区	X層	45	41	18	土器片検出。埋土に焼土、炭化物あり。
29	2166	V－9区	X層	40	21	9	土器片検出。埋土に焼土、炭化物あり。

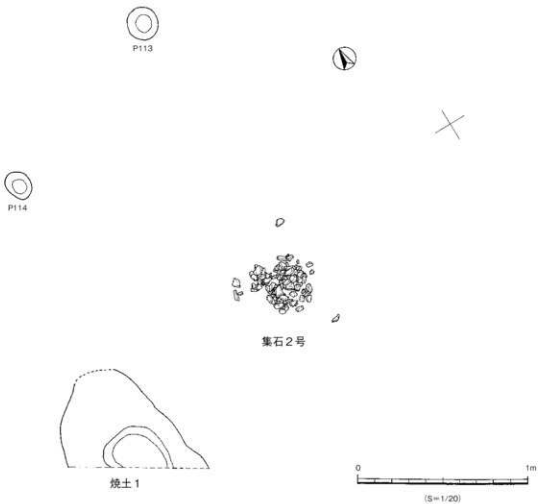
3　焼土(第19図)

焼土はX－6区から検出された1基のみである。遺物の出土は認められなかった。直径75cm程の円内に炭化物が集中しており，その周囲にまばらな状態で炭化物が広がる直径150cm程の区域である。周辺から検出されたピット113・114の埋土も炭化物を多く含み黒っぽくなっていた。ピット117からは，炭化物が確認できなかった。これらの関連性については，今後検討していく必要がある。また，東側にある2号集石には，埋土に炭化物が確認できず，焼土もないことから，関連性は薄いと考えられる。

4　ピット

該期のピットは，X～XII層上面で検出されたものを抽出した。255基が確認され，土坑と同様に調査区北側からグリッドごとに区切って番号を付けていった（第8図～第11図）。埋土の状況等も考慮して，後期～晩期への位置付けを行ったが，上層で検出できなかったものも含まれる可能性もある。検出状況から，平地式住居を指摘できる明確なまとまりをつかむことはできなかった。

各ピットの詳細については，表10～12に示したとおりである。



第19図　焼土跡実測図

表10　ピット一覧表（1）

番号	区		層	遺構番号	長径	短径	深さ
1	U	1	X	1594	34	31	35
2	U	1	X	1578	38	22	25.5
3	U	1	X	1570	28	23	27
4	U	1	X	1569	28	28	31.5
5	U	1	X	1591	31	26	23
6	U	1	X	1590	30	29	20
7	U	1	X	1579	40	34	18.5
8	U	1	X	1580	45	43	13
9	U	1	X	1574	22	15	13
10	U	1	X	1592	29	23	23
11	U	1	X	1575	29	26	18
12	U	1	X	1573	25	24	26
13	U	1	X	1576	53	37	27
14	U	1	X	1583	36	30	20
15	U	1	X	1582	43	24	15
16	U	1	X	1581	23	21	30
17	U	1	X	1585	41	33	63.5
18	U	1	XI	1584	34	30	47
19	U	1	XI	1587	25	25	12.5
20	V	1	X	1593	27	25	17.5
21	V	1	X	1577	21	20	21
22	W	5	XI	2063	35	26	10.5
23	W	5	XI	2064	23	16	18
24	X	5	XI	2085	34	29	27.5
25	X	5	XI	2101	21	21	7.5
26	X	5	XI	2102	60	40	15
27	X	5	X	1943	24	14	15.5
28	X	5	X	1944	33	23	15
29	X	5	X	1945	30	25	20
30	X	5	XI	2109	22	19	18.5
31	X	5	XI	2086	27.5	24	19
32	X	5	XI	2099	29	20	21
33	X	5	XI	2100	24	17	18
34	X	5	XI	2106	30	27	20
35	X	5	XI	2087	28	26	21.5
36	X	5	X	1933	28	27	15
37	X	5	XI	2098	24	22	17
38	X	5	XI	2103	22	21	13.5
39	X	5	XI	2105	49	47	14
40	X	5	X	1942	40	39	19.5
41	X	5	XI	2107	31	27	17
42	X	5	XI	2088	25	24	14.5
43	X	5	XI	2089	28	25	26.5
44	X	5	XI	2096	32	27	13
45	X	5	XI	2097	26	20	21
46	X	5	XI	2104	21	19	14.5
47	X	5	X	1934	38	35	12.5
48	X	5	X	1932	43	35	19
49	X	5	X	1946	20	19	21.5
50	WX	5	XI	2091	25	21	15
51	X	5	XI	2090	37	29	17.5
52	X	5	XI	2092	30	25	8.5
53	X	5	XI	2093	23	23	9.5
54	X	5	XI	2094	36	35	20.5
55	X	5	XII	2153	39	30	16.5
56	X	5	XI	2095	21	20	11
57	X	5	XII	2136	21	20	19.5
58	X	5	XI	2108	29	26	14.5
59	X	5	X	1935	28	21	26
60	X	5	XI	2110	27	27	10
61	Y	5	XI	2111	28	27	8.5
62	Y	5	X	1947	34	30	25.5
63	Y	5	X	1948	25	20	21.5
64	Y	5	XI	2114	24	21	8.5
65	Y	5	XI	2113	26	21	26
66	W	6	XI	2065	20	20	10.5
67	W	6	X	1963	28	23	15
68	W	6	X	1964	28	20	24
69	W	6	XII	2135	14	12	5
70	W	6	X	1987	24	24	17.5
71	W	6	XI	2070	25	24	18.5
72	W	6	X	1965	32	25	15
73	W	6	X	1966	46	30	15
74	W	6	XI	2071	33	30	13.5
75	W	6	XII	2134	16	11	12
76	W	6	X	1985	24	20	32.5
77	W	6	X	1986	22	18	20.5
78	W	6	XI	2077	35	27	17
79	W	6	XI	2066	31	30	15
80	W	6	X	1968	34	24	20
81	W	6	X	1967	26	26	15
82	W	6	XI	2072	22	18	8
83	W	6	XI	2073	25	20	28
84	W	6	X	1984	22	12	10
85	W	6	XII	2152	39	36	12
86	W	6	X	1988	28	24	23
87	W	6	X	1983	26	16	11.5
88	W	6	X	1969	22	22	9
89	W	6	XI	2067	26	24	22.5
90	W	6	X	1970	27	23	16

表11　ピット一覧表（2）

番号	区		層	遺構番号	長径	短径	深さ
91	W	6	X	1971	30	30	24.5
92	W	6	X	1982	22	14	11
93	W	6	X	1981	24	20	12
94	W	6	X	1980	32	20	20
95	W	6	X	1979	26	22	12
96	W	6	XⅠ	2068	24	23	10
97	W	6	X	1972	32	24	13.5
98	W	6	XⅠ	2069	24	22	7.5
99	W	6	X	1978	24	20	9
100	W	6	XⅡ	2151	36	28	12
101	W	6	X	1990	16	16	6
102	W	6	XⅠ	2075	21	19	7
103	W	6	X	1975	24	20	13.5
104	W	6	X	1974	25	10	20
105	W	6	X	1973	28	20	16.5
106	W	6	X	1989	29	24	15.5
107	W	6	X	1977	44	36	23.5
108	W	6	XⅠ	2074	22	19	8.5
109	W	6	XⅠ	2076	31	22	11.5
110	W	6	X	1976	30	26	10
111	X	6	XⅠ	2081	28	24	13
112	X	6	XⅠ	2082	24	23	26
113	X	6	XⅠ	2078	24	22	15
114	X	6	XⅠ	2080	28	25	12.5
115	X	6	XⅠ	2083	29	24	18.5
116	Y	6	XⅠ	2116	30	24	28
117	X	6	XⅠ	2079	27	24	13
118	Y	6	XⅠ	2115	27	22	10
119	Y	6	XⅠ	2117	42	34	9.5
120	X	6	XⅠ	2140	31	29	11.5
121	X	6	XⅠ	2141	26	24	10
122	X	6	X	1955	30	30	12
123	Y	6	XⅠ	2120	25	23	17
124	X	6	XⅠ	2142	21	19	14
125	Y	6	XⅠ	2118	25	23	9
126	X	6	XⅠ	2143	30	27	9.5
127	Y	6	XⅠ	2119	19	15	10
128	X	6	XⅡ	2204	28	16	68
129	X	6	XⅠ	2205	26	25	24.5
130	Y	6	X	1957	22	18	12.5
131	Y	6	X	1961	27	20	10.5
132	Y	5・6	XⅡ	2138	20	19	10.5
133	Y	6	XⅠ	2121	28	23	22.5
134	Y	6	X	1958	58	56	34
135	Y	6	XⅡ	2139	19	18	8.5

番号	区		層	遺構番号	長径	短径	深さ
136	Y	6	X	1960	21	19	12
137	Y	6	X	1959	23	22	9
138	Y	6	X	1939	19	18	7
139	Y	6	X	1962	25	12	14
140	Y	6	X	1940	15	12	8
141	Y	6	X	1956	22	14	20
142	Y	6	XⅠ	2122	25	22	19.5
143	Y	6	XⅠ	2133	30	26	15
144	Y	6	XⅠ	2132	24	20	17
145	Y	6	X	1941	32	26	15
146	Y	6	XⅠ	1938	23	20	10
147	Y	6	X	1937	24	12	12
148	Y	6	XⅠ	2131	27	23	11
149	Y	6	XⅠ	1936	23	11	19
150	Y	6	X	1954	27.5	24	12
151	Y	6	X	1953	27	24	38.5
152	Y	6	XⅠ	2130	22	17	15
153	Y	6	XⅠ	2123	22	20	18.5
154	Y	6	XⅠ	2126	30	22	13.5
155	Y	6	XⅠ	2127	29	20	19.5
156	Y	6	XⅠ	2128	30	27	18
157	Y	6	XⅠ	2129	23	22	13.5
158	Y	6	XⅠ	2125	23	23	12.5
159	Y	6	XⅠ	2124	23	18	19
160	V	7	X	2007	24	23	17
161	V	7	X	2006	34	32	35
162	W	8	X	2008	23	22	21
163	VW	7	X	2009	36	32	19.5
164	W	7	X	1998	30	25	27
165	W	7	X	2001	43	40	47.5
166	W	7	X	1999	33	29	10
167	W	7	X	2000	35	33	13
168	W	7	X（下）	1993	75	52	20
169	W	7	X	2002	42	31	50
170	W	7	X	2003	47	47	55.5
171	W	7	X（下）	1994	30	30	20.5
172	W	7	X	1995	33	28	20
173	W	7	X	2004	35	30	40
174	W	7	X	2149	30	24	24
175	W	7	X	1997	41	37	24.5
176	W	7	X	2148	26	22	23
177	W	7	X	2005	31	30	33
178	W	7	X	2147	28	20	20.5
179	V	8	X	2016	18	18	13
180	V	8	X	2197	28	22	33.5

表12　ピット一覧表（3）

番号	区		層	遺構番号	長径	短径	深さ
181	V	8	X	2018	34	25	10
182	V	8	X	2017	28	28	7.5
183	V	8	X	2019	45	34	28.5
184	X	8	X	2020	24	16	2.5
185	V	8	X	2190	30	29	6
186	V	8	X	2191	24	18	9
187	V	8	X	2021	50	43	11
188	V	8	X	2022	28	22	11
189	V	8	X	2023	56	34	38
190	V	8	X	2024	27	20	3
191	V	8	X	2194	30	27	8.5
192	W	8	X	2026	107	88	33
193	V	8	X	2027	23	20	12
194	V	8	X	2029	34	30	13.5
195	V	8	X	2030	32	30	59.5
196	W	8	X	2010	26	20	19
197	W	7	X	2146	23	20	20.5
198	W	8	X	2011	45	40	64.5
199	W	8	X	2012	29	27	24
200	W	8	X	2058	26	27	31.5
201	W	8	X	2013	42	30	6
202	W	8	X	2015	35	32	9.5
203	W	8	X	2014	28	24	23.5
204	W	8	X	2025	42	32	36
205	W	8	X	2195	36	25	16
206	W	8	X	2028	53	50	22
207	V	9	X	2031	50	45	18.5
208	V	9	X	2185	50	37	32.5
209	V	9	X	2054	32	31	40
210	V	9	X	2053	29	27	6
211	V	9	X	2032	24	20	8.5
212	V	9	X	2033	57	37	35
213	V	9	X	2052	68	50	23.5
214	V	9	X	2181	46	35	25.5
215	V	9	X	2034	33	30	32.5
216	V	9	X	2036	29	26	12.5
217	V	9	X	2037	28	24	19
218	V	9	X	2038	42	33	13
219	V	9	X	2051	36	34	25.5
220	V	9	X	2180	32	28	25
221	V	9	X	2035	32	31	8.5
222	V	9	X	2176	52	30	19
223	V	9	X	2050	78	55	36
224	V	9	X	2170	38	36	40.5
225	V	9	X	2039	26	20	12.5

番号	区		層	遺構番号	長径	短径	深さ
226	V	9	X	2175	36	27	12.5
227	V	9	X	2049	28	23	16.5
228	V	9	X	2174	24	24	7
229	V	9	X	2040	50	39	39
230	V	9	X	2169	18	12	6
231	V	9	X	2043	38	36	24
232	V	9	X	2044	37	28	14.5
233	V	9	X	2045	41	34	31
234	V	9	X	2168	24	26	21
235	V	9	X	2046	43	33	14.5
236	V	9	X	2173	42	27	9
237	V	9	X	2048	36	30	44.5
238	V	9	X	2041	40	30	36
239	V	9	X	2042	44	39	55.5
240	V	9	X	2047	41	27	48
241	V	9	X	2167	33	26	30.5
242	W	9	X	2055	45	27	35.5
243	W	9	X	2057	28	24	6.5
244	W	9	X	2056	32	28	28.5
245	X	9	XI	2163	47	42	63.5
246	X	9	XI	2159	41	40	48.5
247	X	9	XI	2158	37	35	54
248	X	9	XI	2160	34	30	10
249	X	9	XI	2161	25	20	23
250	X	9	XI	2162	40	27	9.5
251	X	9	XI	2157	37	35	10.5
252	X	9	XI	2156	25	20	10
253	V	10	X	2207	53	48	35
254	V	10	X	2208	41	34	38.5
255	V	10	X	2209	51	42	35

第３節　遺物

１　出土土器（第20～22図）

該期の出土土器については，中期中葉に相当するもの（Ⅰ・Ⅱ類），中期後葉～後期に相当するもの（Ⅲ～Ⅻ類），晩期に相当するもの（Ⅻ類）として大きく３つに分類した。中期後葉～後期にかけての移行期については，時期差による明確な型式の分類が困難なため一括することにした。

中期中葉の掲載遺物は，Ｘ－５・６区の範囲に４点，Ｙ－２区に１点出土した（第20図）。中期後葉～後期の遺物は，Ｕ～Ｚ－１～７区の範囲で出土しており，Ｚ－３区にやや集中している傾向が見られる（第21図）。この区域は検出遺構の集中区でもあり，関連が強いと思われる。

晩期の遺物は，全体的に散在して出土しており，集中区は見られない（第22図）。

⑴ 縄文時代中期中葉出土土器

ア　Ⅰ類（第23図１～４）

器形がキャリパー状を呈するものであり，４点を図化した。

１と２は，口縁部がやや内湾し，胴部の張り出しが弱い。口縁部に波状の突帯文と，沈線による波状文を組み合わせて施文している。さらに沈線内には，連点状に刺突文を施す。器面調整は，貝殻条痕を基本としており，それをそのまま残している。３は底部から胴部へ直線的に立ち上がり，胴部の膨らみが弱いものである。胎土や焼成が２と類似するが，同一個体であるかどうかは確認できなかった。底部はやや上げ底で，径は約６㎝である。４は底部のみの破片であるが，底面に３と同じ条痕によるナデ調整を施していることから，本類の範疇とした。

イ　Ⅱ類（第23図５）

器形は口縁部が外反し，胴部がやや膨らむ深鉢である。貝殻条痕による器面調整を施した後，口縁部のみに５条の凹線文を横位に施している。途中，4.5㎝ほど凹線文を施さない部分が見られる。また，紐状の突帯を口縁部下位に付着させており，さらに胴部の上位には渦巻き状の文様が描かれている。

最大径は口唇部にあり，31㎝を測る。

⑵ 縄文時代中期後葉～後期出土土器

ア　Ⅲ類

口縁部に凹線文を施すもので，太めの凹線文と，やや細めの凹線文がある。66点を図化した。

Ⅲａ類（第24図６～22）

胴部から口縁部にかけて，太い凹線文による不規則な曲線で施文されているものを一括した。器形は，口縁部が肥厚せず，胴部から口縁部にかけて直立もしくは，やや外反しているものが多い。

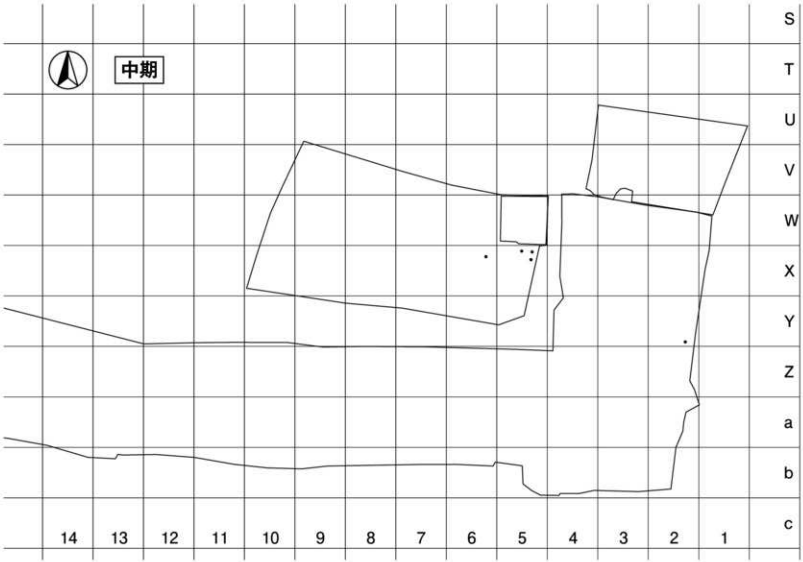
６～８は，口唇部に深い刻みを施す。９・10は平口縁で，口唇部に刻みは施さない。11は口縁部がくの字状に屈曲しており，頸部から口縁部までは直立している。12～17は，口縁部がやや内湾しており，口唇部に棒状の工具による刻みを施している。18～22は胴部片で，胎土に滑石粉を多量に含んでいるため表面が滑らかである。

Ⅲｂ類（第25図23～第27図71）

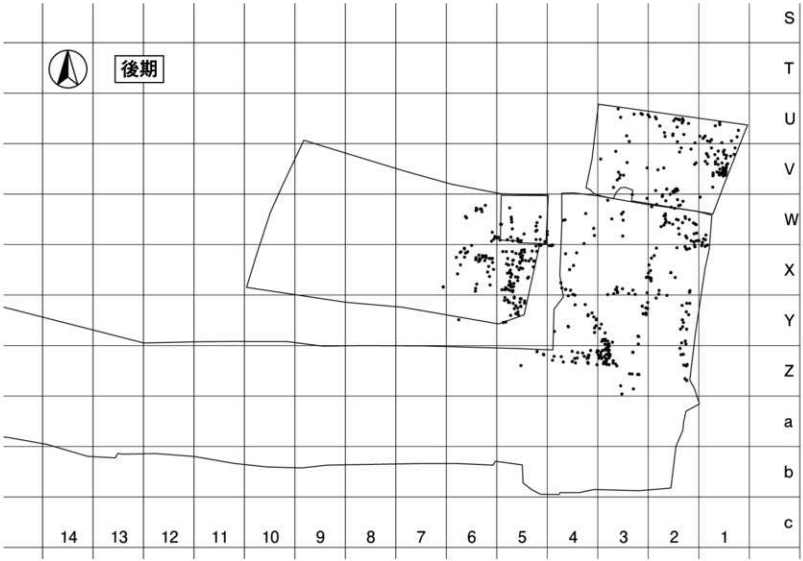
口縁部及びその直下に，太い凹線が集中して施文されているものを一括した。文様は不規則で簡単な曲線を施文しているものや，Ｓ字・逆Ｓ字状を連続的に施しているものがある。口唇部は，やや深めの刻みを施しているものや，浅く細い刻みを施しているものがある。器形は，口縁部がやや肥厚しており，胴部から口縁部にかけて直立したものが多い。

23は復元口径が42㎝で，器形の最大径が胴部上位にある深鉢形土器である。口唇部が平坦で，台形状の突起と施文帯を跨ぐように橋状把手を備えている。24は口縁部に太い凹線文を横位に施した後，縦に２本の突帯を付着させている。25は波状口縁の波頂部である。波頂部には穿孔を施す。26～32は，橋状把手を持つ口縁部，あるいは把手部分の一部である。27は又状に橋状把手が施されている。２か所の穿孔と切り抜きにより，人面様を呈している。28は把手の頂部に太い凹線文が施され，丁寧なナデ調整で仕上げている。29は波状口縁の波頂部である。波頂部上位の内面に細く短い刺突文を施す。33は，口唇部に縦状の突帯を貼り付けている。34は，口縁部下位に突帯を付着させている。35～38は口縁部に凹線文を縦位に施している。39～41は，口縁部に太い凹線文を横位に施し，口唇部に刻みを施している。

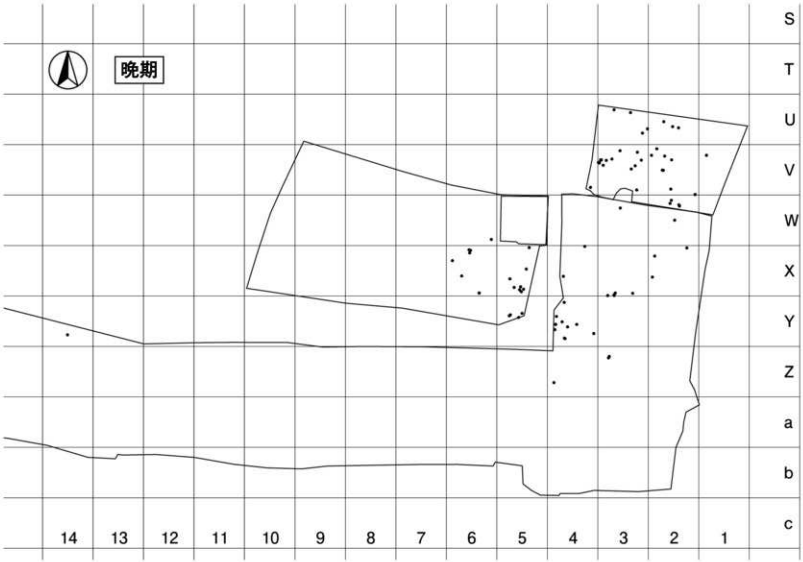
42～53は，くの字状もしくはＳ字状の文様が口縁直下の狭い範囲で連続的に施されている。42はまか所の突出部を有する口縁部で，波頂部にも小さいＳ字が連続的に施文されている。43・44は口唇部に連点刺突文を施している。45・46は口唇部に連続的な刻みを施している。47・48はくの字状の文様を施した後，その上位に太い凹線文を横位に施している。50は口縁部上位の器壁が薄く，下位は肥厚している。54～61は，やや太めの凹線文が施され，口唇部に浅く太い刻みを施す。61は凹線内に細いスジ状の線が残る。62～71は口縁部に連点やＶ字など，連続的な刺突文が施されている。62は口縁部上位に貝殻刺突文を施し，下位に太い凹線文を施す。64は口縁部上位と口唇部に棒状の工具を用いて，連点を施している。



第20図　縄文時代中期掲載遺物出土状況図

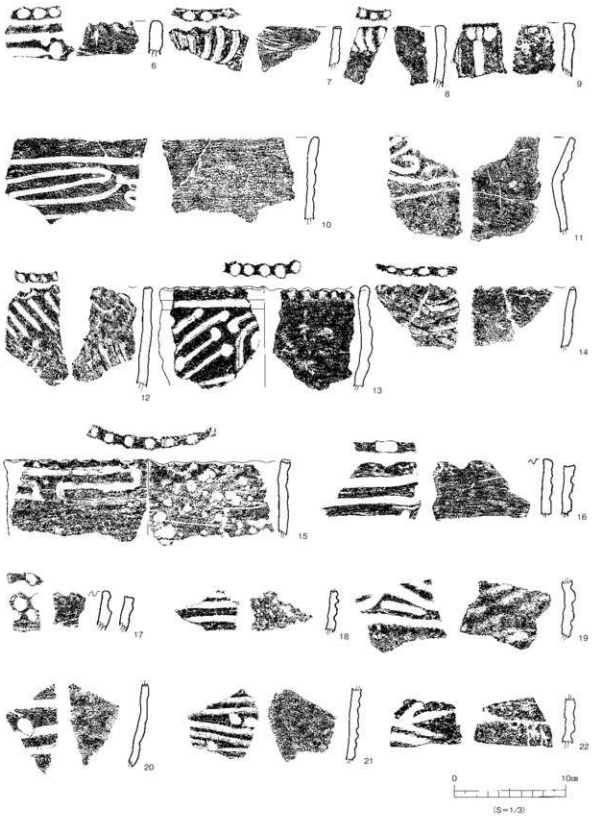


第21図　縄文時代後期掲載遺物出土状況図

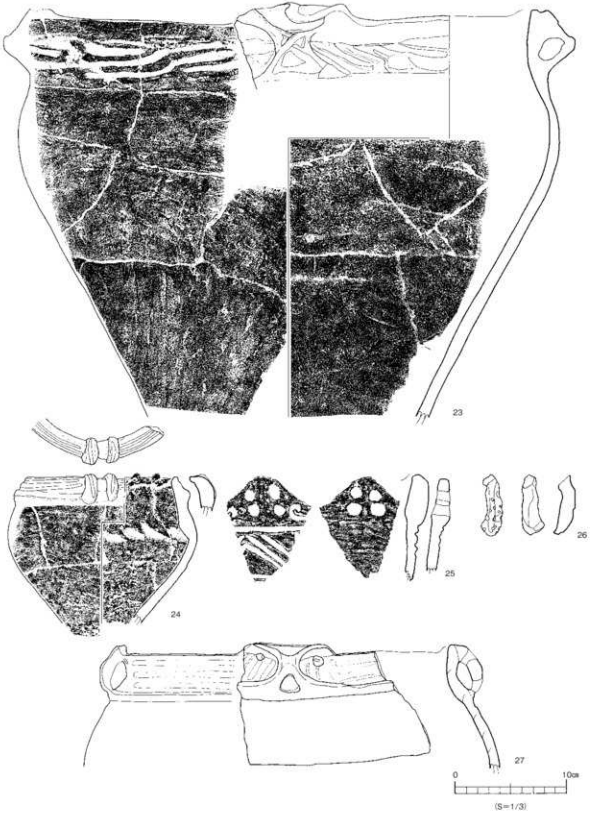


第22図　縄文時代晩期掲載遺物出土状況図

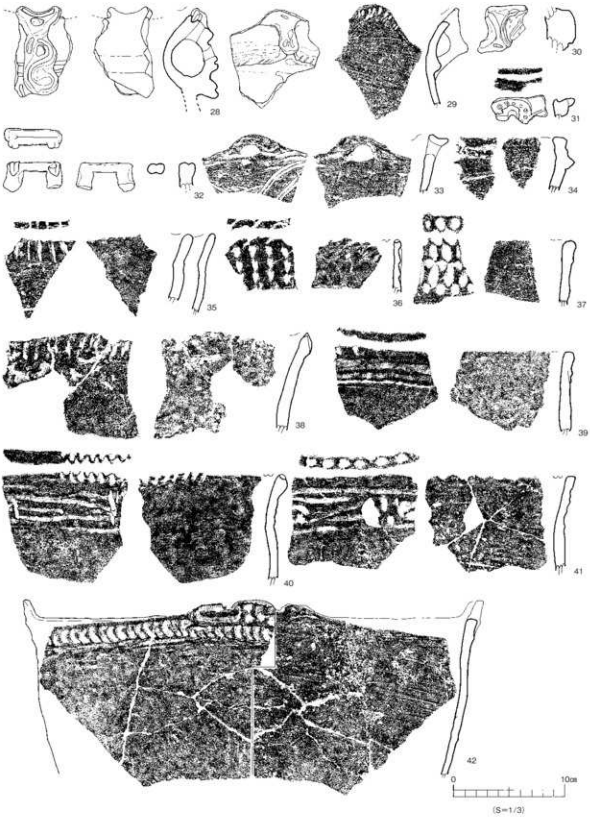
第23図　縄文時代出土土器実測図（1）Ⅰ・Ⅱ類



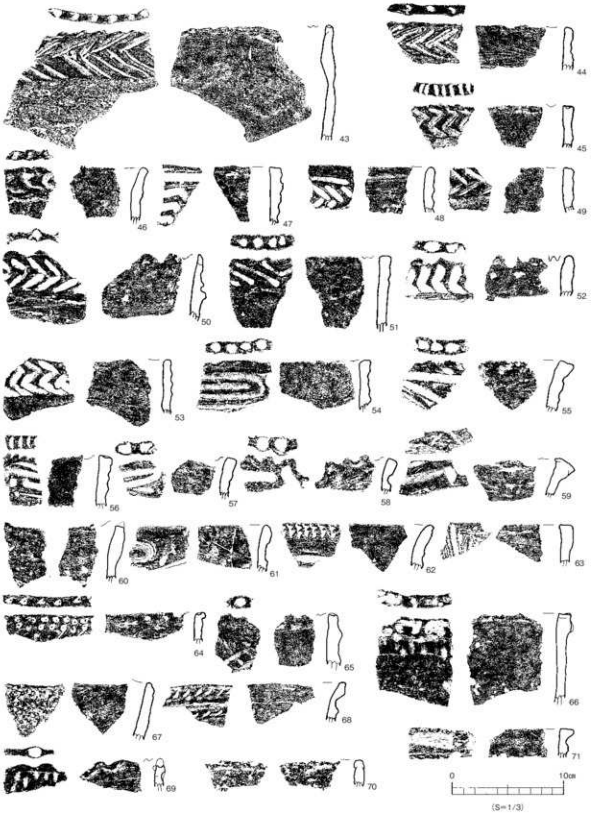
第24図　縄文時代出土土器実測図（2）Ⅲa類



第25図　縄文時代出土土器実測図（3）Ⅲb類



第26図　縄文時代出土土器実測図（4）Ⅲb類



第27図　縄文時代出土土器実測図（5）Ⅲb類

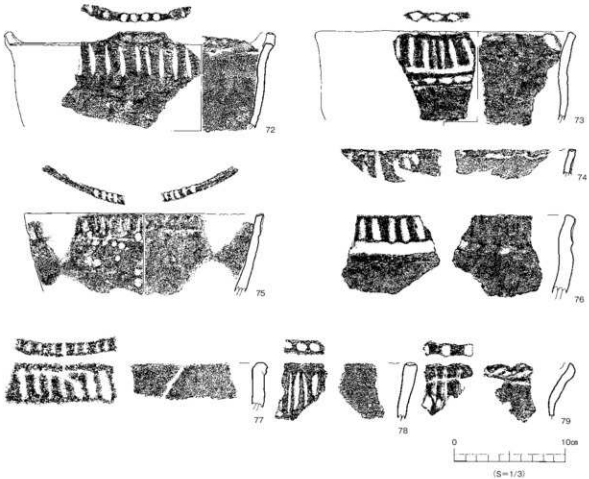
イ　Ⅳ類（第28図72～第30図121）

細い沈線文が，口縁部のみに施されているものを一括した。文様は，直線を連続的に縦位，横位，斜位に施している。口縁部は外反，あるいは直行するものが多い。

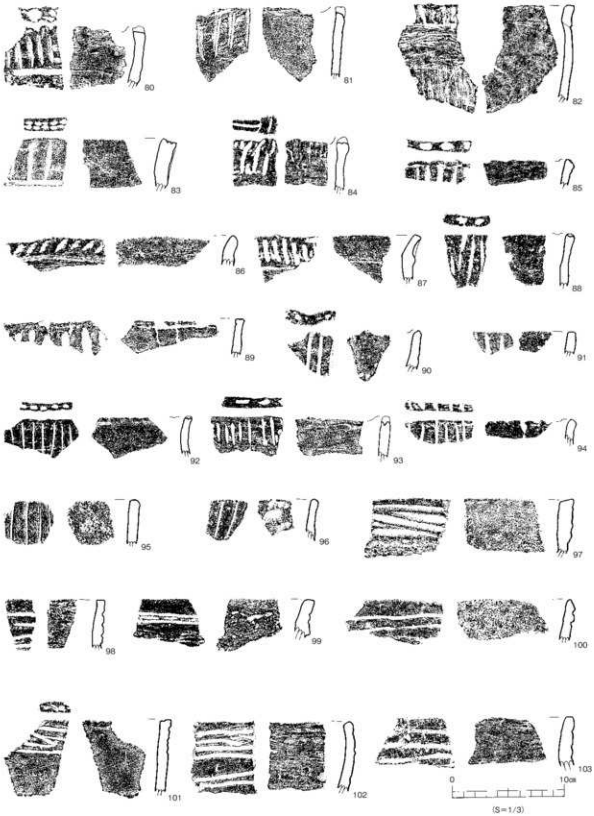
72～96は，沈線文を縦位に施している。72～75は，口唇部に連続的な浅い刺突文を施している。73・76は縦位に施した沈線文の下位に，太めの沈線を横位に施している。77は口唇部を肥厚させており，口唇部に浅い刺突文を施す。78～82は，先の粗いやや太めの工具を用いて施文しており，沈線内に数条のスジが認められる。83～91は，先の粗い細めの工具を用いて施文している。92～96は，細い棒状の工具により浅い沈線文を施している。

97～112は，沈線文を横位に施している。97～103は，やや太めの工具を用いて施文している。99は２本の平行沈線間に，断続的な沈線文を施す。101は口唇部に浅めの刺突文を連続的に施す。102は口縁部が内湾している。104～106は，沈線内に葉脈痕が確認できることから，太く先端が粗い工具を用いて施文していると考えられる。107は細い棒状の工具により浅い沈線を施す。108は口唇部に１本の深い沈線を施す。109は内面をナデ調整により粗く仕上げている。110・111は，ともに口唇部に棒状の工具を用いて深い刻みを４点施している。111は，その刻みに葉脈痕が認められる。112は摩耗が激しく，沈線は１本だけ認められる。

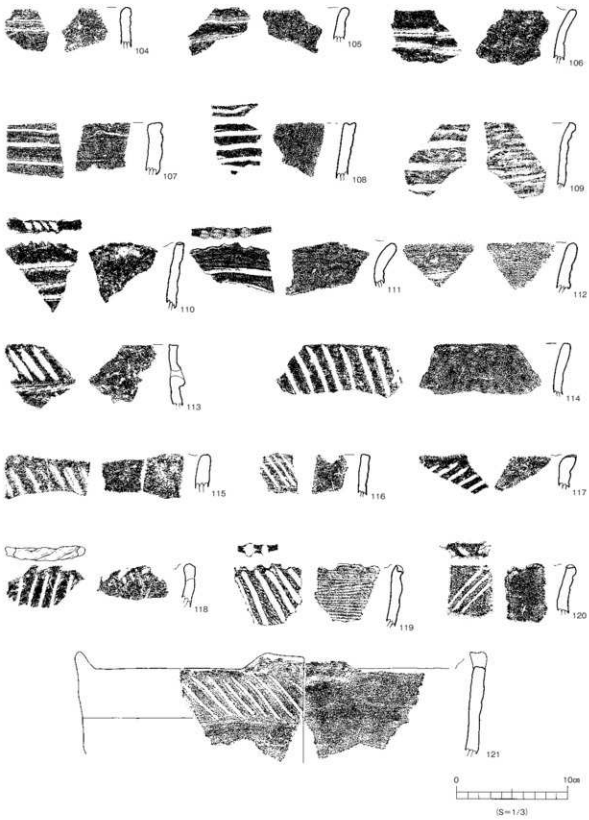
113～121は沈線文を斜位に施している。113は口縁部下位に深い沈線文を施している。114～121は細い棒状の工具を用いて施文している。118は，口唇部に粘土ねじり紐を貼り付けている。121は平口縁に台形状の突起を貼り付けている。



第28図　縄文時代出土土器実測図（６）Ⅳ類



第29図　縄文時代出土土器実測図（7）Ⅳ類



第30図　縄文時代出土土器実測図（8）Ⅳ類

ウ　V類

２本の平行沈線による沈線文を基本としたものである。また，編物圧痕がある底部を同時期の土器と判断し，一括して取り上げた。これらは，該期土器の主流をなすものであり，164点を図化した。

Va類（第31図122～第39図190）

胴部から口縁部にかけて施文されているものを一括した。２本の平行な沈線文が施されているものが多い。口縁部は，やや外反しており，頸部にかけて直立しているものが多い。

122～162は，曲線や直線を不規則に組み合わせた文様を沈線文により施している。122～125は，頸部を持たず胴部から口縁部まで直立したものである。122・123は波状口縁であり，122は波頂部に穿孔を施す。復元口径の最大は口唇部にあり，32cmを測る。124・125は平口縁で，深い２本の平行沈線文により複雑な文様を施す。126～162は，口縁部が外反，あるいは直立しているものであり，胴部は膨らみを持つものが多い。126は棒状の施文具を用いたと思われ，細くて深い沈線文が施されている。復元口径の最大は口唇部にあり，24cmを測る。127は波状口縁であるが，波頂部の数は不明である。沈線内に細かいスジ状の痕跡が見られる。128～130は口縁部が外反し，胴部の膨らみが弱い。131・132は沈線文が横位に施され，施文後に丁寧にナデ調整を施している。133は口縁部が大きく外反している。134・135は，沈線内に細いスジ状の線が残る。136は，口縁部下位に集中して沈線文を施している。137～140は，大型の深鉢である。137は太く浅い沈線文が施されている。138は口縁部が短くやや外反し，胴部にかけて緩やかに内湾する。復元口径の最大は胴部にあり，40cmを測る大型深鉢である。139は復元口径の最大が胴部にあり，32cmを測る。140は，胴部が最大径になると思われるが，欠損しているため径は不明である。141は，貝殻条痕による器面調整を行った後に，沈線文を廻らしている。142は，頸部がなく口縁部から胴部にかけて膨らみを持つ。143は，口唇部に浅い刻みを施す。144は，沈線内に１本のスジ状になった隆起部分を残す。145～148は，内面を条痕後に丁寧なナデ調整により仕上げている。149は平坦な口唇部に段差を付けて，階段状を呈している。150～160は，口縁部の一部である。161・162は波頂部の突起の部分であり，直下に浅い沈線文を施している。

163～190は，文様が鞆形に施されている。163～168は平口縁の深鉢である。163と168は施文後の隆起を残したままで，粗い棒状の施文具を使用したと思われる細かなスジが沈線文内に数条認められる。164は施文後に，ナデによる器面調整を行っている。165はやや細めの沈線文を施している。166は，太い沈線文を施している。復元口径の最大が口唇部にあり，38cmを測る。167は復元口径の最大が口唇部にあり，30cmを測る。169と170は波状口縁の波頂部であり，ともに穿孔が施されている。171～182は，外反する口縁部の一部である。183～186は内面に貝殻条痕を施し，焼成もしっかりしている。187は口唇部に連続的な刺突文を施す。188～190は，沈線文が施された胴部であるが，小片のため器形は不明である。

Vb類（第39図191～第42図259）

口縁部のみ，またはその直下までを施文しており，曲線や直線を組み合わせた文様である。口縁部は，やや外反しているものが多い。

191～212は，曲線の組み合わせにより施文されているものである。191～193は口唇部に連続的な刺突文を施す。194は小型の深鉢で，胴部が器形の最大である。口縁部の器壁が薄く，肩部は厚い。195は波状口縁の波頂部である。196は口唇部に太い棒状の工具による刺突文を施す。197は，平口縁に深い刻みを施した台形の突起を取り付けている。198～206は，口縁部の一部であり，複雑な文様を施す。207は裏面の口唇部下に連続的な刺突文を施した後，ナデ調整を行っている。208・209は，口縁部が外反し，口唇部に連続的な刺突文を施す。210は，波状口縁の波頂部である。胴部の器壁がかなり薄い。211・212は細い棒状の工具によって，細く深い幾何学模様を施している。

213～218は，曲線と直線による組み合わせにより施文されている。213～216は波状口縁で，口唇部に深い刺突文を施している。217・218は細い棒状の工具を用いて沈線文を施している。

219～253は，直線の組み合わせにより施文されている。深く鋭い沈線文が多い。220は口縁部に穿孔を施している。225～234は口唇部に連続的な刻みを施す。235・236は，口縁部下位に刻み目で突帯を貼り付けている。237～243は，かなり細い棒状の工具を用いて施文している。238・243は，口唇部横に細い×印を連続的に施している。244は，短くてやや太い沈線文を連続的に施している。245～253は横方向に沈線文を施している。254は沈線内に細かいスジ状の線が残る。

255～259は胴部であり，257～259は沈線内に細かいスジ状の線が残る。

エ　Ⅵ類（第43図260～第44図285）

圧痕を有する底部を一括した。該期の土器に特徴的な網代底が主流を成す。

260～269は底部に張り出しを持たないものであり，270～285は底部にやや張り出しを持つものである。

網代底で，平編みのものが大半を占める。

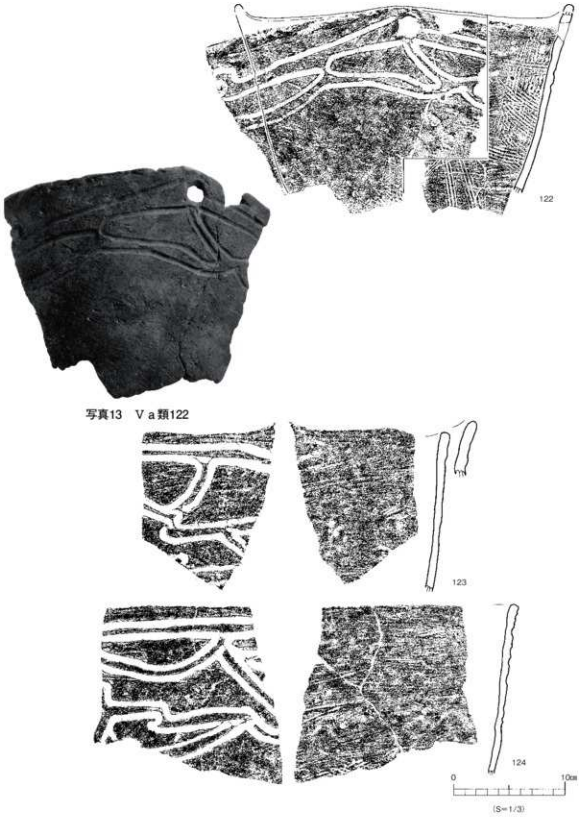
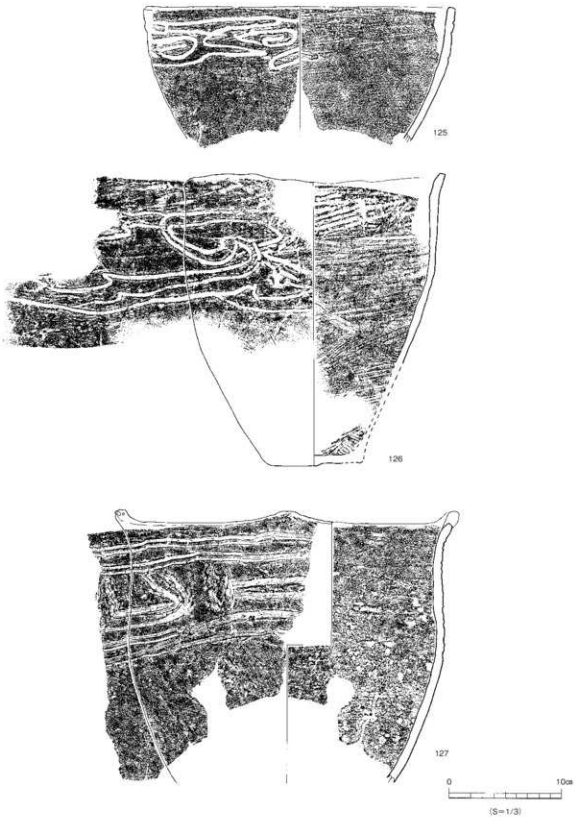
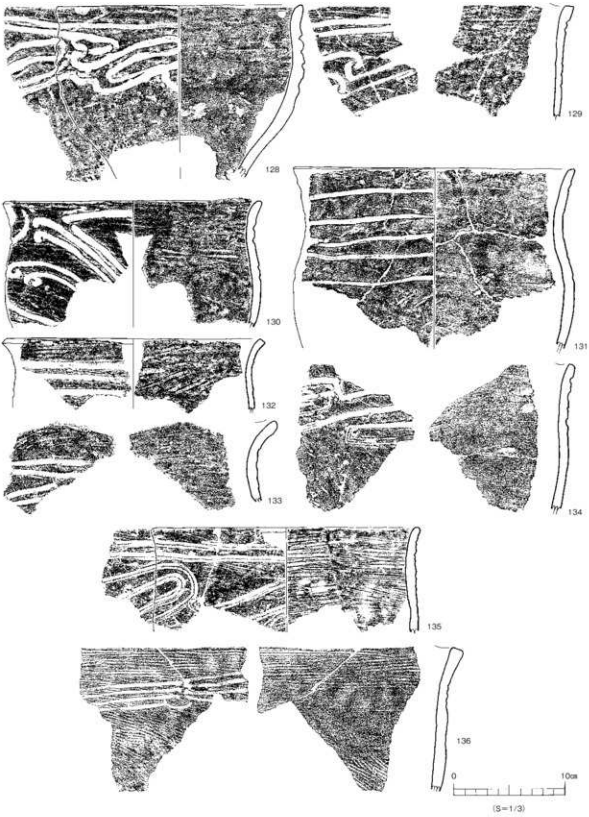


写真13　Ⅴa類122

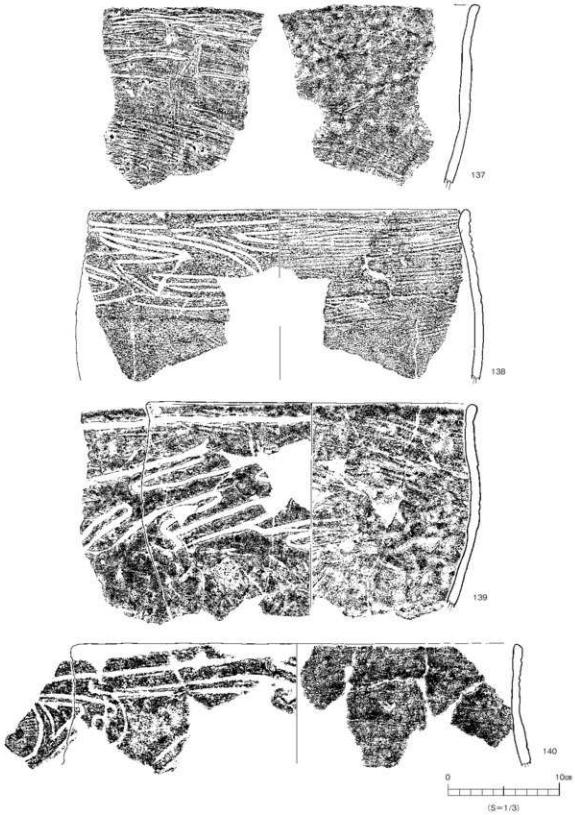
第31図　縄文時代出土土器実測図（9）Ⅴa類



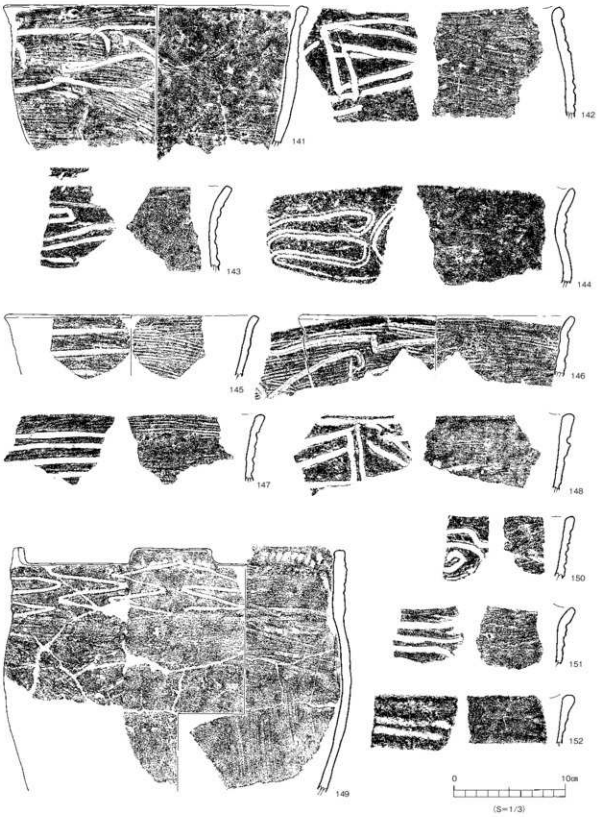
第32図　縄文時代出土土器実測図（10）Ⅴａ類



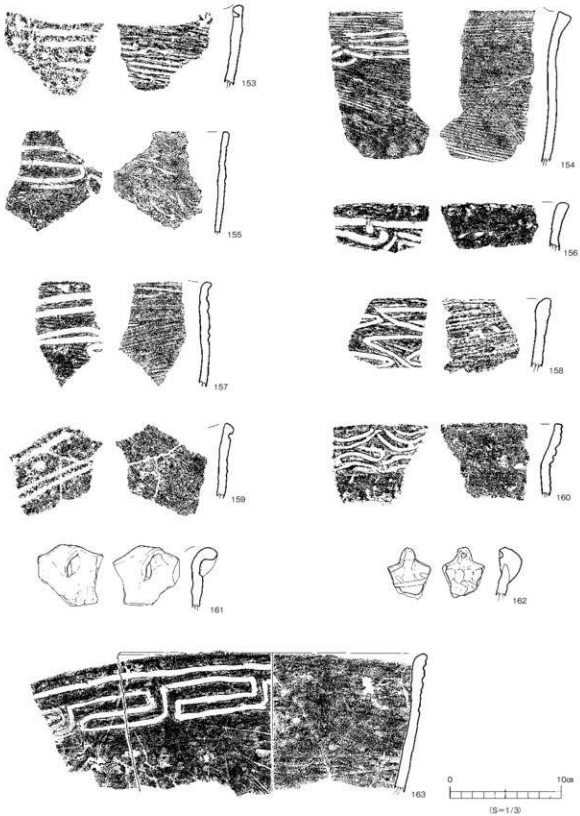
第33図　縄文時代出土土器実測図（11）Ⅴａ類



第34図　縄文時代出土土器実測図（12）Ⅴa類

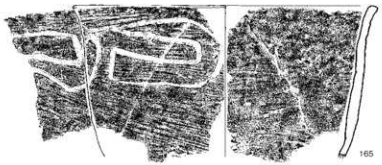


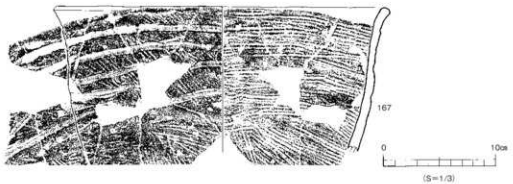
第35図　縄文時代出土土器実測図（13）Ⅴａ類



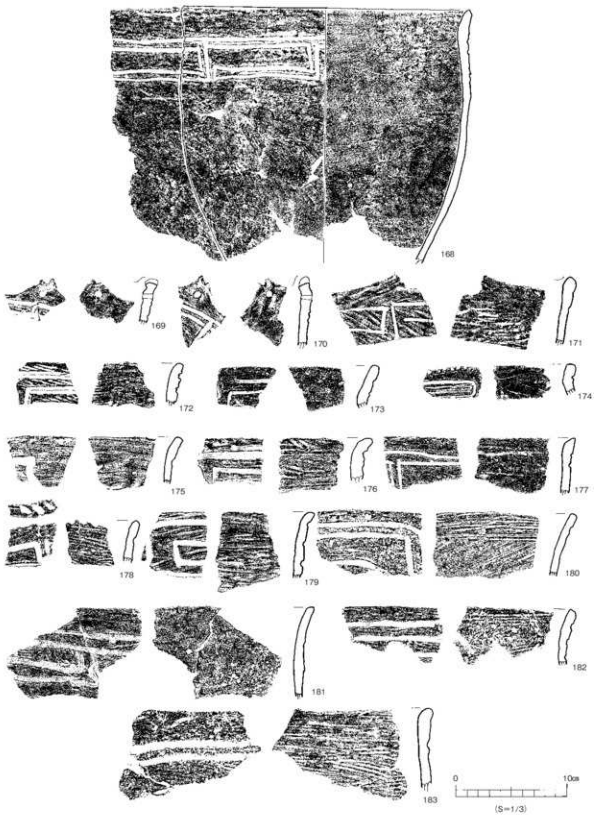
第36図　縄文時代出土土器実測図（14）Ⅴａ類

写真14　Ⅳa類164

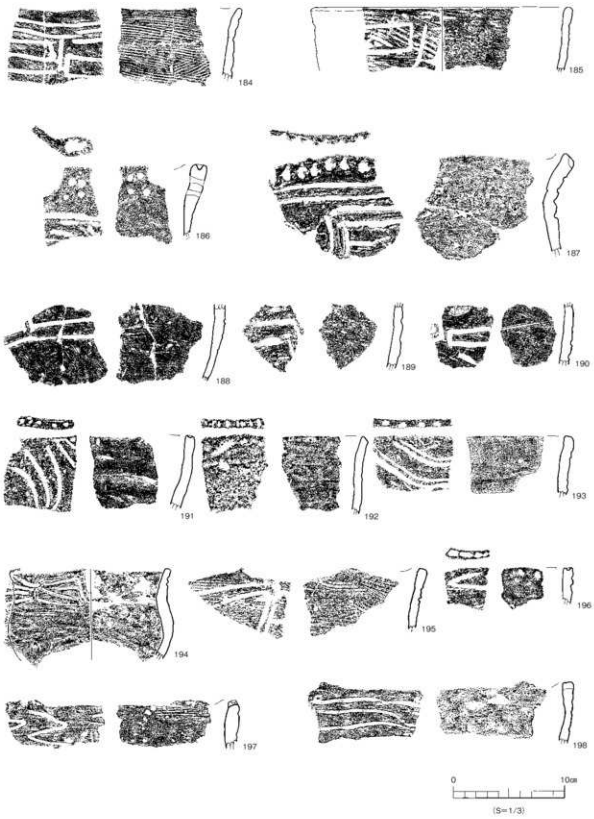




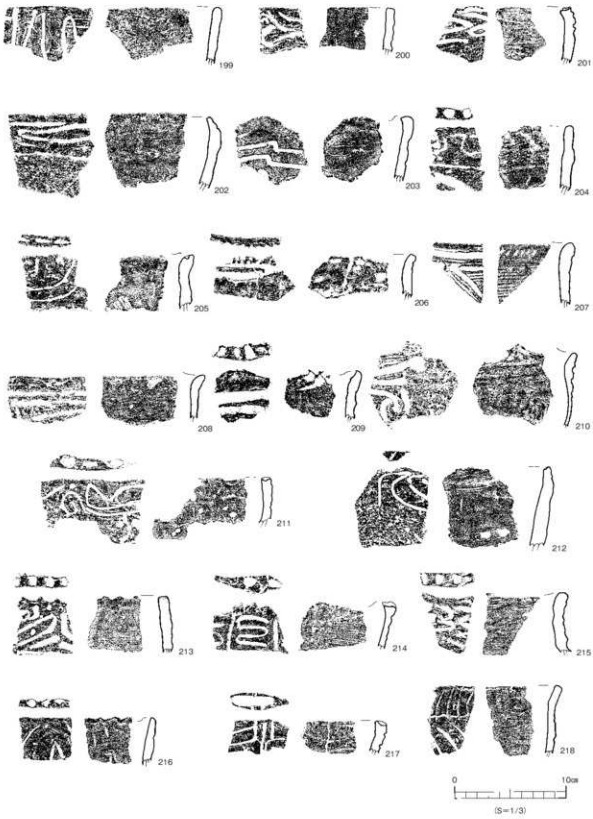
第37図　縄文時代出土土器実測図（15）Ⅴa類



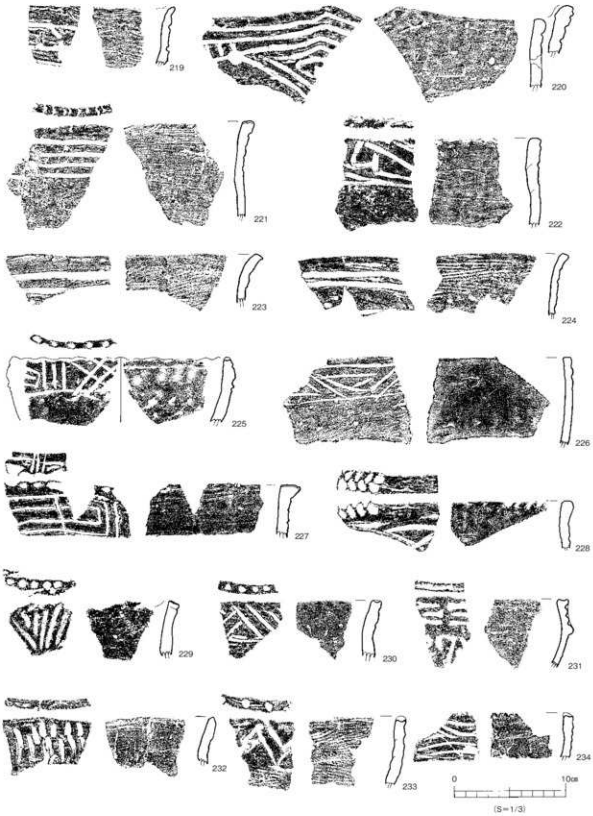
第38図　縄文時代出土土器実測図（16）Ⅴａ類



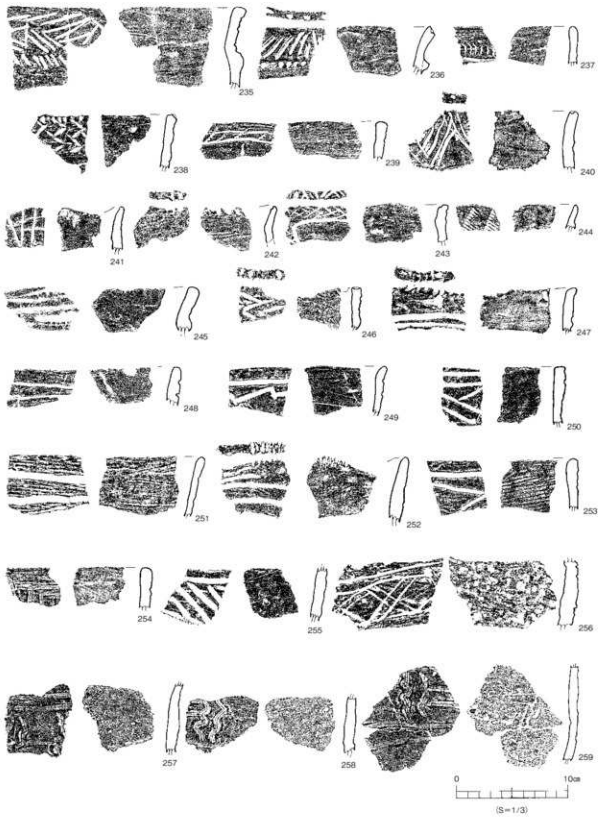
第39図　縄文時代出土土器実測図（17）Vab類



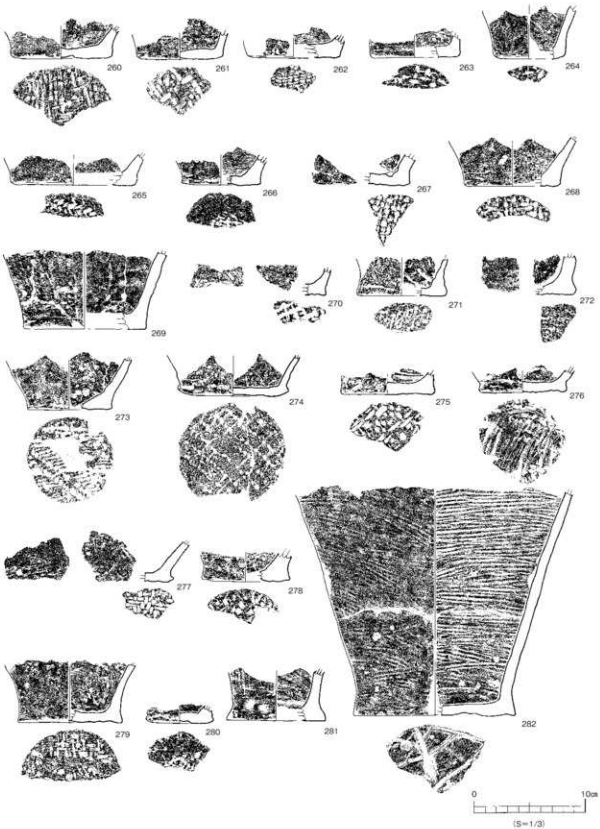
第40図　縄文時代出土土器実測図（18）Ⅴb類



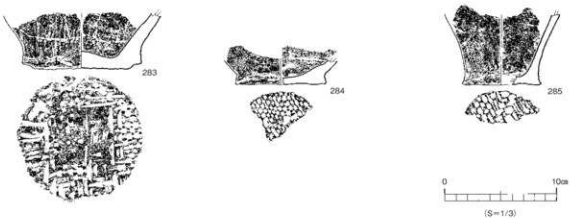
第41図　縄文時代出土土器実測図（19）Ⅴb類



第42図　縄文時代出土土器実測図（20）Ⅴb類



第43図　縄文時代出土土器実測図（21）Ⅵ類



第44図　縄文時代出土土器実測図（22）Ⅵ類

写真15　Ⅵ類（底面の様子）

オ　Ⅶ類（第45図286～第46図318）

貝殻腹縁による刺突文（擬似縄文）と沈線文を組み合わせたもので，33点を図化した。

286は波状口縁の波頂部にあたり，文様は，貝殻腹縁による刺突文を施した後，沈線文を施している。さらに波頂部直下に鉤手状の繋ぎ文を施す。裏から指頭により表面を押し上げることで，頂部に立体感を出している。287・288も同様に波状口縁の波頂部で，穿孔の周囲に貝殻腹縁による刺突文を施している。289・290は，貝殻腹縁による刺突文を施した後に，２本の沈線文を施している。291は，摩耗が激しく沈線文の下部にかすかに刺突痕が残る。299～318は胴部であり，いずれも貝殻腹縁による刺突文を施した後に，沈線文を施している。315～317は刺突文の施した後，細い沈線文を横位に施している。286～317までは２枚貝を利用した刺突文であるが，318は，巻き貝であるヘナタリを回転させて施文している。

カ　Ⅷ類（第47図319～第48図356）

器面に磨消縄文が施されるものを一括して，48点を図化した。２本の平行する沈線文間に，縄文を施文するものがほとんどである。

319は波状口縁で，波頂部に３本の鋭く深い刻みを施している。321は口唇部を肥厚させ，その部分に文様を施している。口唇部表面に縄文を施した後，先端が丸い棒状の工具で深い沈線を施している。322は，口縁部から胴部にかけて縄文を施した後，２本の平行沈線文を幾何学的な文様で描き，表面を磨いて器面調整を行っている。325・328は肥厚させた口唇部に文様を施している。335～449は，胴部である。336は沈線文下位に縄文を施した後，表裏共にミガキによる器面調整を行っている。351は，縄文を施した後に沈線によって施文しているが，その後にまた縄文による施文を行っている部分が認められる。356は，縄文が残る底部である。

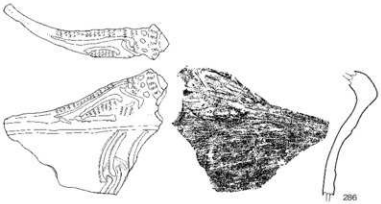
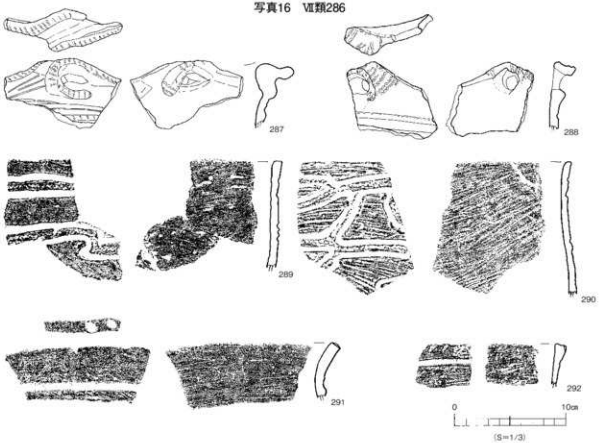
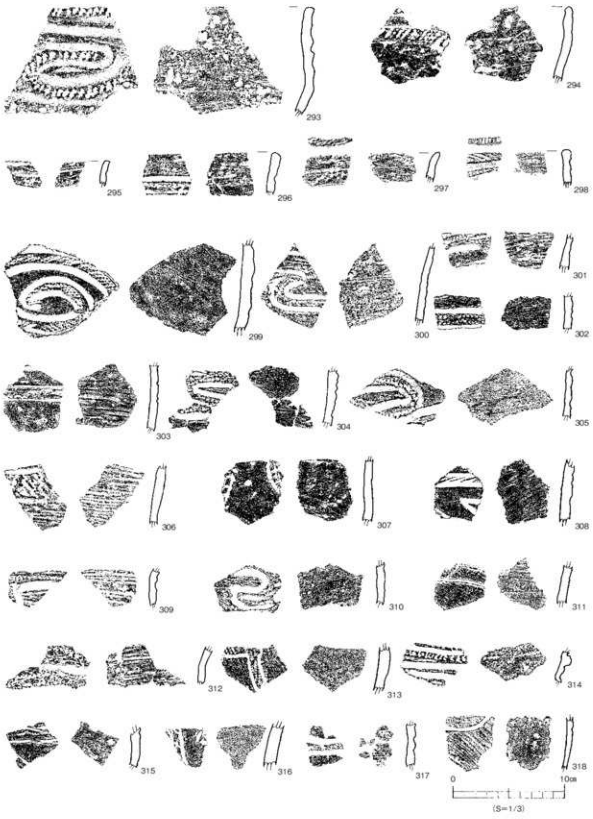


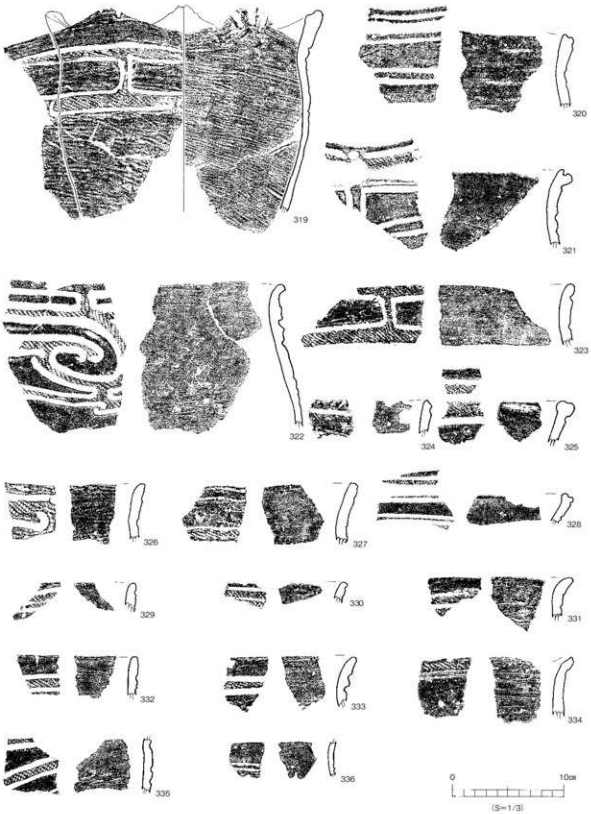
写真16　Ⅶ類286



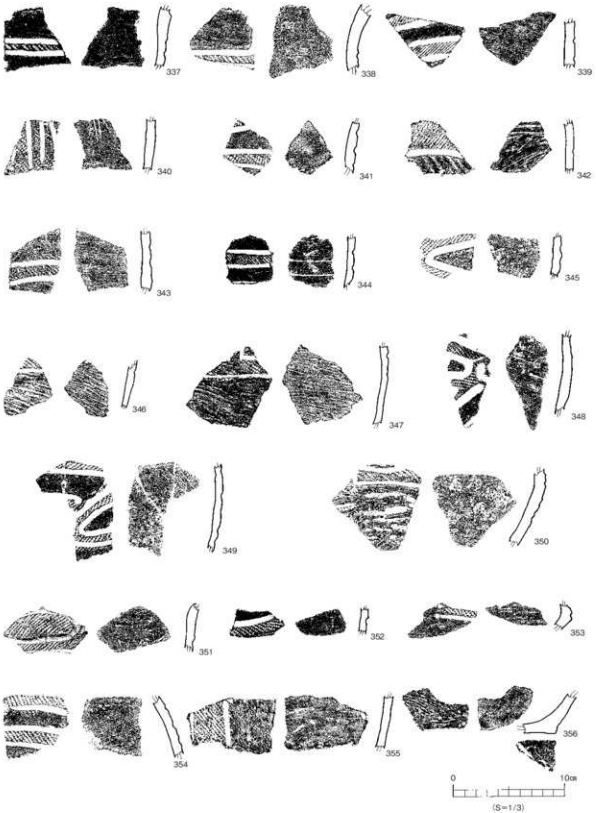
第45図　縄文時代出土土器実測図（23）Ⅶ類



第46図　縄文時代出土土器実測図（24）Ⅷ類



第47図　縄文時代出土土器実測図（25）Ⅷ類



第48図　縄文時代出土土器実測図（26）Ⅷ類

キ　Ⅸ類

口縁部が断面三角形タイプのものを一括した。口縁部自体を肥厚させるもの，粘土紐で肥厚帯を形成するものに大別できる。

Ⅸａ類（第49図357～第53図391）

口縁部自体を肥厚させ，断面が三角形を呈する。口縁部は直行もしくは外反している。文様は，箆状施文具による連続的な刺突文を施しているものが多い。

357・358は波状口縁で，357は復元口径の最大は口唇部にあり，30㎝を測る。359は口唇部に連続的な深い刺突文を施す。360は波状口縁で，口縁上部に横位の沈線を施している。361・362は，口縁部下をナデ調整により肥厚を強調させている。365は，連続的に斜位の沈線文を施す。口縁部下位を指頭圧痕後にナデ調整することで，口縁部の肥厚を強調させている。381～387は，波状口縁であり，口縁のラインに沿って連続的に刺突文を施している。381は，口縁部が大きく外向し，胴部から底部にかけてやや内湾している。復元口径の最大は口唇部にあり，37㎝を測る大型の深鉢である。382は，口縁部を浅い２本の平行沈線で施文し，その間に細い棒状の工具によって連続刺突文を施している。385は，口縁部の隆起させた部分に連続した竹管文を施している。389は，ナデによる器面調整を行った後，口縁部を貝殻条痕によって横位に施文している。

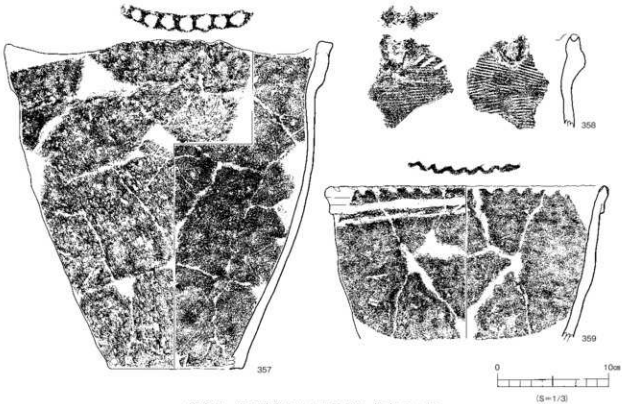
Ⅸｂ類（第53図392～第55図418）

口縁部に粘土紐を貼り付けることにより肥厚させるもので，断面が三角形を呈す。口縁部は直行もしくは外反しているものが多い。文様を施すものは少なく，ほとんどが無文である。

392～401は，口縁部の長さが比較的短いものである。392は波状口縁で，口縁部上位に粘土紐を貼り付け，さらにその下位にも同様の突帯を持つ。器面調整は粗いナデ仕上げである。

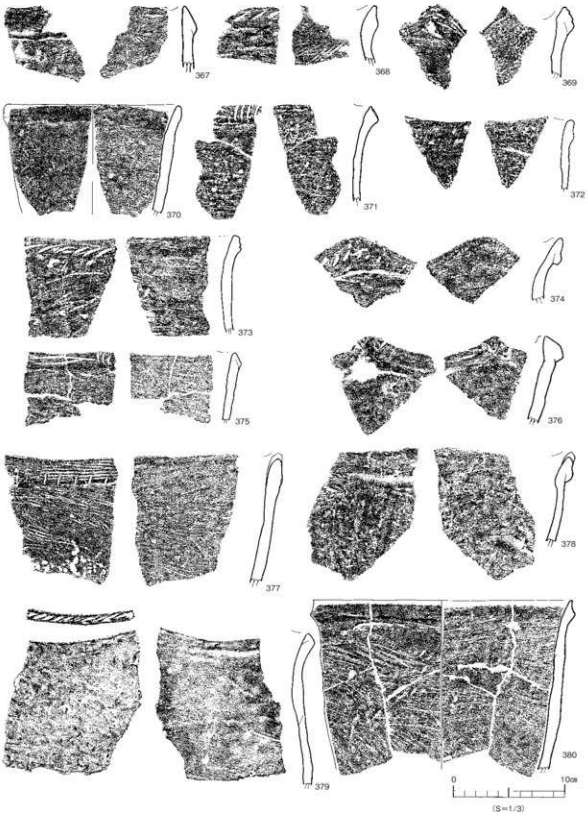
402～418は，口縁部の長さが比較的長いものである。402・403は，口縁部に粘土紐による肥厚帯を持ち，ナデ調整によってさらに強調させている。いずれも文様は施されていない。404は口唇部と粘土紐による肥厚帯の間に，細い棒状の工具の先端を使った刺突文を連点状に施している。407は山型口縁で，肥厚する三角形の口縁部に太形の２本の沈線文と，その上下に刻み目文を施す。408～412は，摩耗が激しく僅かに横位の沈線文が残る。413は指頭圧痕後にナデ調整を行うことで，粘土紐による肥厚帯をさらに強調させている。414は，口縁部の突帯に浅い刻み目を連続的に施している。417は，口唇部に連続刺突文を施す。口唇部の径が41.5㎝を測る大型深鉢である。

418は，口縁部の上部は欠損している。肥厚した口縁部に貝殻刺突文を逆くの字形に連続的に施す。

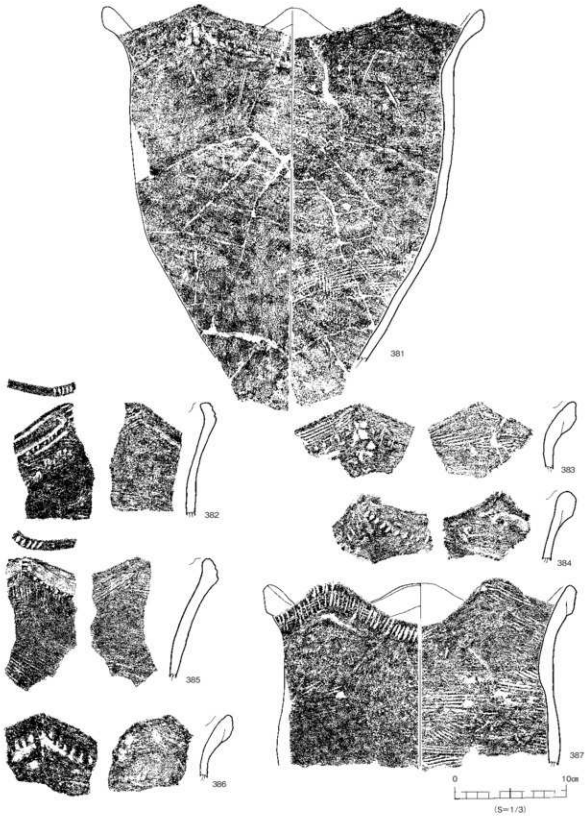


第49図　縄文時代出土土器実測図（27）Ⅸａ類

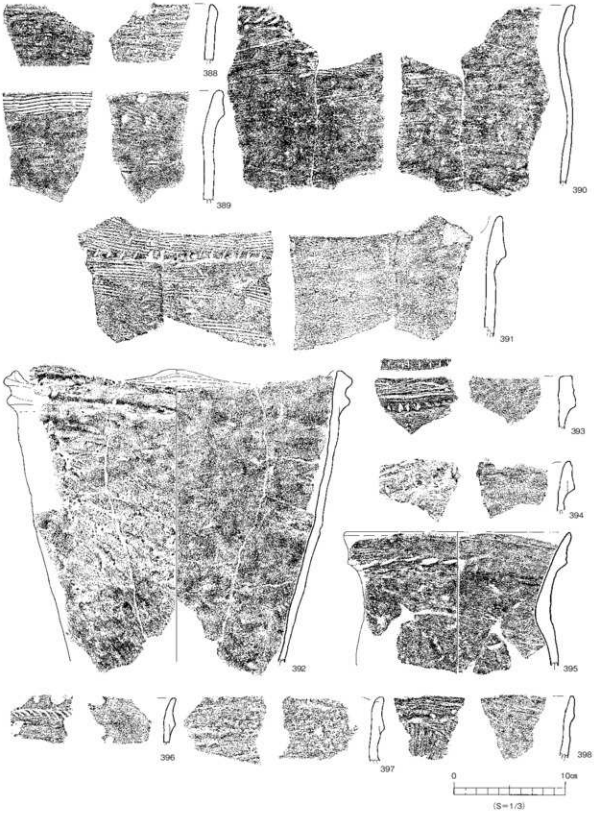
第50図　縄文時代出土土器実測図（28）Ka類



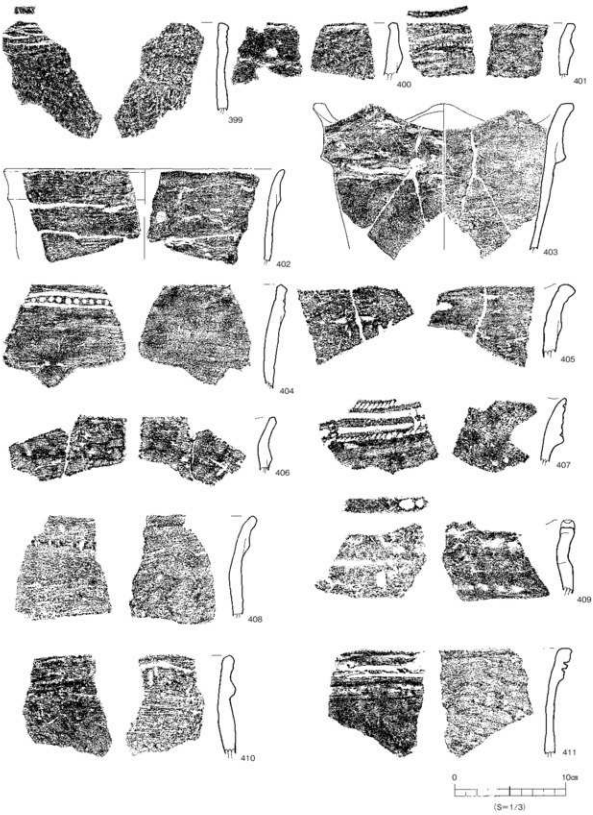
第51図　縄文時代出土土器実測図（29）Ⅸａ類



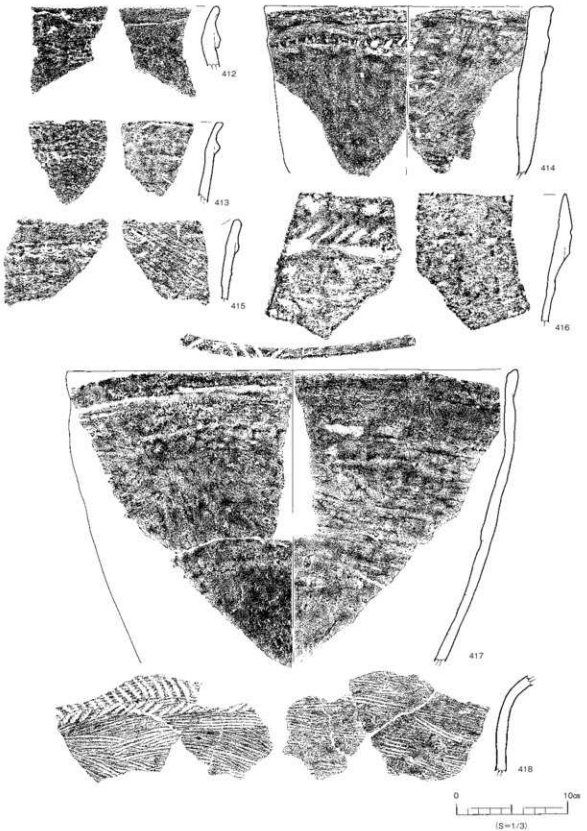
第52図　縄文時代出土土器実測図（30）Ⅸａ類



第53図　縄文時代出土土器実測図（31）Ⅸab類



第54図　縄文時代出土土器実測図（32）Ⅸb類



第55図　縄文時代出土土器実測図（33）Ⅸb類

ク　X類

器面が無文のものを一括した。大型の土器もあるが器形による分類が困難なものが多いため，口唇部に刺突文が施されていないものと，施されているものとに分類した。

X a類（第56図419～第59図462）

口唇部に刺突文が施されていないものを一括した。

419～456は，口縁部が肥厚しないものである。419～427は平口縁で，428～431は波状口縁である。口縁が直行，あるいはやや内湾しているものが多い。420は内面の摩耗が激しく，調整が不明である。421は復元口径の最大が口縁部にあり，30cmを測る大型の深鉢である。426は，内面を貝殻条痕による丁寧なナデ調整により仕上げている。428～431は波状口縁である。431は表面をミガキによる器面調整で丁寧に仕上げている。432～447は平口縁で，口縁部が外反している。432は，補修孔が施されている。442は波状口縁で，脚台状の底部を有する小型の鉢形土器である。文様はなく，胴部に対して長い脚を持つのが特徴である。443～446は，内面を貝殻条痕によるナデ調整を施している。448～450は波状口縁で，口縁部は外反している。449は口唇部に文様はないが，粘土塊を付着させている。451～455は，口縁部が内湾しており，貝殻条痕によるナデ調整を両面に施している。456は器壁が薄く，口唇部が肥厚している。胴部はあまり膨らまず，口縁部はやや内湾している。

457～462は，口縁部が肥厚しているものである。457は粘土紐で肥厚帯を形成している。458～462は口縁部自体を肥厚させている。460・461は口唇部を肥厚させているが，文様は施されていない。

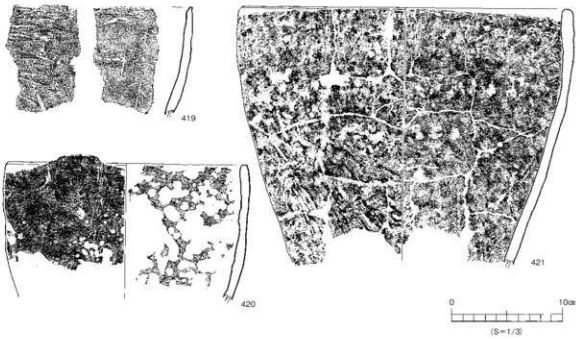
X b類（第60図463～476）

口唇部にのみ文様が施されているものを一括した。

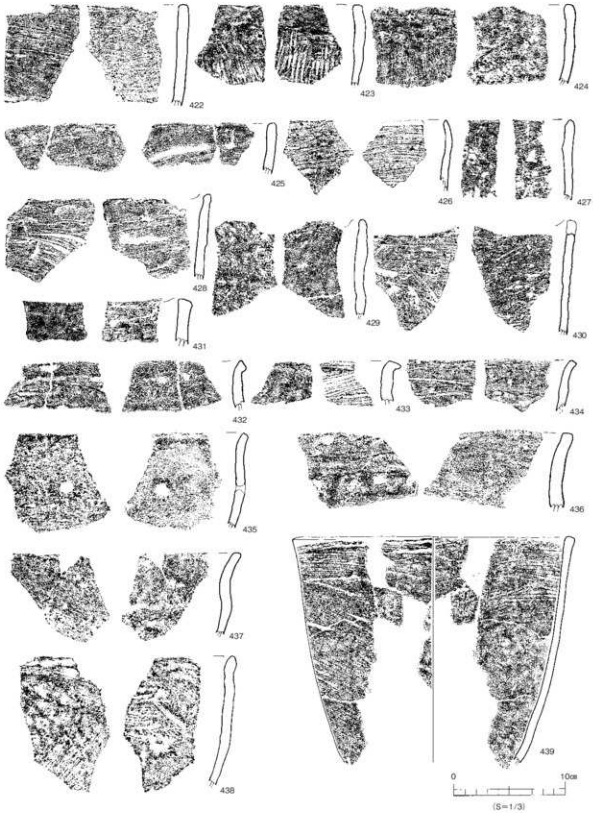
463は浅い刻みを施しているが，施文具は不明である。464～466は，棒状の工具を使って浅い刺突文を施している。467は爪型刺突文を施している。468～471は指圧によって器面調整を施した後，ナデ調整によって丁寧に仕上げている。472～476は，竹管を使って刺突文を施している。476の外面は指頭圧痕による器面調整を行い，粗い調整のままで仕上げている。

X c類（第60図477～479）

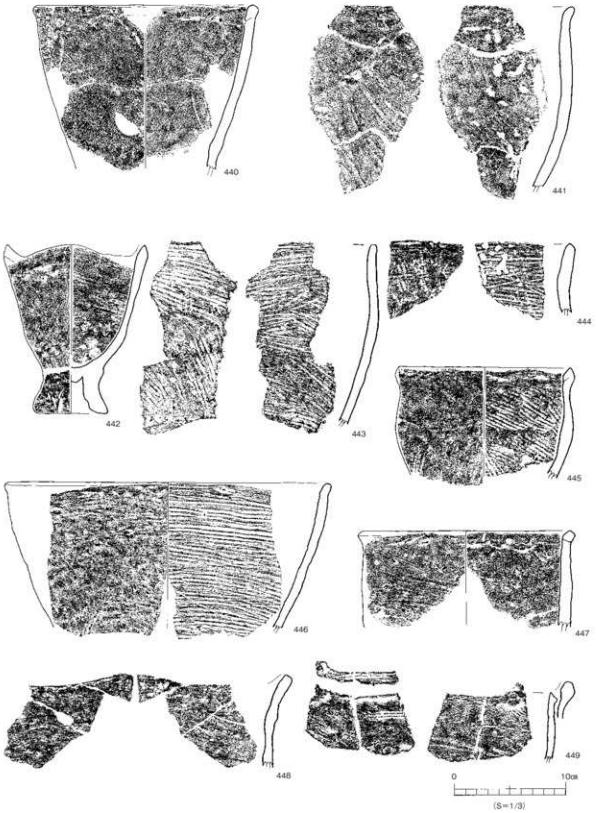
無文土器の胴部片である。477・478は，焼成後の穿孔が見られることから，補修孔であると考えられる。479は滑石粉を多く含むため，表面が滑らかである。



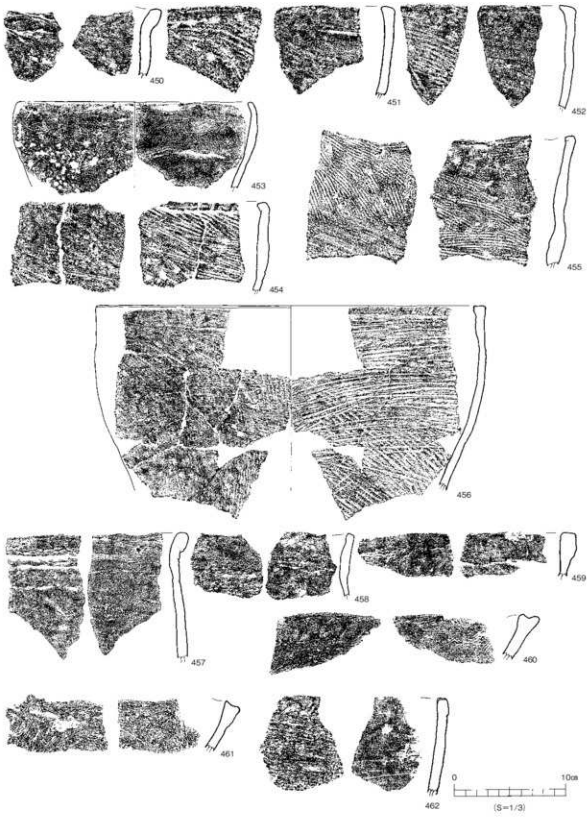
第56図　縄文時代出土土器実測図（34）X a類



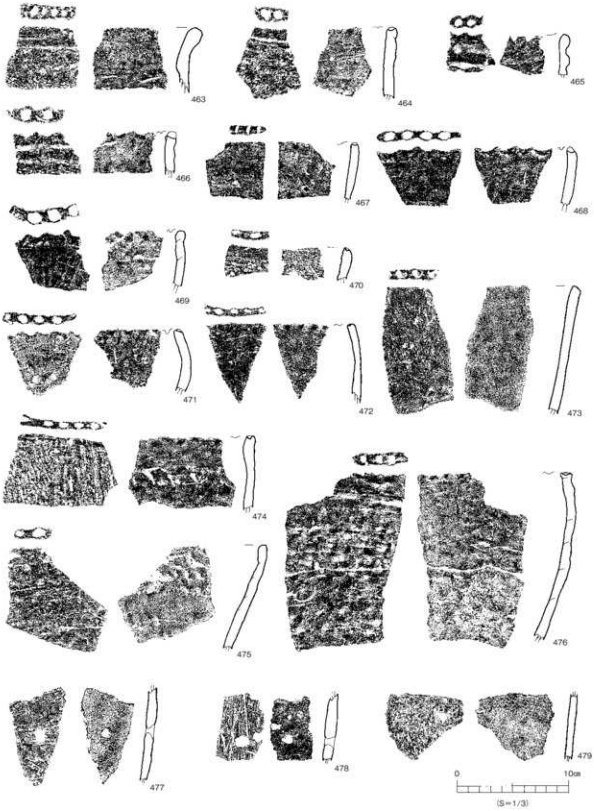
第57図　縄文時代出土土器実測図（35）Ｘａ類



第58図　縄文時代出土土器実測図（36）Ｘａ類



第59図　縄文時代出土土器実測図（37）Ｘａ類



第60図　縄文時代出土土器実測図（38）Xbc類

ケ　Ⅺ類

時期が不明である土器を一括した。把手，台付皿と思われるものと型式不明の底部に分類できる。

Ⅺａ類（第61図480～485）

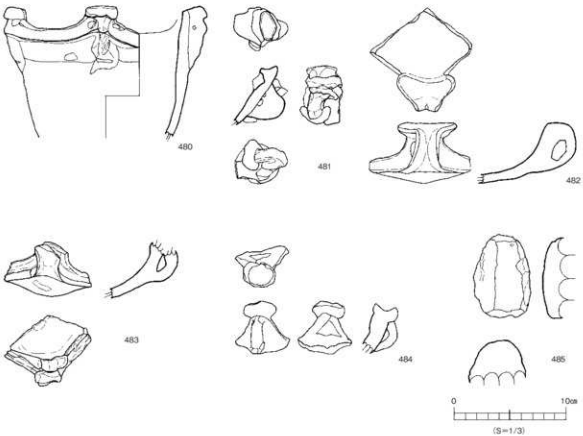
480・481は，型式不明の把手部である。480は波状口縁で橋状把手を備えており，2か所の穿孔と，切り抜きにより人面様を呈している。481は，口唇部に紐状の突帯を十字に貼り付けている。482～485は，台付皿形土器の装飾を施した側縁の一部と考えられる。

Ⅺｂ類（第62図486～第64図548）

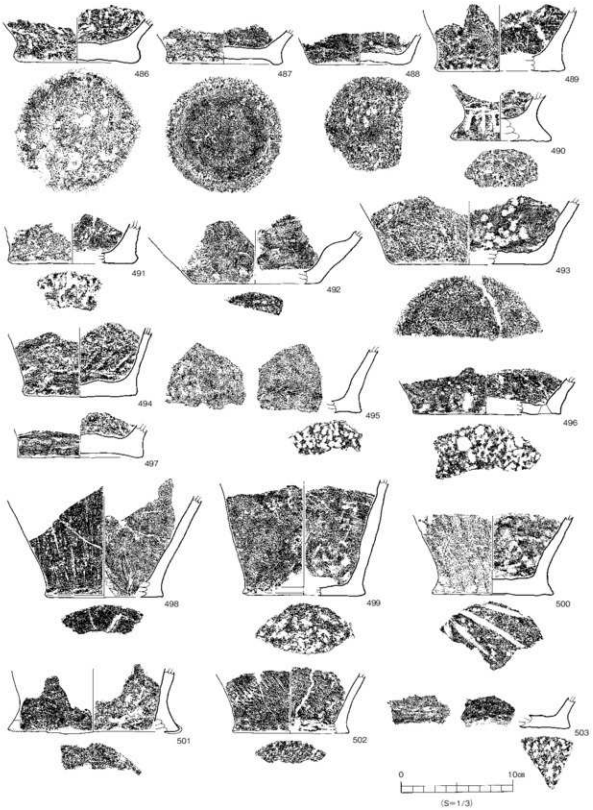
特に類別できない底部を一括して取り上げた。

486～531は平底を呈しており，外底部がやや内湾し，内底部は滑らかに立ち上がっている。

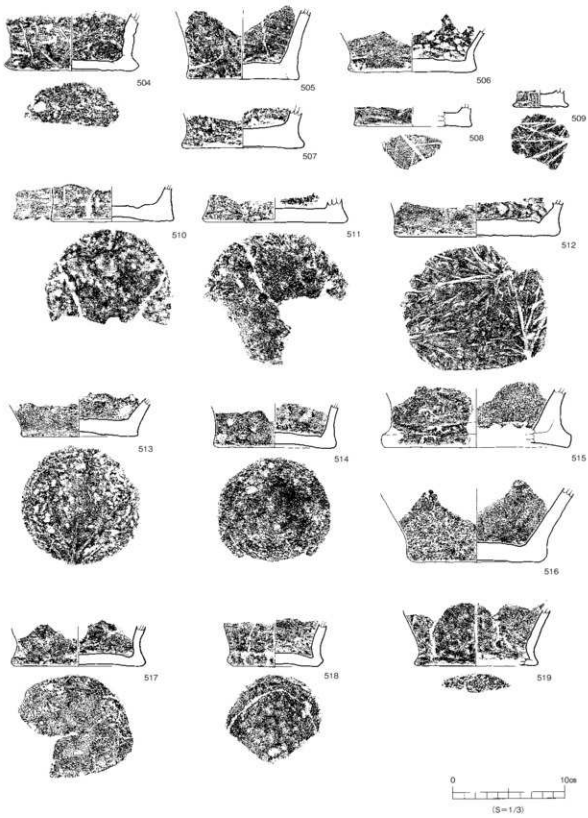
532～548は上げ底である。532は，脚部の底面が渦巻き状を呈している。脚部の高さは1.5㎝で，一部欠損している。533は，脚部に二本の沈線文を施している。537は，沈線文を縦位に施している。



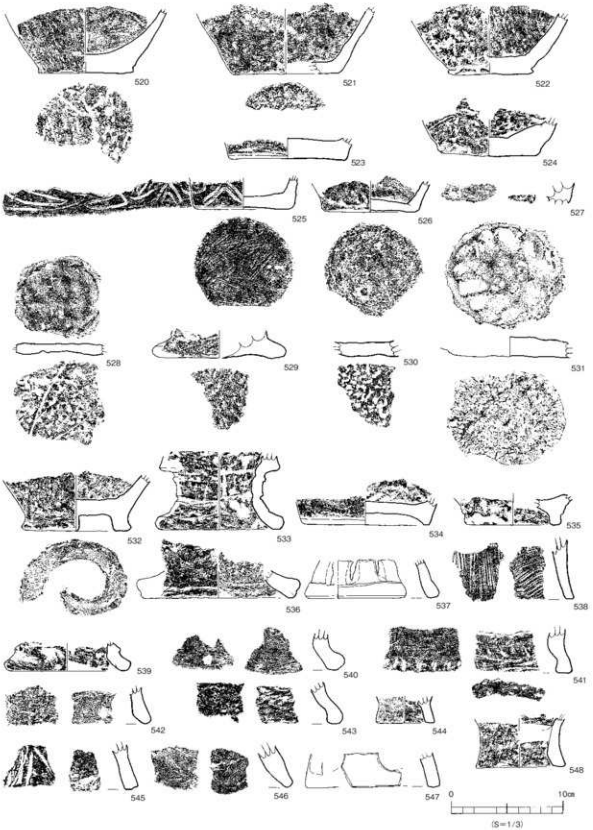
第61図　縄文時代出土土器実測図（39）Ⅺａ類



第62図　縄文時代出土土器実測図（40）Ⅺb類



第63図　縄文時代出土土器実測図（41）Ⅺb類



第64図　縄文時代出土土器実測図（42）Ⅺb類

⑶ 縄文時代晩期出土土器

晩期出土土器は，72点を抽出し，図化した。先述の通り「粗製土器」「精製土器」「半粗半精製土器」の３つに分類し，器形と照合した結果，大まかに粗製土器には深鉢形土器，精製土器と半粗半精製土器には浅鉢形土器と分類された。

ア　粗製土器（Ⅻａ類）

器面内外共に，貝殻条痕やナデなどの調整を施すものを一括して粗製土器として位置づけた。小片が多いため，器形による分類よりも口縁部の施文による分類を優先した。

ａ１類（第65図549～553）

口縁部に沈線を横位に数条施した深鉢形土器である。５点を図化した。

549は胴部が屈曲するところまで沈線が施されている。口縁部の端が直立し，外側にやや広がっている。胴部の形態は不明である。550～553は，口縁部のみである。553は，やや太めの沈線が施され，施文内に細かい筋が入る。

ａ２類（第65図554～556）

深鉢形土器で，口縁部に文様を施していないものである。３点を図化した。

554は口縁部がやや長く直立しいる。胴部は緩やかに内向しており，口縁部と胴部の最大径がほぼ同じである。復元口径の最大は口唇部にあり，41㎝を測る大型の深鉢である。555と556は，口縁部が長く，外側に広がっている。胴部の張り出しは，やや緩く内湾している。共に復元口径の最大は口唇部にあり，それぞれ25㎝と23㎝である。

ａ３類（第66図557～568）

深鉢形土器の施文がない口縁部片のみのを一括し，12点を図化した。

557～559は，口縁部が直立し，やや肥厚している。560は口縁部がやや内向している。585は口縁部が外向している。576～577は，口縁部が内向し，口縁部下をナデ調整を施すことで肥厚させている。

ａ４類（第66図569～第68図587）

深鉢形土器の特徴を持つものの，細分が不可能である胴部や底部を一括して取り扱った。

569～578は，胴部片のみを一括し，９点を図化した。569は，胴部の張り出す角度が強く，口縁部は直立している。570～574は，胴部の張り出す角度が569と比較してやや弱くなっている。575・576は，さらに胴部の張り出す角度が弱く，やや丸みを帯びている。577は頸部から胴部上部にかけて内湾している。胴部の張り出す角度は不明である。578は，胴部の一部であるが，形状は不明である。

579～587は，底部のみを一括し，９点を図化した。

全て平底であるが，底部の端が張り出しを持たないものや，張り出しを持つものがある。579～581は平底で，底部の端に張り出しを持たない。582～585は平底で，底部の端にやや張り出しを持つ。586は底部から胴部まで直線的に立ち上がり，平底で底部の端にやや張り出しを持つものである。587は，平底で底部の端が大きく張り出している。

イ　精製土器（Ⅻｂ類）

器面内外面共に，ミガキ調整を施すものを一括して精製土器として位置づけた。器形が不明な口縁部は口縁部の長さを基準に，胴部は径の長さを基準に細分することにした。

ｂ１類（第69図588～591）

長い口縁部を持つ浅鉢である。４点を図化した。

588は，口縁部が直立に外向しており，胴部が僅かに屈曲する。また，最大径は口唇部である。590は胴部のみであるが，胴部の僅かな屈曲がほぼ同じであることから，588と同形になると思われる。589，591は口縁部のみであるが，589と同じく長い口縁部を持つことから同類の範疇とした。

ｂ２類（第69図592～606）

口縁部が直行もしくは外向し，長さはｂ１類と比較して短い浅鉢である。19点を図化した。

592・593は，胴部が逆くの字に屈曲している。胴部よりも口唇部の方が径が長い。594～603は，口縁部の長さが592・593とほぼ同じである。また，598～602は口唇部に玉縁を持つ。

ｂ３類（第69図607～第70図610）

口縁部が短く，口唇部より胴部の方が径が大きいものを一括した。

607は，口縁部に沈線を横位に施す。口縁部の器壁が薄く，長さは短い。608・609は玉縁を持つ。609・610は胴部が内湾している。

ｂ４類（第70図611～619）

器高が浅く，胴部に屈曲部を持たず椀状に口縁部に立ち上がる浅鉢である。９点を図化した。

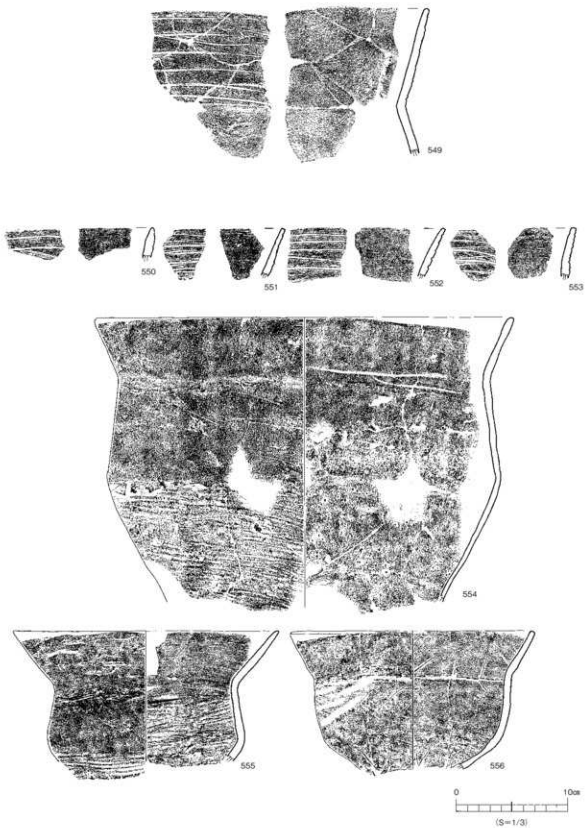
611は丸底状を呈し，口縁部の器壁が薄い。615は口縁部にやや太めの沈線を施す。616は玉縁を持ち，口縁部に横位の沈線を施す。618は，口唇部が外向している。

ウ　半粗半精製土器

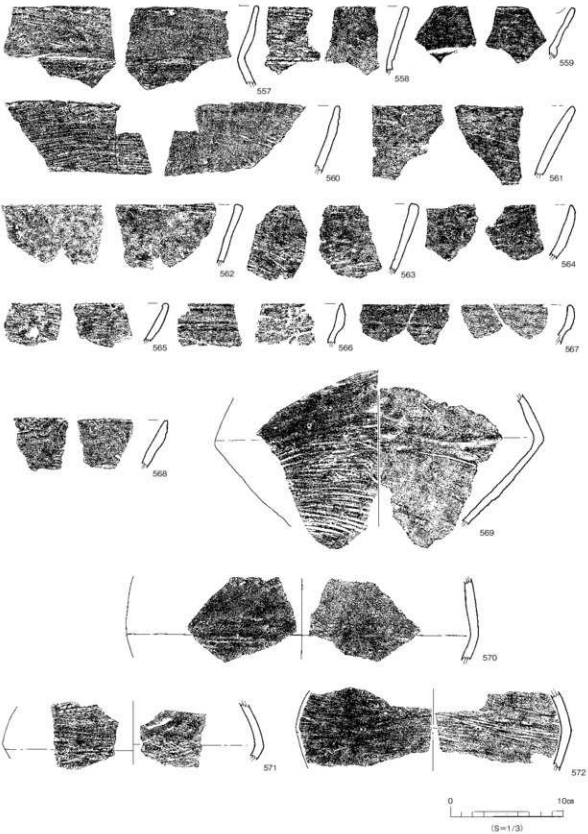
Ⅻｃ類（第70図620）

器内面にミガキを施し，外面は条痕やナデなどが施されているものを半粗半精製土器として位置づけた。

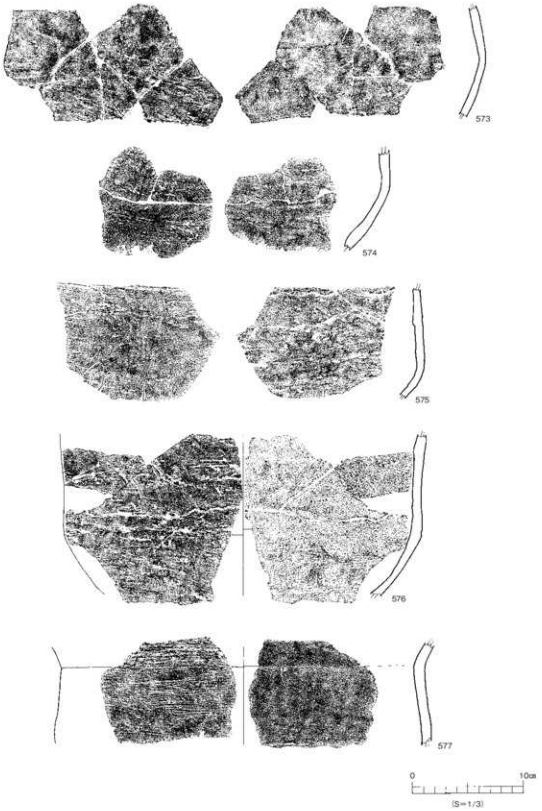
620の一点のみが確認された。胴部が屈曲を持たず，椀状に口縁部が立ち上がる浅鉢形である。



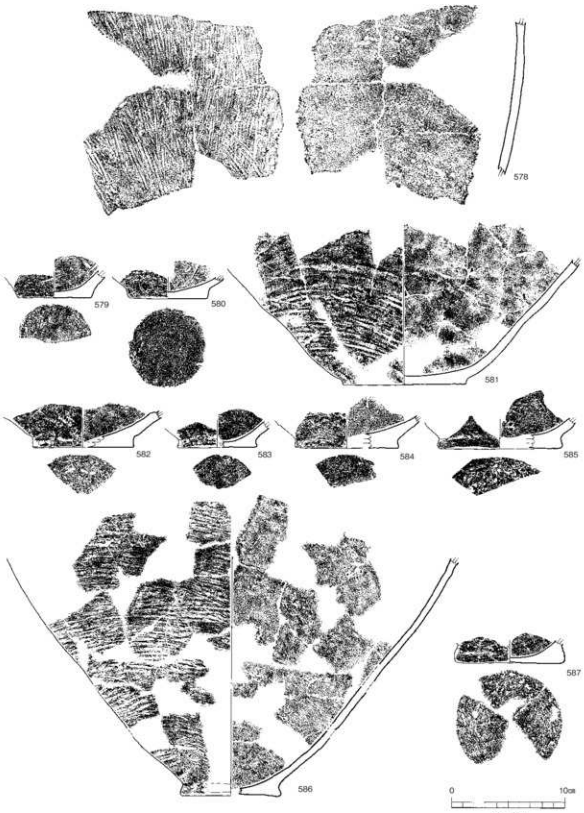
第65図　縄文時代出土土器実測図（43）Ⅻａ類



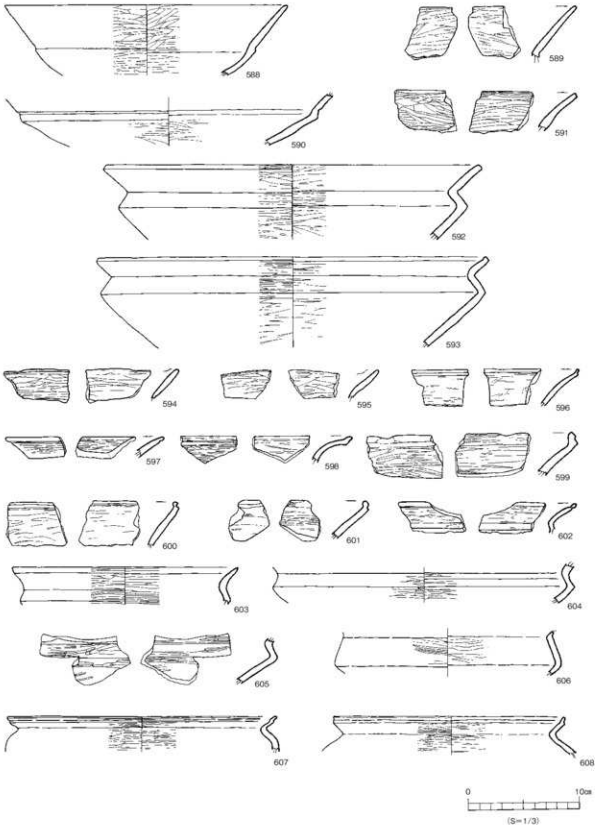
第66図　縄文時代出土土器実測図（44）XIIa類



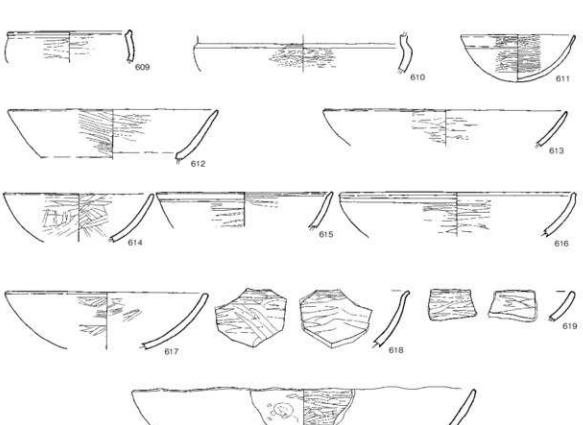
第67図　縄文時代出土土器実測図（45）Ⅻａ類



第68図　縄文時代出土土器実測図（46）Ⅻａ類



第69図　縄文時代出土土器実測図（47）Ⅻｂ類



第70図　縄文時代出土土器実測図（48）Ⅻｂ・ｃ類

2　土製品

全国的にも類例を見ない足形土製品と時期及び用途が不明の土製品を一括した。

⑴ 足形土製品（第71図621）

621は，足形を模型とした土製品である。本遺跡からは製品の足首にあたる部分がＸ－５区から出土した。その下の足部は隣接する芝原遺跡のＷ－36区から出土した。

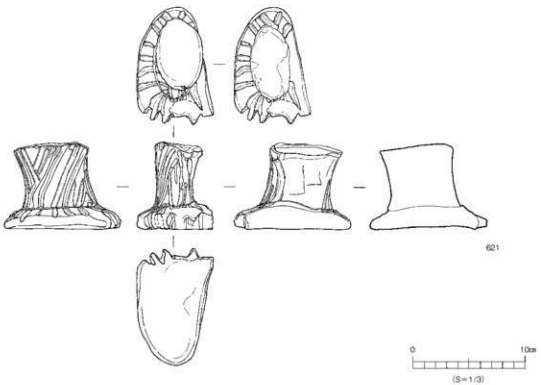
接合時の高さは7.5cmを測る。足首部の高さは5.6cm，上部の長径は6.2cm，短径3.9cmを測る。下部の接合面は長径6.5cm短径3.3cmを測る。一方の側縁部には凹線を斜位に施しているが，他方の側縁部には凹線は施していない。側縁部に施文された凹線は，接合する足部と繋がっている。足部は，最大長径10.5cmで，指先の部分の幅が6.4cm，厚さは2.1cmを測る。深い刻みを施すことによって，指先部を表現している。刻みは４ヵ所あり，これによって５本の指を表現している。右足と仮定した場合，親指にあたる部位は欠損している。また人差し指と中指の間は1.6cmも間隔があり，意図的に拡げていることが分かる。

⑵ 円盤形土製品（第72図622～644）

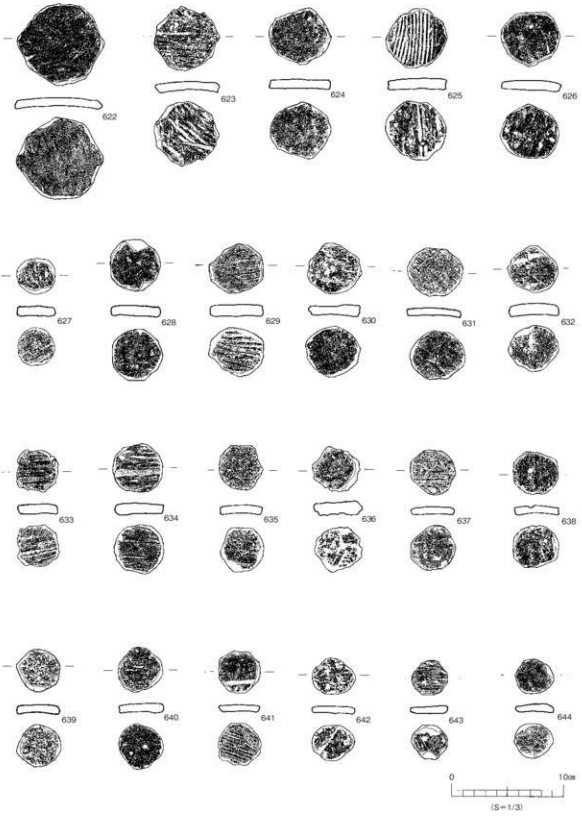
型式不明の底部を二次利用した円盤形土製品を一括した。メンコと称することにする。いずれも用途については不明で，今後検討する必要がある。

622は，径が８cmの大きめのメンコである。625は貝殻条痕による調整が明瞭に残っている。633～644は，径が３cmの小さめのメンコである。

写真17　足形土製品



第71図　縄文時代出土土製品実測図（1）



第72図　縄文時代出土土製品実測図（2）

3　石器

X～XII層から出土した石器は，総数381点であり，その内，器種が明瞭であるものを49点抽出し掲載した。出土した石器類については，剥片石器と礫石器の2つに分類した。出土状況は，第72図の通りである。

器種の概要に関しては，第3章を参照されたい。

(1) 剥片石器

ア　石鏃（第74図645～650）

石鏃は，製品として認められるもの6点を抽出した。形状により，二等辺三角形，正三角形，五角形の3つに分類できる。

645～648は，二等辺三角形状を呈したものである。

645は両側縁を鋸歯状に仕上げており，基部の抉りを比較的浅い凹みで整形している。素材は，横長剥片と考えられる。石材は安山岩である。646は，645よりも基部の抉りを比較的深い凹みで仕上げ，両側縁を浅い鋸歯状に整形している。石材は，安山岩（サヌカイト）を使用している。647は，比較的大型のもので，両側縁の中央部がやや狭くなるように両面を押圧剥離で整形している。基部の抉りは，比較的浅い凹みである。石材は，針尾系の黒曜石と推定される。648は，全体形状を二等辺三角形状に整形している。長さは，比較的長い。基部の抉りを僅かな凹みで仕上げている。石材は頁岩を使用し，両面の整形加工は粗い。先端部を欠損する。649は，正三角形状で幅が広く，比較的大型の形状を呈しており，丁寧な二次加工を施し整形されている。基部の抉りは，僅かな凹みで整形してある。全体が著しく摩耗しているが欠損部分は見られない。石材は安山岩（サヌカイト）である。650は，全体形状が五角形状の縦長で，先端部分は三角形状となる。両側縁は中央部で僅かに抉りを持ち，細くなっている。基部の抉りは，半円状の凹みで整形されている。石材は，玉髄である。

イ　鋸歯尖頭器（第75図651～652）

651・652は形状や大きさから鋸歯尖頭器と考えられ，653～654の鋸歯縁石器を含め，組み合わせ銛の可能性が高い。

651は，安山岩(サヌカイト）を石材とするもので，粗い二次加工により，両側縁を弱い鋸歯状に仕上げている。基部の抉りはやや浅い。整形剥離が比較的粗いことと，かつ大型であることから，石鏃とするよりは鋸歯尖頭器とした。長さ2.6cm，基部幅2.5cmを測る尖頭器である。652は，同様に安山岩（サヌカイト）を石材とし，比較的粗い二次加工により全体を整形している。基部及び両側縁は，直線状に仕上げている。鋸歯縁とはならないが，かなり大型であることから鋸歯尖頭器の範疇に区分した。先端部及び基部は，丁寧に整形している。長さ4.7cm，基部幅3.1cmを測る大型尖頭器である。

ウ　鋸歯縁石器（第75図653～656）

653は，横長剥片を使用し，一方の側縁は鋸歯縁状，もう一方の側縁は弧状に，比較的丁寧な二次加工を施したものである。図の下端を一部欠損する。石材は黒色で質のいい黒曜石であることから，肉眼で腰岳産と判断される。654は，小型の横長剥片を利用して，末端部分を鋸歯状に仕上げたものである。さらに，打面部に僅かに二次加工を施して鋸歯縁石器としたものである。剥片の形状から鋸歯尖頭器の製作剥片を利用した可能性が高い。655は，針尾系の黒曜石を利用したもので，部分的に表皮の残る縦長剥片を利用している。一方の側縁を鋸歯状に，もう一方の側縁を直線状に，簡単な加工を施したものである。図の上端を一部欠損する。656は，安山岩（サヌカイト）の横長剥片を使用している。一方の側縁を鋸歯状に，もう一方の側縁を半円状に，二次加工を施し整形したものである。鋸歯縁石器の全体形状を窺わせる良好な製品である。鋸歯縁部分の長さ3.7cm，幅1.5cmを測る。

エ　石匙（第76図657）

657は，末端部が薄くなる幅広剥片を使用している。剥片の末端に，比較的粗い二次加工を施し刃部としたものである。つまみ部分は，両面からの粗い剥離により，整形されている。

オ　二次加工片（第76図658）

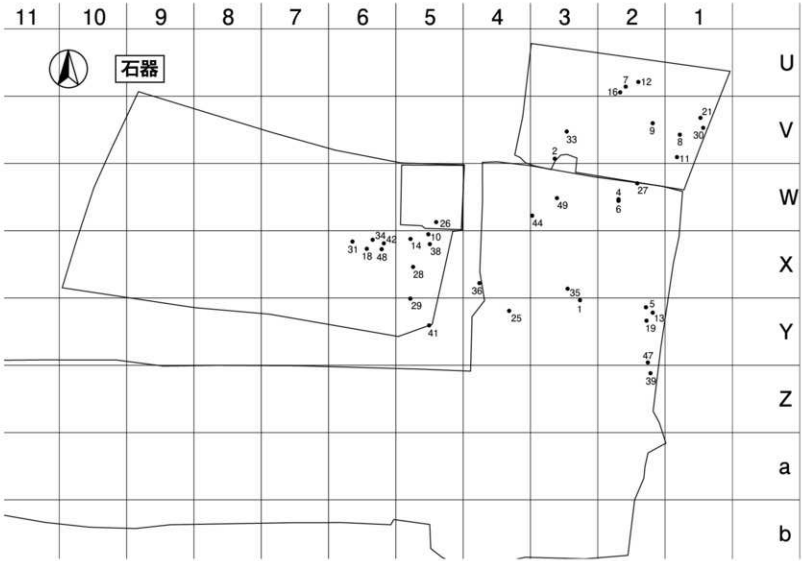
658は，表皮が残る剥片を利用し，部分的に二次加工を施したものである。石材は，腰岳産黒曜石と判断される。

カ　スクレイパー（第76図659）

659は，比較的大きな剥片を素材とし，剥片の縁辺に二次加工を施して刃部としたものである。石材は腰岳産黒曜石と推定される。

キ　楔形石器（第76図660）

660は，上下両端からの剥離が表裏両面に認められるもので，機能部はほぼ直線状となる。また断面はレンズ状を呈する。石材は特徴的な風化が見られる黒曜石であることから，上牛鼻産の黒曜石であると考えられる。



第73図　縄文時代石器出土状況図

ク　石核（第77図661～663）

661は，黒曜石の小角礫をそのまま使用したもので，平坦な自然面を打面にして小型の剥片を剥離しているものである。石鏃などの小型石器用の石核と推定される。石材は，上牛鼻産黒曜石と考えられる。662は，自然面の残る角礫を使用したもので，打面と作業面を交互に入れ替えながら剥片を剥いでいるものである。663は，自然面が残る安山岩（サヌカイト）を使用したもので，中型剥片を分割しているが，ここでは石核として取り扱った。

ケ　研磨のある横刃型石器（第78図664）

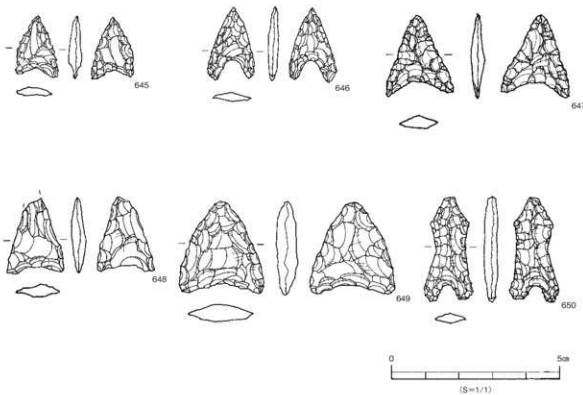
664は，頁岩の横長剥片を素材とし，両側の端片は敲打により整形を施している。表裏両面は研磨により整形し，下縁は丁寧な研磨により刃部としている。通常横刃型石器は打製であるが，これは研磨のある磨製の横刃型石器として位置づけた。刃部7.8cm，長さ5.2cmを測る。

(2) 剥片石器

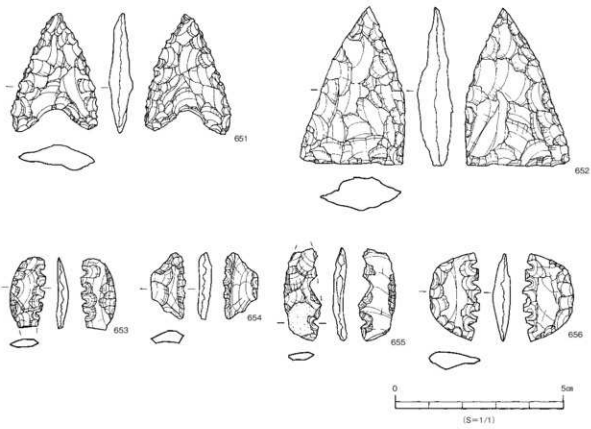
ア　石斧（第78図665～674）

石斧は小型ノミ状のものと，やや小型のもの，大型のものと大きく三種に区分できる。全て，磨製石斧であり，完形品を含む10点を掲載した。

665は，刃部幅2.55cm，長さ4.75cmを測る小型のノミ状ものので，表裏両面はほぼ平坦に研磨を施している。両側面は，比較的粗く研磨を施している。石材は蛇紋岩である。666は，刃部幅1.8cm，長さ6.3cmを測る小型の細長いノミ状のものである。刃部及び両側面は丁寧な研磨が施されている。石材は頁岩を使用している。667は，同様に刃部幅1.8cm，長さ5.2cmを測る小型のノミ状のものである。刃部は片刃に作られている。刃部には研磨痕のみでなく使用痕も明瞭に残っている。両側面と基部は平坦に研磨されている。石材は頁岩である。668は，表裏とも丁寧に研磨を施した小型の磨製石斧である。比較的薄く仕上げている。刃部は円刃であり，刃部幅4.4cmを測る。基部の部分は破損しているため，長さは不明である。669は，刃部のみの破損品である。刃部は片刃に丁寧に仕上げている。刃部には使用痕が顕著に残る。石材はホルンフェルス化した頁岩である。670も刃部のみの破損品である。ただし，刃部先端には，敲打痕が明瞭に残されており，破損後，敲打具として再利用されたものと思われる。石材は，頁岩である。



第74図　縄文時代出土石器実測図（1）



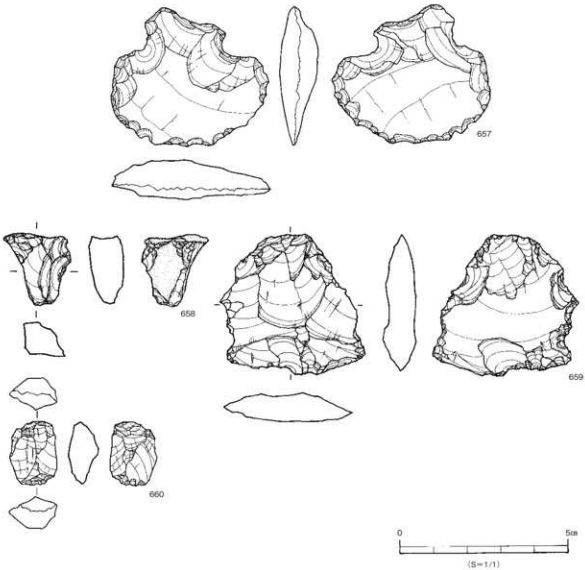
第75図　縄文時代出土石器実測図（2）

写真18　鋸歯縁尖頭器・鋸歯縁石器

671は，全長15.4㎝で，刃部幅は6.9㎝を測る。中心部はほぼ円形に近い形状であり，敲打により整形され，その後研磨が施されたものである。刃部は，蛤刃状を呈する。磨製石斧は研ぎ直しなどにより形状が短くなり，当初の大きさを予測することが困難である。しかし，本製品は全長から当時の大きさを推定できる貴重な資料である。672も，ほぼ671と同型の磨製石斧の基部と考えられる。基部のみの欠損品であるが，全体に敲打痕が明瞭に残る。基部の端部は丁寧な研磨が施されている。673も，大型の磨製石斧片と推定されるが，刃部および基部を欠損するものである。刃部が折れた部分には，粗い剥離が施されており，その部分には細かい使用痕が認められることから，礫器として使用されたと考えられる。674は，やや小型の磨製石斧片であり，刃部を欠損する。表裏両面と両側縁に敲打痕が明瞭に残っている。

イ　磨製石斧片（第78図675～677）

675，676，677は磨製石斧片と考えられるものである。675，676は，僅かに残る整形痕から磨製石斧の一部と推定される。677には，僅かに研磨部分が残っている。



第76図　縄文時代出土石器実測図（3）

ウ　礫器（第79図678）

678は，扁平な円礫を素材とし，周縁に比較的粗い二次加工を施したものである。図の左右両端は，直線状に整形もしくは使用されており，その部分を機能部とした大型の楔形石器の可能性も考えられる。石材は砂岩である。

エ　削器（第79図679）

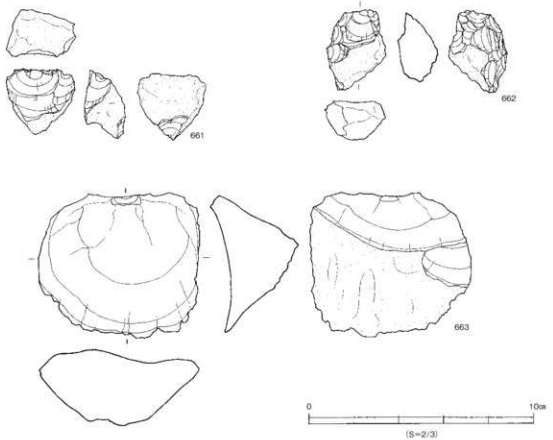
679は，比較的大型の安山岩（サヌカイト）の剥片を使用し，縁辺に比較的丁寧な二次加工を施し，刃部としたものである。

オ　磨石類（第79図680～第80図686）

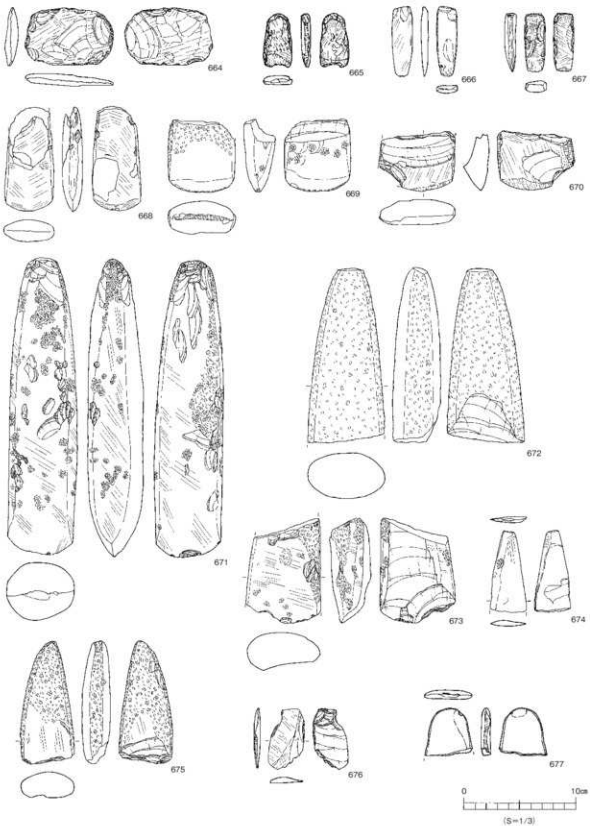
680～686は磨石である。敲打が認められる磨敲石も含めて，7点を掲載した。

680は，やや扁平な円礫を使用したもので，表裏両面に磨面が認められる。また，側面部分にも部分的ではあるが敲打痕が観察される。石材は安山岩である。

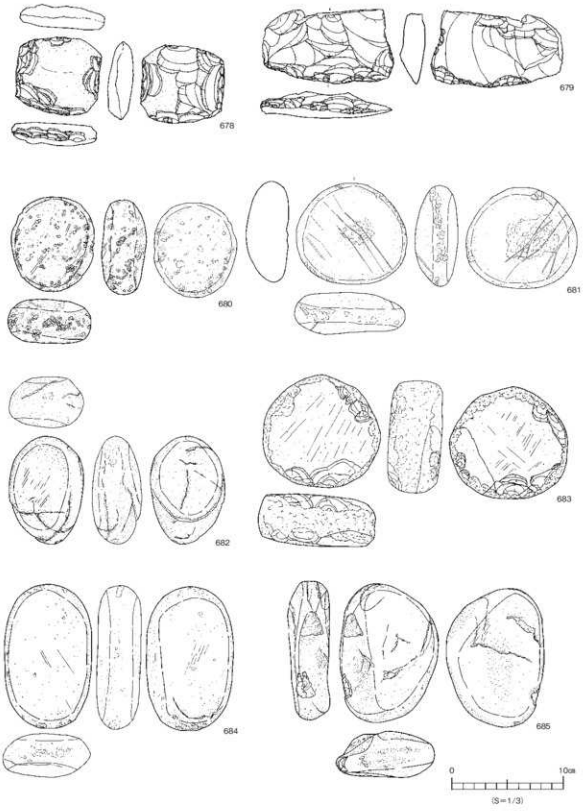
681は，砂岩の扁平な円礫を利用したもので，表裏両面に磨面のほか，それぞれの中央部分には敲打痕が円形に集中している部分がある。側縁部分にも敲打痕が観察される。通常，凹石とされるものである。682砂岩の河原石を利用したもので，表裏両面に磨面が認められる。なお，敲打痕が殆ど観察されていない。683は，表裏両面がほぼ平坦状に使用された磨面を有し，側面は全体にわたって平坦な磨面と敲打痕を持つ。部分的に使用による剥落が認められる。石材は砂岩でにある。684は，楕円形を呈するもので，表裏両面に磨面が認められる。長軸の両端には敲打痕も観察される。685は，図の裏面に磨面が認められる。また，長軸の縁辺には，敲打による使用痕が部分的に観察される。686は，裏面に磨面が観察され，長軸の一端には敲打痕が認められる。なお，加熱により赤化しており，その部分が二カ所剥落している。石材は砂岩である。



第77図　縄文時代出土石器実測図（4）



第78図　縄文時代出土石器実測図（5）



第79図　縄文時代出土石器実測図（6）

カ　敲石（第80図687～690）

687～690は敲石である。多岐にわたって利用されたと考えられるものを含め，4点を掲載した。

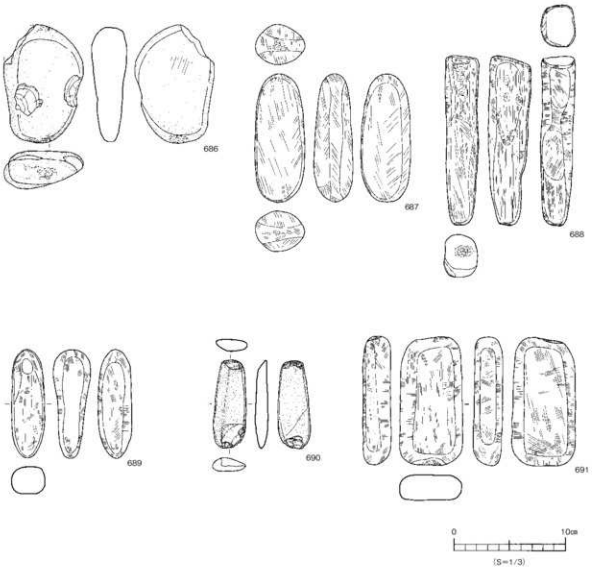
687は，細長い円礫を使用したもので長軸の両端に敲打痕が観察される。688も細長い球状の礫を使用したもので，片側の突端には著しい敲打痕が観察される。石材は砂岩である。689は，比較的小型のものを使用し，平坦面に細かい使用によると考えられる線状の傷が観察され，石器の調整具である可能性が高い。そこで，ここでは敲打具の中に入れた690は，円形に近い頁岩の細長い円礫を利用し，長軸の両端に使用痕と思われる剥離痕が観察される。なお，両端は磨れて面状に潰れており，パンチ的に使用された可能性もある。敲石の仲間として，本分類の範疇に区分した。

キ　砥石（第80図691）

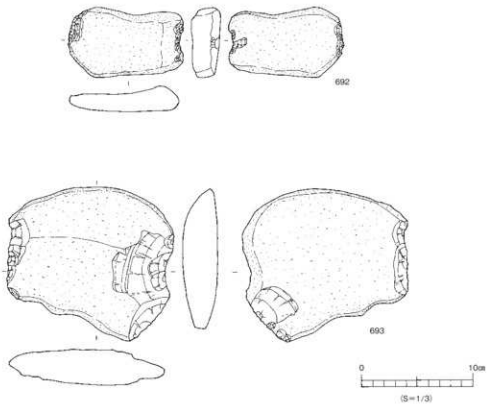
691は，長方形に近い礫を使用したもので，平坦な表裏両面を使用した砥石と考えられる。

ク　石錘（第81図692～693）

693は，頁岩の扁平に近い礫を使用し，長軸の両端に加撃を行い，凹状を形成したものである。49は，比較的大型の扁平礫を利用し，長軸の両端に粗い剥離を行い，その後敲打により，凹み状の部分を形成して石錘としたものである。



第80図　縄文時代出土石器実測図（7）



第81図　縄文時代出土石器実測図（8）

表13　縄文時代後中期土器観察表

掲図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号		類	色調		調整		胎土						備考
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	焼石	その他
23	1	X	5	XII	6872		I	黒褐	暗赤褐	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	○					
	2	X	5	XII	6957		I	にぶい赤褐	赤褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○					
	3	X	5	XII	6583		I	暗褐	褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○					
	4	X	6	XII	6157		I	黒褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○					
	5	Y	2	XI	1716	1726	II	にぶい褐	にぶい褐	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	○					接合

表14　縄文時代中・後期土器観察表

掲図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号		類		色調		調整		胎土						備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	焼石	その他
24	6	Y	3	XI	1484		III	a	にぶい橙	明褐	ナデ	ナデ	○	○			○	
	7	X	5	XII	一括		III	a	黒	黒褐	ナデ	ナデ	○	○				
	8	X	5	XII	7257		III	a	黒褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○				
	9	W	2	XI	1949		III	a	黒褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○		○	○	
	10	W	2	XI	1765		III	a	黒褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○				
	11	U	2	XI	3695		III	a	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○				
	12	X	5	XII	7174		III	a	にぶい褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○				
	13	W	2	XI	2147		III	a	にぶい橙	黒褐	ナデ	ナデ	○	○				
	14	X	4	XI	556		III	a	黒褐	灰褐	ナデ	ナデ	○	○				
	15	Y	2	XI	1720		III	a	褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○				
	16	Y	3	XII	1551		III	a	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○		○	○	
	17	W	2	X	1923		III	a	黒褐	黒	ナデ	ナデ	○	○			○	
	18	X	5	XI	5856		III	a	暗赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○			○	
	19	Y	2	XI	1709		III	a	暗赤褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○				
	20	V	1	XI	4338		III	a	暗灰黄	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○		○		○
	21	W	5	XI	5304		III	a	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○		○		
	22	W	5	XI	5178		III	a	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○		○		○
25	23	V	3	X	4771		III	b	黒褐	橙	ナデ	ナデ	○	○				
	24	Z	5	XI	2373, 2374		III	b	明赤褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	○	○					接合
	25	W	4	XI	132		III	b	にぶい褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○			○	
	26	V	1	XI	4654		III	b	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○				
	27	V	2	XI	4753		III	b	明赤褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○				
26	28	V	1	XI	4213		III	b	褐灰	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○				
	29	V	2	XI	1697		III	b	黒褐	褐	ナデ	ナデ	○	○				
	30	X	4	XI	一括		III	b	にぶい橙	暗黄灰	ナデ	ナデ	○	○				
	31	Y	5	XII	7389		III	b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○				
	32	V	1	XI	3965		III	b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○				
	33	U	2	XI	3605		III	b	灰褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○				
	34	W	6	XI	6041		III	b	明赤褐	灰褐	ナデ	ナデ	○	○				
	35	Y	2	XI	1713		III	b	黒褐	灰褐	ナデ	ナデ	○	○		○		
	36	X	5	XI	5216		III	b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○				
	37	Y	4	XI	2030		III	b	にぶい橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○				
	38	Y	3	XI	1032		III	b	橙	灰オリーブ	ナデ	ナデ	○	○				
	39	U	2	XI	864		III	b	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○		○		
	40	X	6	XII	7200		III	b	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○				
	41	Y	4	XI	2064		III	b	灰褐	明褐	ナデ	ナデ	○					
27	42	Y	5	XII	7313		III	b	褐	橙	ナデ	ナデ	○	○				
	43	X	5	XI	6678		III	b	にぶい赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○				
	44	X	5	XII	7222		III	b	暗赤褐	暗赤褐	ナデ	ナデ	○	○				
	45	Y	3	XII	1557		III	b	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○				
	46	X	2	XI	2221		III	b	にぶい赤褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○				
	47	X	5	XI	6658		III	b	黒褐	灰黄	ナデ	ナデ	○	○				
	48	W	4	XI	133		III	b	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○				
	49	U	3	X	4790		III	b	灰黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○				
	50	Y	5	XII	7024		III	b	暗赤褐	暗赤灰	ナデ	ナデ	○	○				
	51	X	5	XII	一括		III	b	黒	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○				
	52	Z	3	X	1932		III	b	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○				
	53	Y	5	XII	7116		III	b	黒褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○				
	54	X	5	XI	—		III	b	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○				
	55	V	1	XI	3642		III	b	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○				
	56	W	5	X	5572		III	b	灰褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○				
	57	X	5	XI	5922		III	b	黒褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○				
	58	X	5	XI	5803		III	b	明赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○				
	59	W	5	XI	一括		III	b	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○				
	60	X	5	XII	7164		III	b	明赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○		○		
	61	W	5	XI	5118		III	b	暗褐	褐	ナデ	ナデ	○	○				
	62	U	2	XI	3739		III	b	明赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○				
	63	X	6	XII	7181		III	b	灰褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○				
	64	V	3	XI	4518		III	b	にぶい赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○				
	65	V	1	X	3218		III	b	明褐赤	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○				
	66	Y	2	XII	1685		III	b	明赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○				
	67	V	3	VI	一括		III	b	にぶい黄橙	灰褐	ナデ	ナデ	○	○		○		
	68	X	2	—	2240		III	b	黒褐	暗オリーブ	ナデ	ナデ	○	○				

表15　縄文時代後半・後期出土土器観察表(2)

挿図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号	類	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 滑石	胎土 その他	備考
27	69	U 2	X Ⅰ	4023	Ⅲ b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	70	Y 2	X Ⅰ	4263	Ⅲ b	橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	71	W 4	X Ⅰ	520	Ⅲ b	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
28	72	W 2	X Ⅰ	2134	Ⅳ	にぶい褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	73	Z 3	X	1408	Ⅳ	にぶい褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	74	W 6	X,X Ⅰ	5672, 6065	Ⅳ	明赤褐	橙	ナデ	ナデ後ハケ	○	○						接合
	75	Y 3	X Ⅰ	5759	Ⅳ	黒褐	ｵﾘｰﾌﾞ褐	ナデ	ナデ	○	○						
	76	Y 5	X Ⅱ	7134	Ⅳ	褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○						
	77	V 1	X Ⅰ	3984, 3985	Ⅳ	にぶい黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	78	Y 5	X Ⅱ	6493	Ⅳ	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	79	W 6	X	5653, 6066	Ⅳ	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	80	V 1	X Ⅰ	4717	Ⅳ	にぶい褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	81	V2,W3	X Ⅰ	一括	Ⅳ	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ後ハケ	○	○						接合
	82	Z 3	X Ⅰ	2330 2334	Ⅳ	明赤褐	橙	ハケ	ナデ	○	○						接合
	83	X 6	X Ⅱ	7185	Ⅳ	にぶい黄褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	84	X 7	X Ⅱ	7411	Ⅳ	褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○						
	85	W 6	X Ⅰ	6068	Ⅳ	明赤褐	明褐	ナデ	ナデ後ハケ	○	○						
	86	V 1	X Ⅰ	4240	Ⅳ	暗灰黄	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	87	X 5	X Ⅱ	6571	Ⅳ	暗赤褐	暗赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	88	W 2	X Ⅰ	865	Ⅳ	褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	89	W 6	X	5656, 6062, 6063	Ⅳ	明赤褐	明褐	ナデ	ハケ	○	○						3点接合
	90	W 3	X	675	Ⅳ	明赤褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
29	91	W4,5	X Ⅰ	一括	Ⅳ	橙	橙	ナデ後ハケ	ナデ	○	○						接合
	92	Y 2	X Ⅱ	1661	Ⅳ	赤褐	褐	ナデ	ナデ後ハケ	○	○						
	93	Z 3	X	1424	Ⅳ	暗褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	94	U 3	X Ⅰ	4491	Ⅳ	黒褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	95	U 3	X Ⅰ	4107	Ⅳ	褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○						
	96	W 3	X Ⅰ	594	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	97	Y 5	X Ⅱ	7387	Ⅳ	橙	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○		○				
	98	W 2	X	1917	Ⅳ	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ハケ	○	○						
	99	Z 4	X Ⅰ	439	Ⅳ	褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	100	W 1	X Ⅰ	399	Ⅳ	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	101	Y 3	X Ⅱ	1604	Ⅳ	明赤褐	褐	ナデ	ナデ	○	○		○				
	102	W 5	X Ⅰ	4889	Ⅳ	にぶい黄褐	灰褐	ナデ	ハケ	○	○						
	103	U 2	X Ⅰ	4005	Ⅳ	明赤褐	赤褐	ナデ	ハケ	○	○						
30	104	V 1	X Ⅰ	4345	Ⅳ	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	105	X 5	X Ⅱ	6532	Ⅳ	赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ハケ	○	○						
	106	X 6	X Ⅱ	6900	Ⅳ	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	107	X 8	X Ⅱ	一括	Ⅳ	暗明褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	108	V 1	X Ⅰ	4660	Ⅳ	にぶい橙	灰褐	ナデ	ナデ	○	○						
	109	W 2	X	1903	Ⅳ	にぶい橙	明褐灰	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	110	Y 5	X Ⅱ	6858	Ⅳ	黒褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	111	Y 4	X Ⅰ	1990	Ⅳ	黒褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	112	U 2	X Ⅰ	3600	Ⅳ	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	113	W 6	X	5598	Ⅳ	にぶい黄橙	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	114	U 2	X Ⅰ	3796	Ⅳ	明赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	115	Y 2	X Ⅱ	1663, 1662	Ⅳ	灰褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	116	V 2	X Ⅰ	4417	Ⅳ	褐灰	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	117	U 1	X Ⅰ	3902	Ⅳ	にぶい褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	118	U 2	X Ⅰ	3746	Ⅳ	黒褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	119	W 3	X Ⅰ	651	Ⅳ	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	120	X 2	X Ⅱ	2284	Ⅳ	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	121	Y 2	X Ⅱ	1690	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ後ハケ	ナデ	○	○						
31	122	X 6	X Ⅱ	6792	Ⅴ a	にぶい橙	明褐	ナデ	ナデ	○	○						
	123	X 5	X Ⅱ	一括	Ⅴ a	にぶい褐	黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	124	X 5	X Ⅱ	一括	Ⅴ a	黒褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
32	125	X 2	X Ⅱ	2278	Ⅴ a	灰褐	にぶい黄褐	ハケ	ハケ	○	○						
	126	X 6	X Ⅱ	6410	Ⅴ a	にぶい黄褐	明黄褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	127	X 4	X Ⅰ	547	Ⅴ a	黄褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
33	128	Z 2	X Ⅰ	1747	Ⅴ a	明橙	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	129	X 5	X Ⅱ	6579	Ⅴ a	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	130	W 2	X	1888, 755	Ⅴ a	にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	131	X 5	X Ⅱ	一括	Ⅴ a	暗赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	132	X 5	X Ⅰ	6085	Ⅴ a	灰黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	133	V 1	X Ⅰ	4339	Ⅴ a	にぶい赤褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	134	X 6	X Ⅱ	6961	Ⅴ a	黒褐	黄	ナデ	ナデ	○	○						
	135	V 1	X Ⅰ	4342, 4330	Ⅴ a	黒褐	黄褐	ナデ	条痕	○	○						接合
	136	X 5	X Ⅱ	6154, 6335	Ⅴ a	赤褐	明赤褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○			○			接合
34	137	Z 2	X Ⅰ	1748	Ⅴ a	にぶい褐	黒褐	ナデ	ナデ、指頭圧痕	○	○						
	138	Y 4	X Ⅰ	2060	Ⅴ a	明赤褐	灰黄褐	ナデ	ハケ	○	○						
	139	X 6	X Ⅱ	6922	Ⅴ a	黒褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	140	V 1	X Ⅰ	2902, 3503, 3902, 3903	Ⅴ a	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						4点接合
35	141	Y 2	X Ⅰ	1706	Ⅴ a	にぶい黄橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○		○				
	142	X 5	X Ⅱ	6154	Ⅴ a	褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	143	Y 3	X Ⅱ	1520	Ⅴ a	灰黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						

表16　縄文時代後中・後期出土土器観察表(3)

挿図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号	類	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 滑石	胎土 その他	備考
35	144	U 2	XⅠ	3723	V a	にぶい赤褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	145	X 5	XⅡ	6371	V a	黒	極暗赤褐	ナデ	条痕	○	○						
	146	V 2	XⅠ	3355, 3571, 3856	V a	暗褐	褐	条痕後ナデ	ナデ	○	○						3点接合
	147	W 5	XⅠ	5063	V a	褐	にぶい黄橙	ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	148	X 5	XⅠ	6688	V a	灰黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	149	Z 5	XⅠ	2392, 2393, 2388, 2403, 2402	V a	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ後ハケ	○	○						5点接合
	150	Y 3	XⅠ	1496	V a	暗茶褐	暗赤灰	ナデ	ナデ	○	○						
	151	W 5	XⅠ	4896	V a	にぶい黄	オリーブ褐	ナデ	ナデ	○	○						
	152	W4.5	XⅡ	一括	V a	にぶい赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○			○			接合
	153	W 5	XⅠ	5050	V a	明黄褐	明黄褐	ナデ	条痕	○	○						
	154	X 5	XⅡ	6156	V a	赤黒	明赤褐	ナデ	条痕	○	○						
	155	V 1	XⅠ	4363	V a	灰黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	156	Y 3	XⅠ	1454	V a	明赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	157	V 1	XⅠ	4646	V a	にぶい褐灰	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
36	158	W 5	XⅠ	5235	V a	にぶい赤褐	灰黄褐	ナデ	ハケ	○	○						
	159	V 1	XⅠ	4221	V a	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	160	V 1	XⅠ	4713	V a	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	161	X 6	XⅡ	6202	V a	浅橙	浅橙	ナデ	ナデ	○	○						
	162	X 6	XⅡ	7082	V a	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	163	X 4	XⅠ	一括, 106	V a	暗褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	164	Y 2	XⅡ	1624	V a	にぶい黄橙	黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
37	165	Z 2	XⅠ	1745	V a	灰褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	166	V 1	XⅠ	3966	V a	浅黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○			○			
	167	X 5	XⅡ	8553, 8554, 8543, 8542, 6864, 6985	V a	にぶい橙	明褐灰	ナデ	条痕後ナデ	○	○						6点接合
	168	W 5	XⅠ	4900, 5268	V a	にぶい黄橙	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						接合
	169	X 4	XⅠ	一括	V a	黒褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	170	W 2	X	765	V a	オリーブ黒	きらい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	171	X 5	XⅠ	5878	V a	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	172	V 1	XⅠ	4643	V a	灰黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	173	V 2	XⅠ	3823	V a	にぶい褐	浅黄	ナデ	ナデ	○	○						
	174	X 6	XⅡ	6755	V a	黒褐	灰褐	ナデ	ナデ	○	○	○					
38	175	W 5	XⅠ	4992	V a	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	176	W 5	XⅠ	4892	V a	黒	黒褐	ナデ	条痕	○	○	○					
	177	U 2	X	3526	V a	灰黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	178	X 6	XⅠ	6833	V a	黒褐	黄褐	ナデ	条痕	○	○						
	179	X 2	XⅠ	2191	V a	オリーブ黒	オリーブ黒	ナデ	ナデ	○	○						
	180	V 1	XⅠ	3632	V a	明黄褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○						
	181	X 5	XⅡ	一括	V a	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	182	V 2	XⅠ	3809	V a	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	条痕	○	○						
	183	V 1	XⅠ	4756, 4758	V a	にぶい黄橙	黄橙	ナデ	条痕後ナデ	○	○						接合
	184	V 1	XⅠ	3634	V a	にぶい黄橙	オリーブ褐	ナデ	条痕	○	○						
	185	U 1	XⅠ	4142	V a	にぶい黄	黄灰	ナデ	ナデ	○	○						
	186	V 1	XⅠ	2087	V a	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○			○			
	187	X 5	XⅡ	6518	V a	褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	188	Z 3	X	1946, 988	V b	にぶい赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	189	Y 4	XⅠ	2038	V b	明赤褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○						
39	190	Z 4	XⅠ	480	V b	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	191	U 2	XⅠ	4045	V b	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	192	Z 3	X	1413	V b	黒褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	193	W 3	XⅠ	624	V b	明褐	橙	ナデ	ナデ後ハケ	○	○						
	194	Y 4	XⅠ	2037	V b	黒褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	195	V 1	XⅠ	4621	V b	灰オリーブ	灰オリーブ	ナデ	ナデ	○	○						
	196	X 5	XⅡ	一括	V b	黒褐	灰褐	ナデ	ハケ	○	○						
	197	V 1	XⅠ	4366	V b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ハケ	○	○						
	198	Y 5	XⅡ	7354	V b	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	199	Y 5	XⅡ	6969	V b	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	200	W 4	XⅠ	331	V b	橙	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	201	Y 3	XⅠ	1486	V b	黒	にぶい赤褐	ナデ	ハケ	○	○						
	202	V 2	XⅠ	2841	V b	赤褐	褐灰	ナデ	指頭圧痕	○	○						
	203	Y 5	XⅡ	6485	V b	にぶい褐	にぶい黄褐	ナデ	ハケ	○	○						
	204	V 1	XⅠ	4173	V b	明赤褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	205	Y 4	XⅠ	1993	V b	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	206	X 4	XⅠ	554	V b	黒褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○						
	207	Y 4	XⅠ	2054	V b	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
40	208	X 5	XⅡ	6333	V b	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	209	X 4	XⅠ	5224	V b	黒褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	210	W 6	X	5673	V b	黒	暗褐	ナデ	ナデ	○	○						
	211	X 2	XⅠ	2192	V b	にぶい褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	212	Y 2	XⅡ	1675	V b	明赤褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	213	X 5	XⅠ	6607	V b	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	214	X 5	XⅡ	6299	V b	黒褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	215	Z 2	XⅠ	1755	V b	暗赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	216	X 5	XⅡ	一括	V b	暗褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○						
	217	V 3	XⅠ	4525	V b	赤褐	褐	ナデ	ナデ	○	○						
	218	X 2	X	1806	V b	黒褐	暗オリーブ褐	ナデ	ナデ	○	○						

表17　縄文時代中・後期出土土器観察表（4）

挿図	レイアウト番号	出土区	層	取上番号	類	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 混石	胎土 その他	備考
	219	U 1	X Ⅰ	4132	Ⅴ b	黄灰	灰黄	ナデ	ナデ	○	○						
	220	X 5	X Ⅱ	一括	Ⅴ b	暗赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	221	Y 1	X Ⅰ	一括	Ⅴ b	褐灰	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	222	X 4	X Ⅰ	501	Ⅴ b	暗褐	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	223	Y 4	X Ⅰ	1270, 1989	Ⅴ b	褐灰	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	224	X 5	X Ⅱ	6359, 6358	Ⅴ b	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	条痕	○	○						接合
	225	Z 2	X Ⅰ	1742	Ⅴ b	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
41	226	Y 5	X Ⅱ	7362	Ⅴ b	にぶい赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						
	227	W1,2	X Ⅰ	2189, 1838	Ⅴ b	明赤褐	赤褐	ナデ	ハケ	○	○						接合
	228	X 6	X Ⅱ	7200	Ⅴ b	黒	暗赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	229	V 1	X Ⅰ	4177	Ⅴ b	灰褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	230	Y 6	X Ⅱ	7079	Ⅴ b	暗赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	231	X 6	X Ⅱ	一括	Ⅴ b	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	232	V 1	X Ⅰ	4636, 3970	Ⅴ b	明赤褐	黄褐	ナデ	ナデ後ハケ	○	○						接合
	233	Y 3	X Ⅰ	1463	Ⅴ b	灰黄	暗オリーブ褐	ナデ	ハケ	○	○			○			
	234	X 5	X Ⅱ	7223	Ⅴ b	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	235	W 2	X Ⅰ	734, 2115	Ⅴ b	褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	236	Y 4	X Ⅰ	1043	Ⅴ b	赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	237	U 1	X Ⅰ	4296	Ⅴ b	黒褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	238	W 2	X Ⅰ	4441	Ⅴ b	にぶい褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	239	V 1	X Ⅰ	4224	Ⅴ b	にぶい褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	240	W 3	X Ⅰ	629	Ⅴ b	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ハケ	○	○						
	241	Z 4	X Ⅰ	2085	Ⅴ b	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	242	U 1	X	3170	Ⅴ b	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	243	X 5	X Ⅰ	6602	Ⅴ b	暗赤褐	橙	ナデ	ハケ	○	○						
	244	X 5	X Ⅰ	5215	Ⅴ b	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	245	V 1	X Ⅰ	4168	Ⅴ b	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	246	Y 5	X Ⅱ	2144	Ⅴ b	極暗赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
42	247	X 5	X Ⅱ	一括	Ⅴ b	灰褐	暗褐	ナデ	ナデ	○	○						
	248	V 1	X Ⅰ	4159	Ⅴ b	黒褐	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	249	X 6	X Ⅱ	6799	Ⅴ b	黒	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	250	V 1	X Ⅰ	3631	Ⅴ b	にぶい橙	灰黄褐	ナデ	ハケ	○	○						
	251	Y 5	X Ⅱ	6968	Ⅴ b	にぶい褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○						
	252	V 2	X Ⅰ	3824	Ⅴ b	灰褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	253	X 5	X Ⅰ	5723	Ⅴ b	暗褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	254	Z 3	X Ⅰ	1968	Ⅴ b	黒褐	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	255	W 2	X Ⅰ	2126	Ⅴ b	橙	褐灰	ナデ	ナデ	○	○						
	256	U 3	Ⅵ	一括	Ⅴ b	灰褐	橙	ナデ	ナデ	○	○			○			
	257	X 6	X Ⅱ	6777	Ⅴ b	暗褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	258	X 5	X Ⅱ	一括	Ⅴ b	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	259	X 5	X Ⅱ	一括	Ⅴ b	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	260	Y 3	X	1442	Ⅵ	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○						
	261	X 2	X Ⅱ	7111	Ⅵ	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	262	X 5	X Ⅱ	一括	Ⅵ	にぶい橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	263	X 5	X	5738, 9788	Ⅵ	灰	橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	264	X 5	X Ⅰ	-	Ⅵ	黄灰	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	265	V 2	X Ⅰ	3553	Ⅵ	暗灰黄	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	266	X 6	X Ⅱ	6385	Ⅵ	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	267	W 5	X Ⅰ	5080	Ⅵ	灰黄	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	268	Y 3	X Ⅰ	1979	Ⅵ	黄灰	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	269	U 3	X Ⅰ	4508	Ⅵ	にぶい黄褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	270	X 5	X Ⅰ	5833	Ⅵ	にぶい黄橙	黒	ナデ	ナデ	○	○						
43	271	U 2	X	3399	Ⅵ	にぶい褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	272	X 5	X Ⅱ	6883	Ⅵ	暗赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	273	U 2	X X Ⅰ	2509, 4017, 4021, 4051	Ⅵ	にぶい黄橙	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						4点接合
	274	W5,6	X Ⅰ	4950, 5981	Ⅵ	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	275	Z 4	X Ⅰ	2082	Ⅵ	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○						
	276	X,W5	X X Ⅰ	4970, 5903	Ⅵ	にぶい黄	橙	ナデ	ナデ	○	○						接合
	277	X 5	X	5410	Ⅵ	浅黄	浅黄	ナデ	ナデ	○	○						
	278	Y 4	X Ⅰ	2074	Ⅵ	にぶい赤褐	暗赤褐	ナデ	ナデ	○	○						
	279	X 2	X Ⅰ	2250	Ⅵ	にぶい黄橙	灰	ナデ	ナデ	○	○						
	280	X 6	X Ⅱ	6384	Ⅵ	明赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
	281	Y 3	X	1432	Ⅵ	にぶい黄橙	にぶい黄	ナデ	ナデ	○	○						
	282	Y 2	X Ⅰ	1729, 1733, 1734	Ⅵ	橙	暗褐	ナデ	条痕後ナデ	○	○						3点接合
	283	Y 4	X Ⅰ	2061	Ⅵ	橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○			○			
44	284	W 4	X Ⅰ	257	Ⅵ	浅黄橙	褐灰	ナデ	ナデ	○	○			○			
	285	X 6	X Ⅱ	6805	Ⅵ	褐	灰褐	ナデ	ナデ	○	○			○			
	286	X 6	X Ⅱ	6895	Ⅵ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○						
	287	X 2	X Ⅰ	2273	Ⅶ	灰黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	○	○	○					
	288	W 2	X	750	Ⅶ	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
45	289	X 6	X Ⅱ	6783, 6912	Ⅶ	褐灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	○	○						接合
	290	W 2	X Ⅰ	4272	Ⅶ	黄褐	暗灰黄	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	○						
	291	U 2	X Ⅰ	3724, 3793	Ⅶ	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ後ハケ	○	○						接合
	292	X 5	X Ⅱ	6537	Ⅶ	暗褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○						
46	293	X 6	X Ⅱ	6223	Ⅶ	暗灰黄	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○						